

MOBILE SUTS

MS図鑑

RX-78

ガンダム



[GUNDAM EX-0]



[GP-01-Plus]

MSの博物誌

RX-78の型式番号を持つ 一族たちの大図鑑

RX-78 GUNDAM



[FULL ARMOR GUNDAM]





MOBILE SUITS

MS図鑑

RX-78

ガンダム

RX-78-2ガンダム / RX-78-1プロトタイプガンダム / RX-78-1プロトタイプガンダム (ロールアウトタイプ1) / RX-78-3 G3ガンダム / RX-78SPガンナーガンダム / FA-78-1フルアーマーガンダム / FA-78-1Bフルアーマーガンダム(タイプB) / FA-78 [C] フルアーマーガンダム隠匿タイプ / FA-78 [C] フルアーマーガンダム隠匿タイプ(タイプ2) / FA-78-2ヘビーガンダム / FA-78-2ヘビーガンダム(2号機) / RX-78NT-1ガンダムNT-1アレックス / RX-79 [G] 機密型ガンダム / RX-79 [G] Ex-8ガンダムEx8 / RX-78-4ガンダム4号機(GO4) / RX-78-5ガンダム5号機(GO5) / RX-78-6ガンダム6号機 / RX-78-7ガンダム7号機 / FA-78-3フルアーマーガンダム7号機 / HFA-78-3重武装フルアーマーガンダム7号機 / RX-78XXガンダムビクター / RX-79BD-1ブルーディスティニー1号機 / RX-79BD-2ブルーディスティニー2号機 / RX-79BD-3ブルーディスティニー3号機 / RAG-79G-1水中型ガンダム / RX-78GP01ガンダム試作1号機 / RX-78GP01-Fbガンダム試作1号機フルバーニアン / RX-78GP02Aガンダム試作2号機 / RX-78GP03ガンダム試作3号機 / RX-78GP03Sガンダム試作3号機ステイメン / RX-78GP04ガンダム試作4号機 / ACX-04ガーベラ・テトラ



9784575465211



1929476018007

©創通・サンライズ

定価: 本体1800円 + 税

雑誌 63982-98 Printed in Japan ©Futabasha 2020

ISBN978-4-575-46521-1
C9476 ¥1800E

グレートメカニックススペシャル

M S 図鑑

R
X
-
78

ガンダム

モビルスーツ文化を
よりよく知る

双葉社

MOBILE SUTS

MS図鑑

RX-78

ガンダム



[GUNDAM K29]



[GP-01-9b]



[FULL ARMOR GUNDAM]



MOBILE SUITS

MS図鑑

RX-78

ガンダム



9784575465211



1929476018007

1 価格 1800円

定価：本体1800円＋税

雑誌 63982-98 Printed in Japan ©Futabasha 2020

ISBN978-4-575-46521-1
C9476 ¥1800E

グレートメカニックス・スペシャル

MSX

磁盤

RX-78

ガンダム

双葉社

MOBILE SUITS

MS図鑑

RX-78

ガンダム



[GUNDAM EX-78]



[GP-01-FB]



[FULL ARMOR GUNDAM]



MOBILE SUITS

MS図鑑

RX-78

ガンダム

グレートメカニックススペシャル

M
S
図鑑
RX-78
ガンダム

双葉社

MS図鑑

RX-78

ガンダム

RX-78ガンダム その存在意義の起源を見る

RX-78ガンダム歴史年表 ① ガンダムと宇宙世紀の世界

RX-78ガンダム歴史年表 ② 戦乱世界におけるガンダムの戦い

RX-78ガンダムとは何をめかす?

ついでに! ガンダムつくのデザイン

機体設計の秘話 Ⅴ 作戦とガンダムの全貌

ガンダムの位置と系統 U.C.0079~U.C.0083

オールガンダム カラー設定を イラストラインアップ

Part. I 一年戦争のガンダムたち U.C.0079~U.C.0080

快撃で盛り語る ガンダム図鑑Part.1 一年戦争編

機体解説

ガンダム 78- トライプザ ガム
タイプB カウンタライ 80
ガンダム タイ 78
Aタイプ

ガンダム
ムウ

Part. II 一年戦争後のガンダム U.C.0083~

快撃で盛り語る ガンダム図鑑Part.2 次世代編

機体解説

78GP0 ガンダム1号機 4000ガンダム1号機フルバニッシュ/
ガンダム1号機
ガンダム1号機
ガンダム1号機

機動戦士ガンダムサンダーボルトのガンダムたち

機動戦士 インビュー

機動戦士 RX-78ガンダム「脱走編」の真実

ガンダムの存在意義

ガンダムはなぜRX-78の存在

01

機動戦士 機動戦士 機動戦士 機動戦士

02

機動戦士 機動戦士 機動戦士

アニメロボットの マイネロブトーン・RX-78

RX・78ガンダムは御存知の通り、テレビアニメ作品『機動戦士ガンダム』に登場するロボットである。そしてこのガンダムは、ロボットアニメの主人公メカとしてそれまでにない「兵器」という存在意義を与えられたことで、その後のアニメロボットに大きな影響を及ぼした存在だ。

巨大なロボットという存在を説明した「鉄人28号」、その後のロボットアニメのフォーマットを決定づけた「マジンガーZ」、あるいは90年代の「エヴァンゲリオン初号機」などと並び、アニメロボットの偉大なるマイルストーンなのは、いまさら言うまでもないだろう。現在ではRX・78ガンダムという機体こそ区別できなくとも、「ガンダム」という名を聞いたことがない日本人はあまりいない、というほどの存在となった。そして、2019年には放送40周年を迎えたものも存知のとおりだ。

『機動戦士ガンダム』は、当時少年漫画の1ジャンルであった「戦記もの」をロボットアニメに導入した作品だ。そして戦争を描くためにはある程度のリアリティが必

アニメロボットの革命児から
国民的キャラクターとなった

RX-78

ガンダム

その存在意義の
変遷を見る

要だったため、その描写は従来までのアニメロボットのフォーマットにある程度取り入れながら、アニメロボットという存在が、それまでにない「軍隊の中の兵器」という位置づけを与え、結果的に視聴者が「リアル」と思う世界観とドラマを描いた。

そのガンダムには当初「RX-78」という型式番号がもたらした存在しなかった。型式番号については「ガンダーク78」という案があった、ともされるが、

実際の映像では使われていない。RX・

78という型式番号は、のちの雑誌媒体で、それが公式設定化されたものである。つまりある意味ファンたちの要望によって誕生したのである。15イタル」のよう

に「RX・78ガ

ダム」という、現実の兵器のような型式番号を欲したわけだ。

ガンダムを「兵器」としてリアルに感じさせるには、型式番号は必須条件といえた。そして、型式番号の付与をはじめとした「映像作品だけでなく、ガンダム世界の中で遊びたい」というファンたちの欲求は、『機動戦士ガンダム』RX・78ガンダムを、新たなステ

ージへと誘う牽引力となっていた。そしてそれは様々な「ガンダム」の名を持つ機体たちを生み出す土壌にもなった。

おそらくそれは、『機動戦士ガンダム』の第1話「ガンダム大地上に立つ」におけるジンンの「ああ、3台目もモビルスーツだ。まだあの中にもあるかもしれないぞ」をはじめとした、ガンダムのパワがまだいくつが存在することを仄めかすセリフが端緒だっただろう。それらはイマジネーションの扉であつたのだ。

同人誌「GUNDAM」から発展したムック「宇宙舞ける戦士達 GUNDAM CENTURY」(みのり書房刊)に「ガンダムは8号機まである」と書かれ、それらは雑誌企画から派生した「MSV」にまで昇華されていた。ここまでが

RX・78ガンダムのバリエーション展開の第一期と言えただろう。いくつかの断片的なセリフから

ここまで至る道程からは、いけるガンダムに関する「設定世界観を広げることが、当時求められていたのか」ということがわかる。

そしてその後、「MSV」の模倣製品化、OVA作品展開、さらにはゲームなどで、RX・78ガンダム系のバリエーションモデルは、さらなる広がりを見せていくことになる。

「リアル」から「キラクター」へ 拡大していったRX・78

本書はそのRX・78ガンダムを図解形式でまとめ、その意義を考えてみようというものだ。ラインナップには「広義としてのRX・78」まで取り上げているが、実に40機以上のRX・78とその眷属を収録している。つまり、それだけのバリエーションが40年の間に登場したのだ。

しかし、本書を手取る方なら、これまで何度か思ったに違いない。「ガンダムは試作機で、一年戦争という短い期間の話なのに、そんなに種類があるのはどういうことか」と。「機動戦士ガンダム」

がリアルティを感じさせる表現を重視した。

作品である以上、あなたも本場に存在するかのよう

に、メカの設定的呼称を考えるのは当然ともいえる。

「機動戦士ガンダム」は、後に「リアルロボット」と

称されるジャンルの特徴となった作品である。試作機「ガンダム」があり、その量産タイプである「RGM・79ジム」が後には登場するこ

とで、作品内のリアルティを確立し、ガンダムというスペシャルな存在に認得力を与えた。だからこそ、そんなスペシャルな機体の数が多いのは納得いかな

い、という考え方だ。

また「機動戦士ガンダム」ブーム当時には「ガンダムはSFか?」という論議がSFファンを中心に熱くなされていた。つまり、過激なSFファンにとっ

ては「ガンダムはSFではない」と言いたくなる作品であったのだ。ロケットアークはあくまでエンターテインメントであるから、作劇上の面白さがリアルや理論に優先するのは当然のことともいえるが、それだけ当時のファンが熱心だったことの証だろう。

一方「機動戦士ガンダム」は「ブーム」を巻き起こしたタイトルである。「ブーム」とはすなわち一時的な流行である。RX・78は最初から飛びついたのは、大学生・高校生、あるいは社会人といった今でいうハイエンド層の若者たちであり、彼らは作品の「実」の部分に反応していた。

これに好して、同時期に起きた「ガンブラーム」を牽引したのは小中学生の層であり、こちらのブームの影響を受けて、より幅広い人たちがファンとなっていた。そして彼らはあはれ意味「リアル」

だけでなく「ヒーロー性」も求めており、作品内で絶対的な存在であるガンダムというキラクターのさらなる拡充を欲していた。

そんな初期ブーム時代の象徴は、フルアーマーガンダムと言っている。機体の装甲と火力を強化するのは、実はガンキャノンとは同じコンセプトではあるのだが、やはりガンダムの姿が必要であり、実際にさらけ出された。

そして、ガンダムシリーズは、リアルというコンセプトを残しながら、キラクターの増補・新造へと進んでいくことになる。「ミリタリー」でも「SF」でもない、独自の「ガンダムワールド」を形成していくことになる。

そして40年の間に登場したRX・78系統をはじめとしたガンダムたちは、オリジナルのRX・78より華麗し、非常に幅広いものとなっている。むしろ、オリジナルデザインはすでに「クラシック」と呼んでも差し支えない。そして未来にもその先はありやうだ。

本書を通じて、これまでの40年のRX・78系を振り返りつつ、おそらくさらなる発展を見せるであろう、その先に思いを馳せてもらえれば幸いである。



現実世界におけるガンダムの実像

発売日	発売品
1979年 4月7日	機動戦士ガンダム放送開始 第1話、ガンダムは第一、マジンガーは登場
1980年 1月26日	機動戦士ガンダム 放送終了 全43話 第1巻は、144ページ、100ページのガンダム
7月	ガンダムプラモデルシリーズ発売開始 発売元はタミー
12月	ガンダム プラモデル 00 発売
1981年 3月14日	劇場版 機動戦士ガンダム I 公開
7月11日	劇場版 機動戦士ガンダム II 戦士墓 公開
7月	機体模型 ラバラルル攻 宇宙要塞・ハバラルク・クワイ・オニオン・フレイム 発売
8月	情義無量 ジャパンに敵を、テキサスの救助 コメテノスズル 発売
9月	G・アーマー プラモデル 144 発売
11月	メガロク、モビル ガダム プラモデル 100 発売
12月13日	劇場版 機動戦士ガンダムIII めいりあいの宇宙編 公開
1982年 3月	リアルタイプガンダム プラモデル 100 発売
8月	コブラスター プラモデル 144 発売
1983年 4月	MSVシリーズ発売開始
6月	プロトタイプガンダム プラモデル 144 発売
7月	ガンダムフルアーマータイプ プラモデル 144 発売
10月	ガンダムフルアーマータイプ プラモデル 100 発売
4月	バリエーションガンダム プラモデル 144 発売
8月	G・アーマー プラモデル 200 発売
12月	バリエーションガンダム プラモデル 100 発売
1985年 3月22日	機動戦士ガンダム 放送開始
1986年 3月1日	機動戦士ガンダムと 放送開始
1988年 3月12日	劇場版 機動戦士ガンダム 逆襲のシャア 公開
1989年 3月23日	OVA機動戦士ガンダム0080ポケットの中の戦争 第1巻発売

[illegible]



1980年	3月	ガンダム10周年記念ゼンザルHVC(ハイパーカラー)発売 機動戦士ガンダム 91 公開
1981年	3月16日	機動戦士ガンダム 91 公開
1982年	5月23日	OVA機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第1巻発売
1983年	8月28日	劇場版 機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第2巻の発売
1984年	4月22日	機動戦士Vのガンダム 放送開始
1985年	2月10日	機動戦士Vのガンダム 放送開始
1986年	7月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第2巻の発売
1987年	2月10日	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第3巻の発売
1988年	4月22日	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第4巻の発売
1989年	5月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第5巻の発売
1990年	6月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第6巻の発売
1991年	7月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第7巻の発売
1992年	8月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第8巻の発売
1993年	9月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第9巻の発売
1994年	10月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第10巻の発売
1995年	11月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第11巻の発売
1996年	12月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第12巻の発売
1997年	1月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第13巻の発売
1998年	2月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第14巻の発売
1999年	3月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第15巻の発売
2000年	4月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第16巻の発売
2001年	5月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第17巻の発売
2002年	6月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第18巻の発売
2003年	7月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第19巻の発売
2004年	8月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第20巻の発売
2005年	9月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第21巻の発売
2006年	10月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第22巻の発売
2007年	11月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第23巻の発売
2008年	12月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第24巻の発売
2009年	1月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第25巻の発売
2010年	2月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第26巻の発売
2011年	3月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第27巻の発売
2012年	4月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第28巻の発売
2013年	5月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第29巻の発売
2014年	6月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第30巻の発売
2015年	7月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第31巻の発売
2016年	8月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第32巻の発売
2017年	9月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第33巻の発売
2018年	10月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第34巻の発売
2019年	11月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第35巻の発売
2020年	12月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第36巻の発売
2021年	1月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第37巻の発売
2022年	2月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第38巻の発売
2023年	3月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第39巻の発売
2024年	4月	機動戦士ガンダム0088 STARBUST MEMORY 第40巻の発売

[illegible]

・おもな出来事内では、以下にラモテルの製品名が11発表当時のものを記載。一部プラモテルの製品フラントやケムンリーなどは以下の略称で表す。
HG=ハイアクトル HGUC=ハイアクトル 4ニハサルヤンチー J=MS=マスタークレール PG=ハーフ、クトゥール RG=リアルグレート
PB=プレイス・オブ・ハンガリー・現代安定ナール SFC=スフィアーズ SS=セクター PS=プレイステーション PS2=プレイステーション 2

RX-78

ガンダムとは

何なのか!?

RX-78ガンダムとは何なのか。
もちろんそれは『機動戦士ガンダム』に登場する主役メカであり、
作品世界内的には地球連邦軍の試作モデルスーツであることは周知の通り。
ロバート・アズノの主役メカとから
「特別なものは当たり前と思うかもしれないが、
登場当時、新機種であった『機動戦士ガンダム』において、
その存在はすでに考え抜かれており、またその後の『ガンダム世界』の広がり、
さらなる設定などが加わり、現在の形になった。
ここからは、宇宙世紀の世界観内、
そしてロバート・アズノ作品の主役メカとしてのRX-78について解説していく。

ジムやザクに対する ガンダムの存在意義とは!?

RX-78-2ガンダムは、地球連邦軍初の
試作モデルスーツ（M.S.）の1機である。
宇宙世紀0079年9月のサイド7における
ジオン公国軍の強行偵察により、試作機
のRX-78-2ガンダムが全損した。この
戦いに投入され、大きな戦果を挙げたことに
より、一年戦争でもっとも知られる機体と
なった。RX-78ガンダムこそは、RX計画
画とV作戦という大M.S.開発プロジェクト
の成果であり、白兵戦用のRX-78ガン

ダムだけでなく、中距離
支援用のRX-77ガンキャ
ン、長距離支援用のRX-75ガン
タも開発された。そしてRX計画とは、

開戦の1年前、宇宙世紀0078年3月に
地球連邦軍により発動されたプロジェクト
である。この時点ではジオン公国軍の
新兵器であるM.S.ザクを研究する、と
いうレベルのものだったともいわれる。

一方、V作戦とは一年戦争開戦から3
か月後の0079年4月1日に発動され
た計画である。これは一年戦争縮短でM
S-06ザクIIの戦果を目の当たりにした



MS性能くらべ ガンダムvsザクvsジム

- 本体重量
- 全機重量
- ジェネレーター出力
- スラスター推力
- センサー有効半径



RX-78-2
ガンダム

■	43.4t
■	60.0t
■	1,380kW
■	55,500kg
■	5,700m



MS-06
ザクII

■	56.2t
■	67.1t
■	976kW
■	43,300kg
■	3,200m



RGM-79
ジム

■	41.2t
■	58.8t
■	1,250kW
■	55,500kg
■	6,000m

RX-78-2ガンダムを開発する地球連邦軍としてみると、対抗するMS-06ザクIIを上回る高性能機であることは絶対的の必須条件なので、すべての値がMS-06より高いのは当然の結果といえる。それを維持しつつ生産に適した最適化を施したのがRGM-79ジムだ。機体の外観が流線型なのは、生産効率向上に対する簡素化といっている。

地球連邦軍による、ザクに對抗するMSの開発競争、ならびにその母艦の建造、運用方法などの兵器体系を確立。整備まで視野に入れた一大戦略構想だ。V作戦の成功により、RX計画はその中に取り込まれ、その成果としてRX-78ガンダムの生産タイプ、RGM-79ジムが登場した。

なぜRGM-79ジムが本命だったのか。それはRX-78ガンダムとRGM-79ジム、MS-06ザクIIのカタログスペックを見れば明らかだ。RGM-79はジェネレーター出力とスラスター推力はMS-06の約1.3倍だが、重量は9割以下。これはMS-06どころか、MS-07Bグフ、MS-09ドムなどよりも高性能であった。

対してRGM-79の原型機であるRX-78、2ガンダムのスペックは、ジェネレーター出力こそ1割ほど上回っているものの、重量ではRGM-79の方が3.4%軽く、センサー有効半径もRGM-79の方が5%広い。実質的にはそれほど性能差がないといえるだろう。確かに武装や装甲の性能面で差はあるものの、RGM-79はきわめて優れた機体だったのだ。そもそも試作機の目的は本命である生産機に向け、不具合、欠点の解消などが主眼となるため、通常は実戦に投入されることはほぼなく、その案や仕様が生産機と異なることもはばない。

しかし、「機動戦士ガンダム」という作品の中で、ごく普通の少年が、偶然軍の最高機密に触れてしまい、それを使い活躍するという、現実的にはあまり考えられないが、ロボットアニメとしては必要な作戦を成立させるためには、ロボットを特別なものに仕立てなければならぬ。その方便と

しての「試作機」という存在はまさに「発明」にあふれあふれていたといえるだろう。そしてその「試作機」というエクス・ニヒスがあるからこそ、現実におけるガンダム世界は、その後40年発展し続けるのだ。

また、現在の作品内設定の視点で考えると、RX-78ガンダムは純然たる試作機ではなく「検証実験機」と呼ぶ方が正しいだろう。つまり、のちにRGM-79に搭載されるかもしれない新しいテクノロジーの実証、あるいは同じ設計思想でどこまで能力を向上させることができるか、という実験を行う機体ということだ。おそらく、RX-78もRGM-79もその基礎設計や、ジェネレーターなどの機器は同系列だろう。同じ規格の上に高価な教育型コンピュータやルナ・チタニウム合金の装甲、ビームライフルの装備など、様々な実験的要素を投入することで、極限までの性能向上を目指す。その成果が後のRGM-79系統に繋がっていくだろう。

RX-78、2ガンダムが予期せぬ実験投入で成果を得たことは、イレギュラーな出来事であった。だからこそ伝説的だ。後の宇宙世紀の世界にその名が広く浸透した。そして実験的、あるいはごく少数が製造された能力の高い機体はその名が継承されることとなった。もちろん、アニメーションの「ガンダム」を登場させる必要がある必要もあったが、それは結果的に設定とキャラクターの広がりというシナジを生み出し、40年にわたるブランドインクの成功に繋がったといえる。次項からは、そのRX-78、2ガンダムという機体を検証していこう。

ココが
スゴいぞ
!!

ガンダム 7つのポイント

まずは単純に「ガンダムは何がすごいのか」を7つのテーマで検証しつつ紹介していこう。物語と設定がうまくみ合わさった実に絶妙な存在であることがわかるだろう。

01

とにかく硬い! ルナ・チタニウム合金

カラムダの最大の特徴のひとつが、その
堅牢な合金だ。これは ルナ・タニウム
合金と呼ばれるに存在する ルノー
増強された合金である。その合金は極め
て硬く、ゆえに、その合金も固難な結
核で高価なものとなり、精練技術の難し
さにも 量産性には 不利な面を有する
それをわざわざモビルスーンの抜板
材として使用した背景には、RX-7のカ
ラムダに搭載される教育型コンピュータ
の学習成果を持つべく、その生存性
= 耐久力とハリビティ の高さに格別
の配慮が払われているためといえる。つ
まり金に糸目を通すように採用された素材
とされているのだ。

偶然から戦線に投入されたRX-78-2カ
ンタムの初期の戦いにおいて、ほぼ萬人
のハイコロトであるアムロ・レイが、驚く
べき戦果を挙げたものも、まさに「カ
ンタムの性格のおかげ」に他ならない。
シカシ人々がすでに大活躍できるほど戦
場は甘くはない。その最大の動力とな
ったのは、紛れもなくカンダムが堅牢な
装甲を持つからであった。つまり、例え
アムロかどんなに致命的な失敗をしても
生き帰ることができるのだ。

これは口ホ トアニメの歴史を振り返

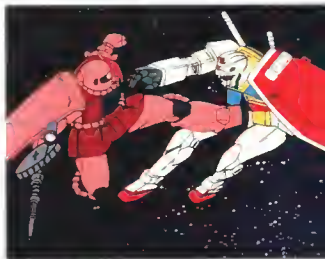
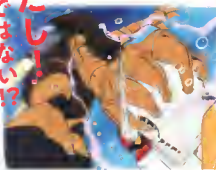
てみてゐる。それはまた特殊な例ではなく、マシンガンへの強さの源の一つに「超合金」があったことと大して差はない。伝統的なものである。こうした防弾力の高さは、アニーモロフに必須の要素の一つであり、RX-78ガンダムがザク・マシンガンの近距離射撃に耐えられたことは、すなわち彼が「黒鋼」を意味すると言っている。だから「あのヘルムースはハゲモノ」なのだ。少年兵の成長を描く物語としては必要不可欠な要素、特に緊要な被甲なのだ。

一方 設定的にはこのカ・チラム合金は、のちに安価に精錬製造できる「カチラム合金」へ発展し、モルブスに標準的に採用されることになり一般化していく（一種の歴史的ともいえる）！ たたし、強引にこそがその特徴で実用化には、強いゆきを發揮する反面、兵兵器の発展にはかえりとも弊になり、 収束とヒーム兵器はまさに盾と矛の間にあり、いちこそきという様相を呈するところとなる。 作劇的には、アムロの超能機技術の飛躍的向上により、堅牢な装甲は必要でないこととなり、 堅牢もあり カンダムの性能よりアムロの能力が優る、結果的にトランスの取れた描写がなされていくことになった。



口径120mmの速射砲!
ザク・マシンガン

●MS 06ザクザク 主兵器 炸薬を使用する高機動兵器。その口徑は現代の主戦車の主砲と同 である。それをマンガンノドよ に通射すると 程当る威力を誇る重火器といえる。それも驚くべきザクザク。ルナ・チタニウム合金おけるべ



會場闘戦、強打され、も、
「撃たれども、大してダメージを負わ、
カンダム、とにかく強い装甲である。

物語が通しと、カラムの装甲が、無敵にならずに、格子も作中で描かれる。演出に応じて硬度が変化する。見えることも珍しくはない。



◆め、た、壊れないカンタム
か、こみ、硬体は、傷かつ、ノ
ン、衝撃的なものになる。それ
と同時に、対峙する敵の新型機
の、つさも明確、伝わるの、ある

モビルスーツ初の
ビーム兵器を実用化

PR-78 カタログの強さのもう一つの要素は、ヒーム兵器の採用した「オンコ公園型」ではまた強力なヒーム兵器を艦艇に搭載できずであり、モヒートロサイズの実用化は実現していなかった。しかも その威力は戦艦の主砲並であり、艦対艦・MS-06 対艦を撃破できる威力を持つ、というだけでなく、場合によっては連弾砲撃などの宇宙戦術をも一撃で撃退するものも可能であった。ヒーム兵器の運用には「シュレタール」出力が大きく関与し、MS-06 対艦ではさらに上回る出力のPR-78-2 カタムは、その余剰出力によりヒーム兵器が運用可能であった。一方 RGM-78 型は10%ほどの出力が低く設定され、機行するとヒーム・スプレーカによるヒーム・フラッシュに比べて低下したばかりく、本来はこうした装備で十分なはずなのに、そのためのアンバーレンは「オムコ公園」が一年戦争末期にMS-14 対艦カラムを投入するまで続き、カタムのお助けを担い果たすことになる。アンバーレンとは、必要時や損傷を招きやすい機動軌道・カタム上にとどめて 強力な武器は必須であった。主砲・ロケットであることと目で見わかれさせるヒームの派生とその効果が必要だったのだ。以降、カタム作品ではヒームの登場とヒーム表現の両面には定着のものとなり、カタム作品の12のアイコンに、ないでいいかいが



▲、タム、1 格闘戦用装備もヒム兵器を獲 ヒムて形成され可は容易にモヒルス ノを斬り割



ビーム以外の 様々な武器

FX-72B2カラムはヒーム兵器以外にも数多の武器の選択が可能にしている。主要兵器としては大口ロケット弾であるハイパー・バスターカッター ヒーム兵器(使用できる、あるいはない)の形状や見分ける対戦戦艦など、大質量兵器は使用可能な場合、選択できる。近接戦闘時にはハバカン銃(カトリオン銃) 基本的な、対物 対人(絶大な近接戦を発揮する)が使い易く次第でモルセル系にも有効な 近接戦闘用のヒーム・サーベルは オラコ公団のヒームの近接兵器より威力は高く 対モルセル系に絞られているが 艦載や構造物など、と近似的にものを破壊するまで一付けた 絶大な兵器とヒーム兵器を剣先の一歩に事なかせるヒーム・シェパリンは威力も高い。その他にも大質量の打突兵器として威力のバスター系のカタム・ハマー 系その他鋭く ロケット推進による威力を強化したハイパー・ハマーも有るが 使用条件によっては最悪的な これら4アイテムも作品としては戦艦のハリエンヌを破壊し 反乱軍崩壊する製品のものや多くの武器の機軸を要請にすぎたものに存在しているといえる。また、近4RGM79シリーズにも極めてあり モルセル系の特徴である 自在 武器の選択(シス 機体から、このように武器性の保持にも貢献している)の

ガンダムの武器一覧

固定式桥

60mm×60mm×5mm

ビー・エム・シー・エス
(ビー・エム・シー・エス・エス)

推行武裝

100%

100%

100

明新報



音読部に帰せられ、
・カンパニー カンパム
・けでな 彦井重平毛
ヒルス / の基本就役
・あり 配置も共通
・る

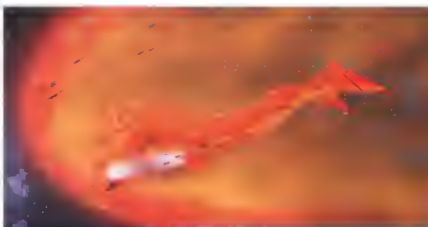


まさに前人未踏！
単機による大気圏突破！

RX-78-2ガンダムが通常のモビルスーツと違う機能といえは、単独での大気圏突破能力だ。作品的にも大気圏突入はのちのガンダムシリーズでお約束になる重要なものだ。

ンオン公国軍は開戦勢弱のいわゆる一週間戦争の後に、地球降下作戦を行い、地球の平手に入れた。その原動力はヒールズだった。これはHVLと大した大衝突入カブセルにモビルスーツを搭載し、衛星軌道上より降下させる。いわゆる空母降下作戦だ。空母降下作戦は敵艦沈没の最悪な点に同時に兵力を展開できる効果的な戦術だが、積載重量などの問題により降下させられる兵器の装備が限定される欠点がある。しかし、ヒールズという最強の戦力、それをさせることの効果は計り知れない。もしRX-78-2はHVLを必要とせず、敵空母撃沈し舞い宙空からの空母降下も可能なた

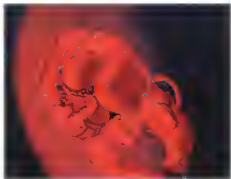
とはいえ すべての面でメリットがあるとは考えられない
 せなか 後世でモビルスーツ単機へ多大な大気圏突入作戦は
 展開されているものの 7年後のクリス戦戦では フライ
 インク・アーマーやバリ トンシステム ヴィイフ・ライタ
 ーといふ形式で行われ RX-78-2のよに無装備単機とい
 う例は稀であったがた これは コスト面で多少計算が合わない
 い証跡といえ RX-78-2のオーブスへ クレタが寝る



④ 大気圏突入方法は、
ある「冷却方式」による方式
と、他の冷却方式、など、



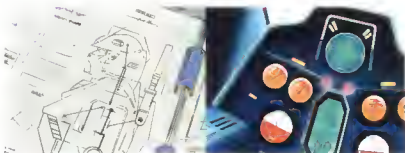
● 一般の王と、スーが何の価値もなし、大気圏突入をすると、大気の熱圧縮、爆発し耐え切れず装甲は融解、爆発四散する」と、地表で見上げる人、は流れ星に見える、と、無常



05

戦い方が進化する!? 教育型コンピューター

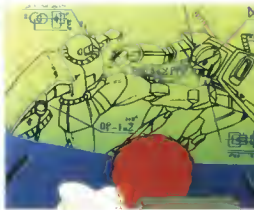
明確に言及しているわけではなく、RX 72-2カブの
の閉所消費は高い。中でも教育型コンピュータの稼働は
最も消耗が大きいという。これはその年の戦術データで
元、常にソフトウェア・アプテッド・動作の型機では
に、対応した数台でも、コンピュータ・グラフィックスに
分析して、対応するソフトウェアの、素人のアロ・レイが
は、決めてデータを検証し試みても、この教育型コン
ピューターに過去のデータの模倣型戦術データがタイプ
されていながらも、また、理論的に比べれば機は
とソフトウェアは更新、強化される。そのデータへの模倣
用いられ、体系的な能力の底上げにこそなる。作戦的にな
る。アロ・カブの最新兵器を投入する謀略力を担保する。問
題点は、ミソフア一般下では過渡段階が限られ、そのテ
データを持ち帰るに、生産するが、コン・ターを回収し
なければならぬこと、そのために追加コストを、小
型戦術機に能力も高コスト、フロ・ワ・システムが用
されただけで、これも高コストの所以である。実態生産型
のRGM-79にには採用されていない。ということは、連邦軍
はソフトウェア、パターのため、実験機を戦艦に投入し続け
る構想もあるのか、と。という想像は、



■ マニ アル、も教育型コニヒ ク、に言及されているよ
つれ攻撃されているさ中なの、熱し、読み、け、



「ア、手は、油紙を試みる」
 け、史上初のモヒルスー(紙すき)装置! この機も製造するのだから、特許取得。この「タ」結構である



● 戦時と戦後・戦前は「
・ ス」も共有できる。
・ ミンハ・ラルのウツ
・ 道義した源 サクの子 タ
・ 17青年サク戦か? を参考
・ 対抗派を繰 “1”

4. 内部メカが見える。マクマ
の機体の構造を「あるモス」
・「機士」・「モス」の3要素で表現する



06

高い拡張性でパワー UP！ マグネット・コーティングの力

ロボ トアニメの 機動戦士ガンダム において 作品中でガンダムはパワーアップされる 商業的にはGアーマーを中心にした「Gハーン」がそれに該当するが 作劇上はそれほど重要ではなく 劇場版においては出演が見送られている点からも明らかだろう 真のハワー プは 極めて地味な「マグネ ト・コーティング」であった

物語としては主人公の阿姆ロ・レイが ニュータイプとしての目覚めも含めて ハイロ トとしての腕の著しい向上を見せると ガンダムの反応速度を上回 ってしまうという事態が起きる そこで登場したのがマグネ ト・コーティングこれは駆動部に磁力をコーティングして 機体の反応速度を3倍 理論上は無限にまで向上させるという措置で 機体ハランスは若干劣化したものの シオン公国軍のニュータイプ専用機にも対抗できる能力を獲得した 設定的には後に一般的技術になる重要なものだが ロボ トアニメとしては外見の変化が一切ないという潔さだ た 変化があるとバンクが使えなくなるという制作上の理由も考えられる

- ガンダムMk II
- 2. Zガンダム
- 3. ZZガンダム
- 4. ヴガンダム
- 5. ガンダムF91
- 6. ウェット・ガンダム
- 7. ノーニングガンダム
- 8. ウイングガンダム
- 9. ガンダムX
- 10. 14ガンダム
- 11. ストライクガンダム
- 12. インパルスガンダム
- 13. ガンダムエヴァン
- 14. ダブルオーガンダム
- 15. ダブルオーガンダム
- 16. ユニコーンガンダム (テストイモート)
- 17. ガンダムAGE 1
- 18. ガンダム・バリエーション
- 19. G-バリエーション
- 20. ナラティブガンダムA前編

07

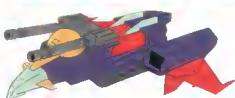
今も増え続けている 現実世界のガンダムたち



ここまでは作劇面 設定面 そして作品面からガンダムのスコさについて書いてきたが 最後は現象面 RX-78-2ガンダムのスコさは ご存知の通り40年にもわたって第一線のキャラクターとして生き残り続けてきたことだろう 現在そのイメージは様々な広がり「ガンダム」と名のつくモビルスーツは数多くにも及ぶもはや「白くて角 ヒゲ があ ツインアイ」くらいの共通項しかないほどです すべてがこの要件を満たすわけでもない もう一つ驚くのは本家東元のRX-78-2ガンダム自体も 時代によりア プレートが続いているということ 最新鋭のRX-78-2ガンダムの姿は世界的工業デザイナーのケン・オクヤマ 奥山清行 氏のチームによるプロジェクトのもので さらには実物大スケールのものが歩く時代だ もはや空前絶後 前の項目で挙げた特徴の寄与 つまり当初兵器という存在意義を与えられフレイクしたことも 忘れ去られているくらいになったのは もともスコさいことなのかもしれない

さらなるガンダムの強化を目指したGパーツ

Gファイター (Aパーツ+Bパーツ)



カンダムのと、なる強化を目指して開発され
 たパワーストーンがGパーツのカンダ
 とコア・ファイターとを組み合わせること
 で様々な形態での運用が可能。単体の運用も
 できる＝Gファイター。たまたますべてをカンダ
 ム中心で考えられているため、運用に難がある
 ことも。なお、カンダムは現地で試みられ
 た組み合わせで正規の姿ではない

ガンダム&コア・ファイター



MS運動が可能な通学機

G7-17-100

ガンダムパーツを使う大型戦闘機

ガンダムパーツを操縦

Gスカイ・イーサー

ピーム張りを惜めた菅野

グループ

コア・ファイターを排除

ダブル・イーシー

豊城店まで来た

ガンダムMA形態

もう1つのGパーツ?
コア・ブースター



81年から公開された『ガンダム』の劇場作品では、テレビシリーズから改められた部分も少なくなく、ホワイトベースのメカ編成などが変更されることもあった。中でもGパーツは、コア・ブースターへと変わった(劇場版の『Ⅱ哀 戦士編』から)。そのため劇場版ではGパーツの作中での役目をコア・ブースターが担っている。

ガンダムMA影響



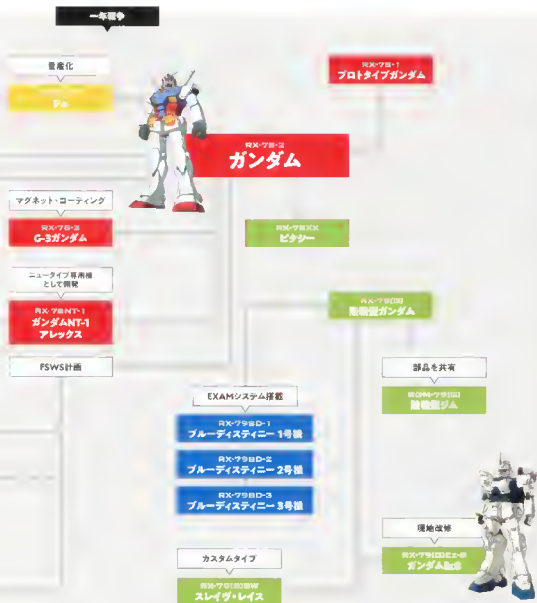
し、はじめてホワイ島の戦とそれに搭載するM5のたぐいでい。強襲揚陸艦とは一降舟戦を極める任務を遂行し、攻撃部隊を艦内に収容し、敵地へこれを発進させ戦域を制する艦種だ。現在における強襲揚陸艦は歩兵などの陸上部隊を搬送する力と、これに対してホワイ島級はMS運用艦、航空母艦も搭載可能だが、歩兵戦力ではなく、MSやヘリコプターと呼べる特殊の一つは、地球連邦軍にこそこの人間遠征内外を問わず航行可能なスハーストープである。戦艦と同様の火力を有するが、ここから、MSは艦以外に、艦隊や要索の攻路など、戦艦との使用も視野に入れているあるいはシオン軍がわたる術、軌道下からの平接弾的な作戦、より強力かつ確実な大天力のMS搭載艦艇を投入して、天地回復の切札にもてるだろうもう一つは搭載するMSをはじめとした、兵器構成だ。地球連邦のMS開発は、Iに3種類のカテゴリーに進められた。

M5といふ白鳥戦用機は、78ガンダムと同一タイプで、そのM79、距離支援用のR77ガンキヤンタムという構成の一機動戦士ガンダムの物品では各一機が搭載されていたが、実際には9機15機程度が戦線運用可能といわれ、多数の土曜系と、少数の支援機系といふ混成編成だろう。R77系は、J、F両機系と協同展開可能な、J、F、78系、RXといふ編成と思われ、つまり、Mを降車戦力と考えればわかりやすく、歩兵、支援のための重火器、歩兵、砲台とも構成的にこれに航空機系の装備を加わる。Gアーキアコンクリートだ。宇宙空間の戦闘では、MS登陸船とMの連打は以降の戦艦、航宙艦の時代にはそれとは大きくなく、火力や運用方法が半程度のものだった。Mは除き艦であり、戦時のMは降車戦力であり、航空兵力の支援は必須。そして、軌道移動力の低下を補うためにガンバリアも配備された。

つまり、MS運用艦として、あらゆることを想定した構成を持つのが、78ガンダム級の艦だ。R、X、Zガンダムの性能が高いため、所詮は各々Mでしかない。その他のMや兵器と協調運用されることで、どうも戦場で効果を発揮できているように、地球連邦軍はよくわか

ガンダムの変遷と系譜

U.C.0079・U.C.0083



そのバリエーションから RX-78の系譜を分析する

「存在の通りRX-78ガンダムは、地球連邦軍が開発した試作モビルスーツ(MS)である。試作といふより、新たなコンセプトやメカニズム、兵装などを試験する実証実験機の色合いが強いものだ。また、正確にはRX-78という型式番号自体が、それらを行うためのプラトフォームなのかもしれない。実際、一年戦争及びその後の数年において、RX-78を冠する機体が数多く開発されている。ここではそれらを、一覧してみよう」

「RX-78-1は『プロトタイプガンダム』と通称される。小型のビーム・ライフルを含め、軽量のタイプで、改良版(仕様変更版)のRX-78-2が本命となることで、RX-78-1もRX-78-2仕様になったといわれる。RX-78-3(通称G-3ガンダム)はマグネット・コーティング試験機で、後にRX-78-2もレトロフィットされているので、その時点で実質的に「RX-78-3」と改められてもいい決定的存在だ。それ以降のRX-78-4ガンダム4号機から2号機までは、RX-78-2(あるいは3)をベースに、各々違う機体コンセプトが企図された。製造された機体だ。詳しく解説は本誌次項以降をご覧いただくとして、ジオン公国軍のMSより極めて高性能になったRX-78 RGM-79シリーズに新たなコンセプトを付与する計画と言っているだろう。つまり、地球連邦軍は「その後の」MS像に關しても、様々な可能性を探っていたのだ。一方、FSWS計画では、機体を新規開発せずに、増加装備で状況特化型を作り出すという方針で、こちらの方がいち早くその成果をRGM-79などに投入できるというえ、2方向で可能性を探っていたことが窺える」

「そうしたMS開発の延長線上にあるのが、戦後、ジオン公国の技術も組み込む形で行われた次世代機開発計画『ガンダム開発計画』だ。この計画では「RX-78」の型式番号とガンダムの名を冠したコンセプトの成る計4機のガンダムタイプが開発されたが、どの程度RX-78の設計を踏襲していたかは不明である。だが型式番号が同じということでは、ある程度はRX-78をベースにしていたのだろう。いくつかのトライアルを個別に行い、うち1つは機体がその先のベースになるという方針だ。一方で特異なのは、RX-79 G-1陸戦型ガンダムだろう。これはMSの運用環境を限定しながらも実戦投入を前提に、RX-78系の高い部品規格帯をクリヤで多用し、製造されたものである。実際は



RX-79「G」は「G」降参撃機と同系統の機体で、部品も互換化可能な兄弟機であった。つまり、RX-79「G」に高規格部品を組んだチューンアップ機ともいえる。型式番号の「79」は実地的に最前線で運用されたRX-79「G」と区別するため、RX が付与されたと考えられる。

いずれにせよRX-78系統で驚かされるのは、実験的実戦投入を前提に開発された機体があることだ。通常、試作機や試験機の場合、初期トラブルや予期せぬ事態が予想されるため、基本的に実戦投入には行わない。一方RX-78については、2の段階で、実際に耐える高い信頼性を確保していたという事実を踏まえて、前段階の実証機レベルで信頼性が確立され、それがRX-78とRX-79に分散していった可能性も考慮すべきなのだ。

RX-78系統の搭載機は、ホワイトベースにせよ、アルビオにせよ艦の大きさや運用機数に少ない傾向にある。これは運用に必要な膨大なバリエーション、艦内多少のモテナイがバリエーションと組みまわっていた可能性もある。実際、アルビオンには開発メーカーの技術者も同乗し、

つまり、RX-78とは試作機、実験機であるもの。一部実戦の試験も前提にしたシリーズの総称。可能性も人々にあるのだ。

カラー設定& イラストラインアップ

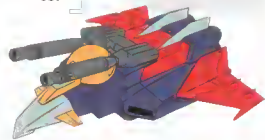
このページでは、各ガンダム作品に登場したガンダムと、ガンダムに関連するメカのカラー設定およびイラストを一覧で紹介している。基本的に映像作品から関連企画作品の順に年代順で構成している（一部例外あり）。それぞれ名称部には機体データに加えて登場作品名をアイコンで表記。各作品のアイコンについては、欄外の脚注を参照のこと。

[illegible]

Gファイター

全長 15.2m
本体重量 58t

ガンダム用強化パーツの戦闘機形態。各バリエーションを含めた総称をGバーノと呼ぶ。TV版のみの登場。



GA-2-

全長	28m
本体重量	120t

Gバー1とガンダムの合体した姿。Gパーツをホワイトベースへ運んできたのは、みんなの憧れマチルダ中尉の輸送部隊だ。



Gスカイ・イージー

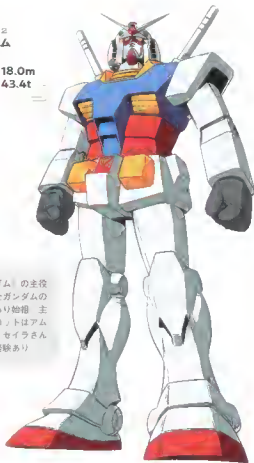
ガンダム

ガンダムパーツを介さずにニア・ファイターとGパーツのBパーツで構成、機体上面にガンダムを重ねて飛べる。

RX-78-2
ガンダム

ガンダム
頭頂高 18.0m
本体重量 43.4t

ガンダム の主役
メカ。全ガンダムの
原点であり始祖。主
なパイロットはアム
ロだが、セイラさん
も搭乗経験あり



FF-X7
コア・ファイター

全長 8.6m
本体重量 8.9t

ガンダム、カンキャノン
ガンタンクのコクピット
となる可変式の軽戦機機
内蔵式のみ사일なども
あり、野戰機になる



RX-78GP02A
ガンダム試作2号機
(サイザリス)

全高 18.5m
本体重量 54.5t



デラズ・...ートに強奪されたガンダム開発計画機
の1機。核兵器を使用する
特殊なガンダムタイプ

RX-78GP01
ガンダム試作1号機
(ゼフィランサス)

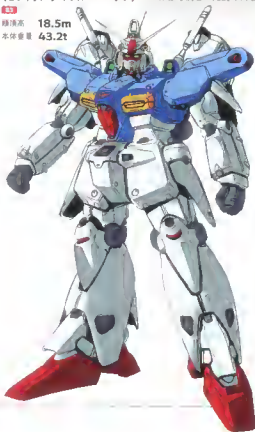
全高 18.0m
本体重量 39.7t



ガンダム開発計画で開発さ
れた1機。陸戦用に特化し
ており、宇宙戦には向か
ない。作品前半の主役メカ。

RX-78GP01-Fb
ガンダム試作1号機
フルバーニアン
(ゼフィランサス・フルバーニアン)

全高 18.5m
本体重量 43.2t



ガンダム試作1号機の宇宙
戦仕様。胴体や腕部の形
状が異なる。ガンダム試
作2号機との死闘で大破

FF-XII
コア・ファイターII

全長 14.7m
本体重量 15.9t



ガンダム試作1号機のコ
クピットを形成する戦闘
機。ガンダムのような空
中機動などは想定してい
ない。

FF-XII-Fb
コア・ファイターII-Fb

全長 15.6m
本体重量 22.6t



宇宙戦用のガンダム試作
1号機フルバーニアンの
コクピット・プロックに
なる。劇中での活躍の機
会は少ない。

Gブル

【設定】

全長 18m
本体重量 75t



シャッローなどで活躍した重戦車仕様ガンダムのAパーツとコア・ブロックを内蔵しており、機体はアムロが担当。

Gスカイ

【設定】

全長 22m
本体重量 100t



こちらはガンダムのハーンを用いた形態。コア・ファイターなしでGフルと空中機を兼ねたこともある。

ガンダムMA形態 (ガンダム+GパーツBパーツ)

【設定】



Gパーツの本来の運用形態にはない現場仕様。アムロの発案で対ザクレロ戦にて活躍。登場はTV版第32話のみ。

Gブル・イージー

【設定】



ガンダムのハーンを用いないケースもあり。機体はセイラさんが担当する。対ビグロ戦で活躍（TV版第31話）。

RX-78NT-1 ガンダムNT-1 アレックス

【設定】

全長 18.0m
本体重量 40.0t

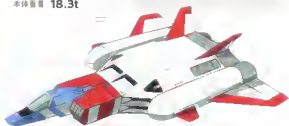


地球軍初のニュータイプ専用機。ただ、テストパイロットのクリスは機体の扱いに苦勞していた。サクII改とは相打ちに。

FF-X7-80T コア・ブースター

【設定】

全長 13.8m
本体重量 18.3t



コア・ファイターにブースターユニットを装備した戦闘機。ビーム砲を搭載し火力も高い。劇場版におけるGパーツの存在。

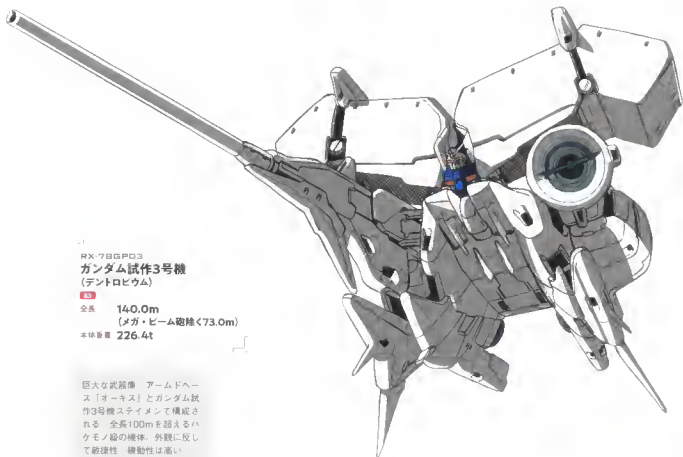
RX-78NT-1FA FAアレックス (デュラム・アーマー装備)

【設定】

本体重量 40.0t
スラスター推力 139,000kg

いかにも重装甲なガンダムNT-1アレックスの別形態。ケンプファーのチェーン・マインの攻撃を食いだ。





一

**RX-78GP03
ガンダム試作3号機
(デントロビウム)**

【機体】

全長 140.0m
(メガ・ビーム砲機く73.0m)
本体重量 226.4t

巨大な武器庫 アームドヘー
ス「オーキス」とガンダム試
作3号機ステイメントで構成さ
れる 全長100mを超えるハ
クモノ級の機体。外観に反し
て敏捷性 機動性は高い

**AGX-04
ガーベラ・テトラ
(ロールアウト時)**

【機体】

総機高 18.0m
本体重量 46.7t



ピクチャードラマ 宇宙の
野郎2 で初お目見えのロ
ールアウト時の姿 頭部セ
ンサーはツインアイのまま

**RX-78GP03S
ガンダム試作3号機
ステイメント
(デントロビウム・ステイメント)**

【機体】

総機高 18.0m
本体重量 41.6t

オーキスのコントロールユ
ニット 各武器庫から武器
を取り出すフォルティン
グ・アームを装備する。



**AGX-04
ガーベラ・テトラ**

【機体】

総機高 18.0m
本体重量 46.7t

アナハイム・エレクトロ
ニクス社からテ
ラース・フーリエ
製造された機体で
しつはガンダム開発
計画機1機



RX-79[G]
陸戦型ガンダム
(砂漠戦仕様)

☆



砂漠で地密着に実験
を行うアプサラスII
追撃のため。この仕
様で08小隊の面々
は任務に就いている。

RX-79[G]
陸戦型ガンダム

☆

頭頂高 18.0m
本体重量 52.8t



東南アジア戦線で活
躍した先行量産のガ
ンダムタイプ。製造
品のため、常に部品
不足に悩まされる。

FFB-7B5T
ジェット・コア・ブースター

☆



大気圏内でのみ活動
可能な爆撃機。機体
下面部にスマート爆
弾を懸架

RX-79[G]E2-03
ガンダムE28

☆

頭頂高 18.0m (推定)
本体重量 51.5 (推定)



アプサラスIIとの戦
闘で大破した機体を
改修。物歸後半の主
役メカ。機体が完成
するまでシローも大
変な目に合う

M353A4
ホバートラック

☆

全長 6.3m
全幅 3.3m



戦場でMSを支援する
のに欠かせない戦車
両 自走率航でMSの
機体掃討が可能。

RX-78GP02A

**ガンダム
試作2号機**
(イボルブ版)

10

ガンダム試作1号機
同様に、作品本編内
で活躍場面はない。
設計団面のデータ上
でその姿が見られる。



RX-78GP01Fb
**ガンダム試作1号機
フルバーニアン**
(イボルブ版)

11

GUNDAM EVOLVE
4. に登場。ただし作
品本編で活躍せず。設
計団面の中で登場する。



RX-78GP03

ガンダム試作3号機
(イボルブ版)

12



GUNDAM EVOLVE
4. の主役メカ。作品は、
コウが乗り込む前の活
躍を描く。ガンブラの
特典映像が初出。

RX-78GP03S

**ガンダム試作3号機
ステイメン**
(イボルブ版)

13

見た目は『0083』で
登場したものと同じだ
が、じつはコア・
ブロック・システム
が採用されていると
いう設定である。



RX-78GP04

ガンダム試作4号機
(イボルブ版)

14

標準高 18.0m (推定)
本体重量 52.8t (推定)

GUNDAM EVOLVE

4. に登場。やはり
こちらも本編映像の活
躍シーンはなく設計デ
ータのみ (惜しい！)



Gブル (イボルブ版)

15

GUNDAM EVOLVE /11
に登場。内蔵するガンダムは、
G-3ガンダムだ。作品の内容
的に主役メカはホールであり、
Gブルはゲストメカだった。



RX-78-2
ガンダム
(イホルプ版)
EV



GUNDAM EVOLVE ノ15 は、ガンダム TV版第39話を大胆にリメイク。ガンダムの姿も刷新!

Gアーマー (イホルプ版)
EV



「GUNDAM EVOLVE ノ11」のア・バオア・クーに登場。しかしすぐGブルにチェンジする。

FF-X7-8281-8
コア・ブースターII
インターセフトタイプ
G



MS IGLOO - 黙示録0079 - の第1話に登場。任務を終えたセーコックを退撃にくる敵として活躍する。

RGM-79[G8]
ガンダム・ヘッド
182



通常のツムにガンダムタイプの頭を搭載した機体。神話の武器をしていたガンダムの威光を利用している。

RX-79[G5]
陸戦型ガンダムS型
182



ガンダム・ヘッドを陸戦用に改修したタイプ。名前のS型は搭乗母艦のスパルタンに配備されているため。

FA-78
フルアーマー・ガンダム
178



太田垣謙男の漫画を原作とする。サンダーボルトの1stシーズンの主役メカ。イオ・フレミングが操縦する。

RX-78-1
プロトタイプガンダム

MSV
標準高 18.0m
本体重量 43.3t

ガンダム最初の機体、83年のMSVシリーズ展開当時にプラモデル化された（発売は83年6月で1/144スケールのみ）



RX-78-3
G-3ガンダム

MSV
標準高 18.0m
本体重量 47.2t

小説版のガンダムが初出で、その後『MSV』の機体にラインナップされた。設定的にはニュータイプ仕様のガンダム。



MSV
バストライナー

連邦軍のMS用の移動式ビーム砲台。ジオン公園軍版はスクワレで、よきライバル関係といえる。



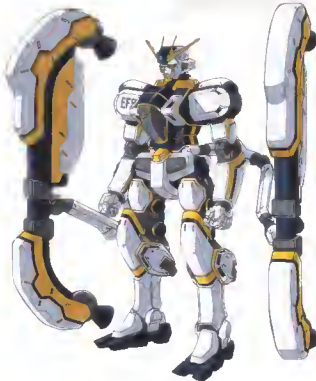
FA-78-2
ヘビーガンダム

右の機体の色違いのタイプ。このイラストは増尾隆幸の率によるもので、当時のムノクなどに掲載された。



RX-78-2
アトラスガンダム

サンダーボルト 2nd ノースンの主役メカ。やはりイオが操縦する。水中戦もこなせる試作MS。



FA-78-1
フルアーマーガンダム

MSV
標準高 18.3m
本体重量 62.5t

MSV で設定されたが、当時連載していた『プラモ狂四郎』（作、クラブ団画、やまと虹一）にも登場した



FA-78-2
ヘビーガンダム

MSV
標準高 18.4m
本体重量 52.2t

フルアーマーガンダムの改良型。MS-X自体の底間は幻となり、当時の機体ラインナップも少なめ



RX-78-5
ガンダム5号機 (G05)

機高 18.0m
本体重量 42.9t

ガンダム4号機とセットで運用される。「SDクラブ」に掲載された小説では、ヒグロ改と交戦し撃墜されている。



RX-78-4
ガンダム4号機 (G04)

機高 18.0m
本体重量 42.6t

M-MSV! で設定された1機。元々は文字設定のみの存在でプラモデル化はゲーム版が世に出た21世紀に入ってから。



RA0-79-G1
水中型ガンダム

機高 18.3m
本体重量 47.7t

アクア・ノムをベースにしているので、機体のカテゴリとしてはジムタイプ。ガンダムはエースの惜れなのか?



RX-78-6
ガンダム6号機 (マドロック)

機高 18.0m
本体重量 47.3t

元は文字設定のみだったが!M-MSV! 展開時にデザイン画が起された。両腕の格は不安定なヒーム兵器を補う装備。



HFA-78-3
重装フルアーマーガンダム7号機

機高 18.3m
本体重量 39.2t

遠射にも思える重武装は、ガンダムタイプに限らず、多くのMSにとって、ある種の伝統茶といえるかもしれない。



RX-78-7
ガンダム7号機

機高 18.3m
本体重量 39.2t

出自はガンダム45号機に近い。09年9月発売のゲーム機戦士ガンダム戦記 でリファインされた。



FAL-78-3
フルアーマーガンダム7号機

機高 18.3m
本体重量 39.2t

当初は「フルアーマー3号機」などと呼ばれるケースもあった。09年9月のHGUC化に際し、名称が「7号機」へ統一



RX-79BD-1
ブルーディスティニー
1号機

機体高 18.0m
本体重量 52.8t

セガサターンソフト 機
動戦士ガンダム外伝
THE BLUE DESTINY
(96年9月発売)の主要
メカ。



RX-78XXX
ガンダムビクシー

52

SFCソフト 機動戦
士ガンダムCROSS
DIMENSION 0079
(96年発売)の第2部
の主要メカ。



RX-79BD-3
ブルーディスティニー
3号機

機体高 18.0m
本体重量 52.8t

豊富な配備により背の姿が
間に合わなかった。青い
機体色は開発者 クル
スト・モーゼス博士の趣
味らしい。



RX-79BD-2
ブルーディスティニー
2号機

機体高 18.0m
本体重量 52.8t

イフリート改を失ったニ
ムバスに強奪される機体
ゲーム後半戦におけるボ
スキャラでかなり手強い
相手である。



RX-79(3)E2-B-HAC
ガンダムEz8
ヘビーアームド
カスタム

52

ゲームは一種のIPを
楽しむジャンルなの
で、あまり出自の制
約を受けない。そう
した自由度の高さか
ら生まれた機体



RX-79(3)E2-B-HMC
ガンダムEz8
ハイモビリティ
カスタム

52

ゲームが初出で、か
なりIP的な要素が色
濃い。ベースのガン
ダムEz8は現地改修
機なので、派生機が
成立しにくい。



RX-78-6
ガンダム6号機
(マドロック完成版)
(ゲーム版)

52

ゲーム上では、一度
撃破されながらも復
活する。開発責任者
がパイロット(エイガ
ー少尉)を兼任してい
るといふ点も珍しい。



RX-78-6
ガンダム6号機
(マドロック)
(ゲーム版)

52

ゲームソフト ジオニ
ックフロント。では、
ノム公園軍艦内で、
ゲームが展開される
ので、ガンダムが龍
役として出現する。



RX-78GP00
ガンダム試作0号機
(プロッサム)

MS-06

雑誌企画「GUNDAM
SECRET WEAPONS
PHANTOM BULLETS」
に登場。機体名は開発
チームに由来。



FX-9900II

コア・ブースターII

RX-78-5
ガンダム5号機
(G05)
(ゲーム版)

MS-06

RX-78-5ガンダム5号機
(G05) ガンダム4号機
と同じくゲーム化により
リファイン ゲーム内の
オリジナル外伝ストーリ
ーで活躍する



RX-78-4
ガンダム4号機
(G04)
(ゲーム版)

MS-06

03年に発売された
PS2ソフト 機動戦
士ガンダム めぐり
あい宇宙 のゲーム
化に際し デザイン
がリファインされた。



RX-78-1
プロトタイプガンダム
(ロールアウトタイプ)

MS-06

機体高 18.0m
本体重量 58.8t

27ページで紹介してい
るプロトタイプガンダム
の最初期型 デザイン的
には ガンダム の初期
稿の1つがモチーフ。



RX-78GP02A
ガンダム
試作2号機
MLRS仕様

MS-06

ゲーム関連企画の「ハ
ーモニー・オブ・ガン
ダム」で企画された1
機 ガンダム試作2号
機の火力強化を図った
という設定の機体。



RX-785P
ガンナーガンダム

MS-06

機体高 18.0m
本体重量 59.5t (推定)

元は MSV R の読者
参加企画でグランプリに
輝いた「ガンダムスナイ
パータイプ」をクリンナ
プしたもの



FA-78-1B
フルアーマーガンダム
(タイプB)

MS-06

機体高 18.0m
本体重量 68.7t

ガンダムエース、(KA
DOKAWA刊)で連載の
MSV-R を初出とす
る。フルアーマーガン
ダムの別タイプ。



FA-78[G]

**フルアーマーガンダム
陸戦タイプ (タイプ2)**

新機

こちらは寒冷地適応が施された機体。ただし、データ上のシミュレーションのみの存在で実機製造はされなかった。



FA-78[G]

**フルアーマーガンダム
陸戦タイプ**

新機

機体高 18.0m
本体重量 63.4t

いわゆるFSWS計画の1機だが、素体はガンダムではなくプロトタイプガンダムを利用したタイプとなっている。

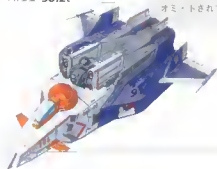


Gファイター爆撃型

新機

全長 17.5m
本体重量 56.2t

Gファイターの機体量の大きさに着目し、爆撃機としての運用を目指したタイプ。肩等ユニットはオミ・トされている。



FA-78-2
**ヘビーガンダム
(2号機)**

新機

機体高 18.4m
本体重量 52.2t

小説『機動戦士ガンダム MSV-R サ・トラブルメーカーズ (著 李岡孝之介、高橋とある)』にも登場する。



Gファイター強襲揚陸型

新機

全長 21.4m
本体重量 69.8t

人員輸送用コンテナ(30名)を装備し、機体両側面にハンカーバスター (近中貫通弾) を用パイロンを備えている。



Gファイター宇宙型

新機

全長 17.5m
本体重量 51.5t

大推力ロケット・エンジンに換装し、主翼にメカ粒子砲を備え、艦艇式ウェポンヘイブ採用。コックピットは複座式。



FF-X5
**プロトタイプ・
コア・ファイター**

新機

機体高 8.6m
本体重量 8.15t

ガンダムをはじめ、RXシリーズのMS用の共通コックピットモジュール「コア・ブロック」として開発された試作戦闘機。



FF-X7Bst PLANO04
**コア・ブースター
プラン004**

新機

コア・ファイターの汎用性をさらに活かすための開発された、拡張性を重視したブースターユニットを装備する。



RX-78
GUNDAM



機動戦士ガンダム

RX-78NT-1
GUNDAM NT-1



機動戦士ガンダム0080
ポケットの中の戦争

RX-79[G]
GUNDAM GROUND TYPE



機動戦士ガンダム0080
第08MS小隊

PART 1

一年戦争の ガンダムたち

U.C.0079 - U.C.0080





機動戦士ガンダム 1979年
テレビシリーズ
第5話「大気圏突入」より

大気圏突入という 戦闘とは異なるスペクタクル

地球の「マロー」基地を目指すホワイトヘース しかし宇宙から地球への降下中 身動きのとれない状況でシャアが攻撃を仕掛ける カンダムでなんとか退けるが ホワイトヘースへ収容できず カンダムは大気圏へ突入! 同様に電力に引かれたザクⅡが断え尽き中 アムロは必死にマニュアルで方法を探り大気圏を突破した ちなみにテレビシリーズと劇場版では突破方法が異なることは よく知られている



ガンダムは対人戦闘を まったく考えられてない?

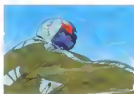
オン公国軍ハートル部隊のクワランたちは 手柄を立て母国に帰るためガンダム撃破の秘策を考案する それはワハでカンダムに拘束し 機体に爆弾を取り付けるという戦法だった ワハで飛び交うクワランたちに対し カンダムはサーレットを振り回す程度で成す術なし もとから自兵戦用 対MS戦の機体だから 対人戦闘は想定していない? 結果的に爆弾は外せたが カンダムの意外な弱点が露呈した回だ



機動戦士ガンダム 1979年
テレビシリーズ
第14話「時間よ、とまれ」より

「ガンダムの性能のおかげ」を 初めて直接他人に指摘される!?

ガルマ様の仇討ちのため ホワイトヘース隊を追撃するハ・ラル隊 隊を率いるラル大尉は新型の超戦艦 グフに乗り行くに立ち塞がる 脱走していたアムロは この窮地に駆けつけラルと対峙 機度となく戦った超戦艦に率くも勝利するアムロ しかし ラルの去り際の 自分の方で勝たてたのではないぞ そのキルルースの性能のおかげたということをおぼれるな」は アムロに少なからず影響を与えることになる



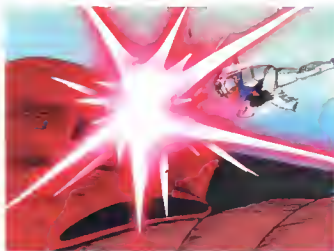
機動戦士ガンダム 1979年
テレビシリーズ
第19話「ランバ・ラル特攻」より

敵を踏み台にしジャイアント・バズを 避けるアムロの技量が炸裂

オテ サ作戦へ向かうホワイトヘース隊をマ・クハ大佐麾下の黒い三連星 カイア オルテク マ シュ が襲う 対するカンダムとアムロは 黒い三連星の必殺フォーメーション「ニュート・ストリーム・アタック」に苦戦するかと思いきや初見でこれを倒き切りマ シュ機を撃破 ニュートタイプへの開花か? なお この戦いでみんなのアイトル マチルタさんが戦死! セイラさんが正式にパイロットデビューする



機動戦士ガンダム 1979年
テレビシリーズ
第24話「追撃!トリプル・ドム」より



機動戦士ガンダム 1979年
テレビシリーズ
第28話「大西洋、血に染めて」より

場所を選ばぬカンダムの活躍も 冷静なアムロの判断力あってこそ

万能に見えるカンダムだが しつは水中戦はあまり得意ではない 水中戦用MAのグラフロとの戦闘は そんなカンダムが苦手とするフィールドで展開された 自慢のヒーム・ライフルも水中では威力が底抜けられ効き目が薄い しかもグラフロのクロー・アームに捉えられピンチに陥ってしまう たが脚部が奪り戻されたことで拘束から脱出し ヒーム・サーベルを機体に突き立て辛くも勝利することができた



戦場に復活したシャアだったが すでにアムロが上回る!?

ようやく連邦軍のシャフロー基地に到着したホワイトヘース隊だが シャア大佐率いる マト・アンクラー隊に尾行され各地で戦闘となる 赤い機体を見たアムロは 即座にシャアだと見抜く カンダムのフルート上からメカ粒子砲で撃ち抜くシャア専用スロークハンドもありとシャアが笑みを浮かべたが そのシールド越しにアムロは狙撃! 撃たれたシャアは さらに出演するようにな たな どうそふくの た



機動戦士ガンダム 1979年
テレビシリーズ
第29話「シャフローに敵る」より



機動戦士ガンダム

機動戦士ガンダム 1979年
テレビシリーズ
第33話「コンスコン強襲」

5対12の戦いは わずか3分で決着する

再び宇宙へ上がり、中立コロニーのサイト6に立ち寄り、ホワイトベース隊は、トスル麾下のコンスコン少将率いる部隊と交戦。コンスコンは12機のリック・ドムを出撃させるも、アムロたちは3分もかからずこれを撃破。厳密にはアムロの撃破数は9機だが、それでもアムロの戦闘力が異常なレベルに達していることに変わりはない。ある意味、ガンダムの性能とパイロット能力がもたらした釣り合い、といった時期であろう。



ビームを防ぐフィールドには 肉薄攻撃で対抗する

連邦軍はネオン公国軍のソロモン要塞攻略作戦を遂行。ホワイトベース隊もこれに参加。陥落間近と思われた境、司令官のトスル中将が搭乗する巨大なMA「ビッグ・サム」が出現。フィールドの効果によりビーム兵器も効かず、連邦軍艦隊は危機に陥る。しかしスレイガー中尉の発案で、ビッグ・サム下部から突撃し、ハリアの内部から攻撃を加え、見事撃破に成功した。この戦いでスレイガー中尉が犠牲となってしまった。

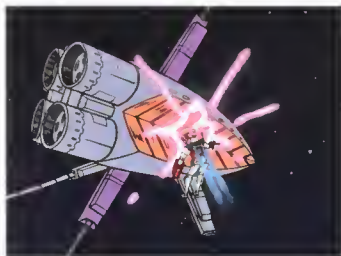


機動戦士ガンダム

機動戦士ガンダム 1979年
テレビシリーズ
第36話「恐怖!機動ビッグ・サム」より

ついにガンダムの性能が パイロットの成長速度に負ける!?

敵のニュータイプ、シャリア・フルが搭乗するMA「フラウ・プロ」と対峙するアムロ。フラウ・プロの有線式オールレンジ攻撃は強力だ。必死に反撃を試みるアムロだが、なんとアムロの反応速度にガンダムが追いつかない。なんとかフラウ・プロを倒すも、機体はオーバーヒートしてしまった。ガンダムの性能のおかげで勝っていたのが一転、性能限界が足を引張るという。アムロがガンダムを超えたターニングポイントだ。



機動戦士ガンダム

機動戦士ガンダム 1979年
テレビシリーズ
第36話「ニュータイプ、シャリア・フル」より

機動戦士ガンダム 第08MS小隊

ガンダムの性能を発揮するには 日頃の整備が欠かせません

オン公国軍の秘密兵器=アプサラスの秘密試験場を発見したシローと08小隊は、敵機を撃破、廃墟すべくその地で張り込みを開始。5日経たぬうちにアプサラスが出現。08小隊は事前のプランに沿って戦うが、連日のアプサラスの攻撃も激しく、シロー機はアプサラスに組み付けられ、一緒にどこかに飛んでいってしまう。この戦闘シーン以外にも、過酷な環境でMSを維持管理する大変さや作戦の訓練風景などもあり、目新しく見どころの多い回だ。



→機動戦士ガンダム。シローには様々な物資や物資が搭載されている。長期行動も考慮、1人1台の整備がある。



→シロー機は、シロー機に搭載されている物資や物資が搭載されている。長期行動も考慮、1人1台の整備がある。

機動戦士ガンダム
第08MS小隊

機動戦士ガンダム第08MS小隊 1996年
OVA作品
第6話「降参戦」より



一難去ってまた一難 ガウとアツガイがカレンを襲う

オン公国軍の秘密基地に対する大規模な攻撃が展開されることになり、シローや08小隊もこれに参加。基地を探す任務のためミテア輸送機から降下中、カレン機を不幸に襲う。まず降下の最中、直下から攻撃空母が出現。シローのカンタムEz8の機体で事なきを得た。さらに降下直後、アツガイと遭遇し、敵部隊を次々撃破され、コクピットにも一撃を食らう。機体絶命のピンチに陥るが、しかし、エリートとミケルの活躍で危機を脱することができた。



→シロー機は、シロー機に搭載されている物資や物資が搭載されている。長期行動も考慮、1人1台の整備がある。



→自由落下中は機体の自由度が高い。そのせいでカレン機はカレンの攻撃で、アツガイ機はアツガイ機に襲われる。

機動戦士ガンダム
第08MS小隊

機動戦士ガンダム第08MS小隊 1996年
OVA作品
第9話「最初の戦い」より





機動戦士ガンダム第08MS小队 1996年
OVA作品
第3話「信頼への限界時間」より

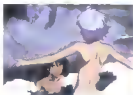
ジャングル戦での勝利のカギ 自然と地形を味方につける!

時間には遅れたが、川を渡り見事ノンコン公園軍基地への脱走作戦を成功させたシロー。背後を突かれた敵は基地を放棄したが、そこに仲間の撤退時間を稼ぐため、ノリスが陸戦型サクでシローの陸戦型ガンダムに水中戦を仕掛ける! シローは水中で照明弾を放ち迷惑、コクピットを殴りつけた。それにより陸戦型サクは浸水しノリスは引き上げていた。高地戦では周囲の環境を味方につけるのが勝利の鉄則である。



ヒーム・サーベル温泉だけじゃない! 細かいメカ描写が盛りだくさん

マイナのアプサラスIIとシローの陸戦型ガンダムはヒマラヤの山岳地帯に不時着。お互いの正体に気づいた2人だが、生きて帰るため協力し救援を待つ。ヒーム・サーベルで温泉を作る場面は、ヒーム・サーベルの出力調整方法がわかる貴重なシーンだ。このほか、シローが機体から射出シートでヘルアウトする様も描かれる。こうしたシーケンスが描かれるのは、ガンダムシリーズでも珍しい。たりする。



機動戦士ガンダム第08MS小队 1996年
OVA作品
第7話「再会」より



機動戦士ガンダム第08MS小队 1996年
OVA作品
第10話「震える山(前編)」より

往年のガンダムvsグフ再び!? シローは手練れのエースに翻弄される

後方支援砲撃を行う量産型カンタンクの陣衛を務めることになった08MS小队。そこに基地から脱出を図るアイナや仲間のため、ノリスのクア・カスタムが登場してきた。性能では陸戦型ガンダム+ガンダムEz8に有利なはずだが、ノリスは08MS小队の面々を手玉に取り、次々と量産型カンタンクを仕留めていく。辛くもノリスを倒したシローたちだったが、カンタンク部隊は全滅し戦いには負けてしまった。





RX-78-2 ガンダム

GUNDAM



【 所 属 】

地球連邦軍

【 形式番号 】

RX-78-2

【 SPEC 】

機高

18.0m

本体重量

43.4t

武装重量

60.0t

ゾニーレーザー出力

1,380kW

スラメター機力

55,500kg

センサー有効半径

5,700km

装甲材質

スナ・チタニウム合金

機 体 色

バルガン機×2

ビーム・ライフル×2

ハイパー・バズーカ

ガンダム・バスター

ハイパー・バスター

機 体

コア・ブロック・システム搭載

登場作品

機動戦士ガンダム

偶然から戦線に投入され伝説を築いた試作MS

V作戦の成果である
主力型白兵戦用試作機

地球連邦軍のRX計画とV作戦による白兵戦用の主力モビルスーツ(MS)の試作(実証)モデルの、ひとまずの完成形。本機はプロトタイプガンダムと称されるRX-78-1の改良型で、RX-78-1として製造された機体も後に本機の仕様と改められている。その性能はジオン公国軍の主力MSであるMS-06ザクIIをあらゆる面で上回る。さらにザク・マシンガンへの射撃を至近距離で跳ね返すルナ・チタニウム合金製の装甲、戦艦の主砲並みの威力を誇るビーム・ワッフル、自己学習機能を持つ教育用コンピュータなど先進の技術を投入しており、1機あたりの開発・製造コストも通常MSよりは比べ物にならないほど高価だ。こうした特殊装備以外の基本性能は、本機の量産タイプのRGM-79ジムに継承され、一年戦争における連邦軍勝利の原動力となった。一方、本来なら試作実証機といえるRX-78-2は、最終試験の地、サイド7においてジオン公国軍のワドルレイ隊の強行偵察を受けたことで、なほ原始的に実戦へと投入された。後にニュータイプといわれるアムロ・レイが射撃の操縦も相まって、一年戦争でもっとも知られる機体となっていた。

ビーム・ライフル



一撃でMSを撃破だけでなく、宇宙船も撃破可能なビーム・ライフルは、まさに無類の武器である。

ビーム・ジャベリン



●横状になったことでリーチを高く、格闘戦で威力を発揮。また、後部での使用も可能である。

ビーム・サーベル



ハイパー・バズーカ

対艦戦闘などで威力を発揮する実体弾兵器



●無反動弾を計5発連射した大口徑の噴射砲。ビーム・ライフルに劣る威力を持つ実体弾兵器で、状況によって選択される。支援攻撃にも用いることができるため、RGM-79ジムなどでも装備が可能である。

60mmバルカン砲

対MS戦でも威力を発揮近接防御用の機関砲



●機体左右に装備された内装火銃。RX-78-2の固定武装の1つで口径60mmの機関砲。比較的射撃距離は短い。対空戦闘や艦載での近接防御以外に、対MS戦でも使用される。連邦軍系MSの基本武装でもある。

ハイパー・ハンマー

ガンダム・ハンマーを改良大質量で敵を砕く質量兵器



●RX-78-2用の対空兵器。巨大な質量の質量によって敵を粉砕するガンダム・ハンマーの改良版。軌道に送られた機体が鋭角化された他、機と鉄球の連結部分近くにスラスタを備え、より打撃力を高めている。

パイロットアムロ・レイ

偶然パイロットとなったサイド7の少年

連邦軍の技術士官の父、テム・レイと共にサイド7に移居してきた少年。ジオン公国軍襲撃時に偶然ガンダムに搭乗し、ジオン公国軍のMS-06ザクⅡを2機撃墜する戦果を挙げる。その後、なす崩し的に戦場で戦い続け、一年戦争では目撃された戦績を残した。その姿は、いつしか人々の軍艦「ニュータイプ」といわれるようになる。





RX-78-1 プロトタイプガンダム

PROTOTYPE GUNDAM

RX-78の最初期バージョン

[所属]

地球連邦軍

[型式番号]

RX-78-1

[スペック]

全高

18.0m

全幅

43.4t

機体材質

ルナ・チタニウム合金

武装

バルカン砲×2

ビーム・サーベル×2

ビーム・ライフル

推進系

コア・ブロック・システム採用

シールド装置

開発元

MSV



最初に製造された
ガンダムタイプの試作機

地球連邦軍のV作戦で開発された主力モビルスーツの試作機。結果的に決定版となつたのは型式番号「RX-78-2」が付与された、いわばバージョン2の機体で、本機はその前段階の最初期モデルの1つだ。そのため型式番号の末尾の数字は「1」で、通称、プロトタイプガンダムと呼ばれる。RX-78-2との相違点は、冷却系やバリエーションの総数、主武器のビーム・ライフルがハンドショットガン・スタイルであることなど多岐にわたる。特に顔部形状の違いはビーム・ライフルに合わせたものだ。先行して2機がジャブローで完成し、サイド7で宇宙空間を含むテスト運用が行われた。この時、胴部に冷却ユニットが追加され、大気圏突入能力を得たとする説もある。3機目から製造されたタイプは、RX-78-2仕様となり、先行テストの2機のRX-78-1も仕様変更が行われ、RX-78-2仕様へとレトロフィットされた。このため、ジオン公国軍ファルメル隊がサイド7を襲撃した際には、本機仕様様の機体は存在していない。デザイン面では、『機動戦士ガンダム』放送時に起こされたデザイン案の1つを流用した、というものは有名な話である。



RX-78-1

プロトタイプガンダム (ロールアウトタイプ)

PROTOTYPE GUNDAM ROLLOUT No.1



頭部形状の違いRX-78-1

[派 生]

地球連邦軍

[型式番号]

RX-78-1

[規格]

総高

18.0m

本体高さ

58.8cm

武装

ヘルカン砲×2

ビーム・サーベル×2

ビーム・ライフル

専用ビーム・ライフル

ハイパー・バズーカ

他

機 体

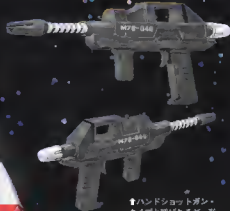
コア・ブロック

システム採用

シールド装置

登場作品

MSV-R

専用ビーム・ライフル
(ハンドショットガン・タイプ)↑ハンドショットガン・
タイプと呼ばれるが、形
状そのものはRX-78-2機
のタイプに近い印象だ。細部で仕様が異なる
プロトタイプガンダム

型式番号「RX-78-1」を冠するガンダムタイプの最初期モザデル、RX-78-1プロトタイプガンダムには、さらに細部が異なるタイプが存在した。その生産1号機は、別に「ロールアウトタイプ」と呼ばれる。特徴としては人間という外殻を中心とした顔部分の形状が異なり、後に続くガンダムタイプにも敢断がない。おそらく初期の段階で仕様変更がされたのだろう。さらに用意されていたビーム・ライフルは、ハンドショットガン・スタイルとは異なっていて、後に仕様が続一さるRX-78-2に近いものが採用されている。→説によるとこの機体は函獲したMS-06ザクIIとの模擬戦闘で圧倒する性能を示したといわれる。

本機は、月刊誌「ガンダムエース」(KADOKAWA刊)で連載されていた、大河原邦男氏のデザインイラスト企画「MSV-R」が初出。そのデザイン源流は、先に触れたプロトタイプガンダム同様、「機動戦士ガンダム」のデザイン機の一つとして描かれたガンダムで、番組用企画書などに掲載されていた。それを大河原氏がリファインし、「ガンダムエース」誌上で披露した形だ。



RX-78-3 G-3ガンダム

G-3 GUNDAM

【 所 属 】
地球連邦軍
【 型式番号 】
RX-78-3
【 SPEC 】
標準高
18.0m
全長
47.2
全幅
ルナ・ネオニウム合金
武 器
バルカン砲×2
ビーム・サーベル×2
ビーム・ライフル
登場作品
MSV

マグネット・コーティング仕様機



予備機から 新機能テスト機へ

RX-78-2ガンダムは、初期に製造されたRX-78-1プロトタイプガンダムが後にRX-78-2へと仕様変更された機体も含めて、計3機が製造されたといわれる。そのうち1号機は、ジオ公国軍ファルメル隊の襲撃に巻き込まれ、2号機、ないし3号機（諸説あり）をアムロ・レイが起動。残った1機はホワイトベースに収容され、稼働機の予備部品となっていた。その機体は、地球上で（オデッサ戦前といわれる）連邦軍により回収され、運動性を大幅に向上させるマグネット・コーティングを施し、それに合わせた新型の教育型コンピュータに換装するなど様々な改修がされ、テストが行われたという。機体はグレイ系で塗装され、型式番号も「RX-78-3」を付与、「G-3ガンダム」と称された。

中でもマグネット・コーティングのテスト成果は、RX-78NT-1ガンダムNT-1アレックスの開発に大いに役立っただけでなく、アムロ・レイ少尉機であるRX-78-2に装備する際にも、そのノウハウが役立ったとされる。その後、機体は実験機のまま終戦を迎えたとも、ア・バオア・クー戦に投入されたともいわれる。

20
15
10
5
0



RX-78SP ガンナーガンダム

GUNNER GUNDAM



RX-78に中距離支援能力を付与した計画機

[開発]

地球連邦軍

[型式番号]

RX-78SP

[SPEC.]

全高

18.0m

全重量

59.5t(推定)

武装

60mmバルカン砲×2
ビーム・サーベル×2
専用ビーム・ライフル

機体カラー

MSV-R

FSWS計画の流れにある
中距離支援起家

RX-78SPガンナーガンダムは、FSWS計画の延長線上にある機体であり、中距離支援能力の向上を主眼に計画されたモビルスーツ(MS)だ。いわばFSWS版RX-77・2ガンキャノンといえるだろう。

同計画の系列機であるFA-78・1フルアーマーガンダムが着脱式の増加装甲を検討していたのに対し、開発当初の段階から強化装甲の一体化を図り、設計段階より組み込まれている。開発コンセプトとしては、FA-78・2ヘビーガンダムに近いかもしれない。

母体となるRX-78・2ガンダムの機動力を受け継ぎつつ、中距離支援能力を強化し、かつ多様な戦闘任務に対応させるというのがその構想であったといわれる。

武装面では、電磁対策されたメインカメラと右側頭部の複合センサーを専用ライフルと連動させ、超精密長距離射撃が可能。背骨ラインドセルは電子戦対応のセンサー・ボッドを装備。これでミノフスキー粒子散布下でも電波通信が可能となった。しかし、結局このプランはRX-78・6ガンダム6号機の設計案に統合され、モックアップモデルまでは製造されたものの、そこで開発が中止された。



FA-78-1 フルアーマーガンダム

FULLARMOR GUNDAM

【 所 属 】

地球連邦軍

【 型式番号 】

FA-78-1

【 SPEC 】

全高

18.3m

本体重量

62.5t

機体色

キナガンダム

肩甲ミサイル・ベイ×2

腕部ミサイル・ベイ×2

2連装ビーム・ガン

武装機体

MSV

強化型ガンダム開発計画
最初の成果となる機体



FSWS計画で誕生した
ガンダム強化案

RX-78-2ガンダムとアムロ・レイ少尉の活躍は、地球連邦軍の志を上げるもので、RX-78の強化型による少数精鋭部隊（ニュータイプ部隊）が全国されるその部隊での運用を目指した強化型ガンダムの開発計画は、FSWS計画と称された。その最初の成果といえるのがFA-78-1フルアーマーガンダムである。

機体の強化方針としては「戦艦並みの能力をモビルスーツに与える」というもので、2つの要素から成っている。1つは防御力の強化と機体の脆弱部分の補強。これには増加装甲の付加も対応した。2つめは火力の強化。背部に口径360ミリのキャノン砲、右腕部に2連装レム・ガン、機体各部にミサイルベイなどを備える。これらの追加装備により機体重量は増加し、当然機動力も低下する。これに対応するための背部、脚部に補助推進器を搭載して、有り余る推進力をすべて解決を図った。

本機については、戦後に至ってもその姿は公式に披露されていない。機体そのものは完成し、テストが行われたことも、ア・バオア・ター1戦以後、開発計画は中止され完成に至らなかった、といわれ詳細は明らかではない。



FA-78-18 フルアーマーガンダム(タイプB)

FULLARMOR GUNDAM TYPE B



[所 属]

地球連邦軍

[機 体 番 号]

FA-78-18

[S P E C]

総高

18.0m

本体質量

68.7t

主 砲

60mmバルカン砲×2

ビーム・サーベル×2

3連装ビーム・ライフル

肩肘3連ミサイル

腕部6連ミサイル

ロケット砲

大気ミサイル・ランチャー

登場作品

MSV-8

破格の性能を持つ
FA-78-1の派生型

多数のミサイルなどで
中距離攻撃力を強化

FA-78-1Bフルアーマーガンダム(タイプB)は、FWS計画で誕生したFA-78-1フルアーマーガンダムの派生機である。増加ウエポンシステムを換装することで、中距離戦闘での総合的な火力の強化を主眼に開発された。左背面部に22連装の大型ミサイル・ランチャーを備え、増加装甲部分には新型のジェネレーターを搭載し、エネルギー効率の最適化を図っている。これにより、右腕部に3連装ビーム・ライフルを装備可能となり、大幅な火力強化を果している。

本機の開発背景には、ア・バオア・クー戦の戦訓から、艦艇の艦砲射撃が不可能な状況での火力支援を担う機体が必要とされたことがあったといわれる。破格の性能を持つ本機ではあるが、その性能諸元については、当時の技術を鑑みても現実離れした面があり、実在そのものが疑われている。いずれにせよ実機製造には至らなかった、という説が濃厚である。

初出は、大河原邦男氏が手がけた「MSV-R」で、漫画作品「機動戦士ガンダムMSV-R ジョニー・ライアーの帰還」(作・A.F.k performance)などでも活躍が描かれている。



FA-78[G] フルアーマーガンダム陸戦タイプ[®]

FULLARMOR GUNDAM GROUND TYPE

【所属】

地球連邦軍

【型式番号】

FA-78[G]

【スペック】

全高

18.0m

本体質量

63.4t

武装

60mmバルカン砲×2
ビーム・サーベル×2
2連装ビーム・ライフル

ロケット砲

ミサイル・ランチャー

登場作品

MSV-R

FA-78-1をベースに
地上用に最適化した機体



陸戦部隊からの要望に
応えて開発された陸戦型

「戦争期の連邦軍には、地
機でも強力な機体の投入が求め
ていた。そのためFWS計
画でも、陸戦用の機体の開発が検
討された。結果、FA-78
V-78-1「フルアーマーの地1版」
FA-78[G]「フルアーマーの地1版」
陸戦タイプが開発された。
こはいえ、ベースとなるFA-
78-1は、宇宙空間における戦闘
機動力を最大限に發揮するよう
設計されており、これを地上に
運用するには機体の軽量化は必
ず必要だ。宇宙空間では大推力
機動力をある程度カバーできて
、地上における重量増加は、機
動性の著しい低下に直結する。そ
のため本機の母体には、RX-78
ガンダムより機体重量の軽い
RX-78-1プロトタイプガンダ
ムが選定された。数値的な差は僅
か。さらに増加装甲などにも
機体軽量化する方面で開発が進め
られた。トータルパフォーマンスで
みれば、旧型のFA-78-1に劣る結
果になった。陸戦では同時代の
機体と比べても高性能があるこ
ろ、否定的な評価を受けること
になった。

また、自衛隊に連邦軍
の有用性を認めさせる機体と
して、開発計画も中止された。

[FA-78 [G] とFA-78-1の装備の違い]

ロケット砲

ミサイル・ランチャー

FA-78[G]
フルアーマーガンダム
陸戦タイプ

2連装
ビーム・ライフル



FA-78-1との最大の違いは 肩部ラントセルに装備するミサイル・ランチャーだろう。機体の軽量化を図ったため、両腕部に装備した武装類は削ぎ出された状態である。関節装甲に増設されるスラスタも陸戦に適したものが配置されているのか、その形状は異なっている。

FA-78-1
フルアーマーガンダム

キャノン砲

2連装
ビーム・ガン



機体の背部ラントセルには、センサー類を備え、右にはロケット砲を装備している。関節増設装甲にはスラスタが増設され機動力の底上げを図っている。増設装甲ユニットによる防御力の向上からシールドは携行しない。その代わり両腕部には小型のシールドが装備されている。

VARIATION



FA-78[G]、フルアーマーガンダム陸戦タイプ (タイプ2)

FULLARMOR GUNDAM GROUND TYPE2

FA-78[G] フルアーマーガンダム陸戦タイプ (タイプ2) は寒冷地仕様の機体である。通常機体のFA-78[G] フルアーマーガンダム陸戦タイプがダークグリーンを基調とするのに対し、本機は白を基調とする。しかし、本機もFA-78[G] 同様に実用化されるに計画案だけで開発が終わった、いわゆる「幻の機体」である。

外觀上は FA-78 [G] とほとんど違いはなく、機体色以外には、寒冷地仕様の装備類が具体的にどのようなものだったかは不明だ。とはいえ、計画案が立てられているからには、環境に適合した仕様が相応に考えられていたことは想像に難くない。おそらく、連邦軍が北極基地などの寒冷地帯で運用していたRGM-79Dシム寒冷地仕様と同じような対策が、本機の場合も検討、採用されていたのではないだろうか。

軍部としては、衛星軌道上への物資の打ち上げに最適な北極基地の防衛や、北部欧州戦線での運用を想定していたと考えられるが、オペレーションの勝利により、早い段階で地球での戦線規模が縮小したため、本機は実を結ぶことはなかった。

氷雪地帯に対応したフルアーマータイプ



FA-78-2 ヘビーガンダム

HEAVY GUNDAM

[所属]

地球連邦軍

[型式番号]

FA-78-B-2

[SPEC]

総高

18.4m

本体重量

52.2t

武装

キャノン砲
(ビーム・キャノン)×1
2連装ビーム・ガン
ビーム・ダークベル

登場作品

MS-X

多くを新規設計された
進化型フルアーマータイプ



追加装甲パーツではなく
直接機体装甲を強化

本機は連邦軍のFSS計画で
提案された機体で、FA-78-1
フルアーマーガンダムの後継機と
も、別試案ともいわれている。

FA-78-1は、ベースとなる
RX-78ガンダムに、装甲パーツ
を機体各部へ追加で装着している
が、これは機体の重量増と機動性
の低下を招いた。そこで本機では、
増加装甲額と本体装甲との一体化
で解決を図っている。そのためRX-
78系の形骸といえるコア・プロ
ット・システムは廃され、上半
身を占めるAパーツは新規設計と
なった。武装面も肩部のロケット
砲はビーム・キャノンに換装され
火力の増強を目指した。

だが、こうした施策でも機体の
重量増による機動性の低下という
問題は解消しきれず、結果的に作
戦行動時間の延伸や展開能力をサ
ポートする支援輸送機、ガンキャ
リールが開発されることとなった。

本機は、FA-78-1同様、一
度、開発計画は凍結されているが、
後に復活し試作機が複製製造され
た(機数に関しては3機、4機な
ど諸説あり)。その後、特殊部隊
へと配備され、旧ジオン公国軍の
バズン基地調査に参加し、戦闘を
行なったとされるが、詳細について
は不明だ。



FA-78-2 ヘビーガンダム (2号機)

HEAVY GUNDAM

[所属]
地球連邦軍

[型式番号]
FA-78-2

[SPEC]

総高さ

18.4m

本体重量

52.2t

武装

ビーム・サーペッド
専用ビーム・ライフル
フレーム・ランチャー
ビーム・キャノン
専用バズーカ、他

機体

シールド装備

登場作品

MSV-R

黒に塗られたFA-78-2の
2つめのバージョン

再開機により復活した
試作機の2号機

試作機として製造されたFA-78-2は、2号機として製造されたFA-78-2の試作機である。FA-78-2の開発計画そのものは、一度は中止されながら、戦後に復活している。

同じFSS計画で立案された「や」設計案のみで終わった」と、開発そのものの案が今一つ判然としないうちに、FA-78-1フルアーマーガンダムと比べると、FA-78-2の場合、試作機製造にまで進みつけている分、機体として一定の成果はあったと考えられる（ただし制式採用には至っていない）。またいくつか製造された試作機のうち、1機は大気圏突入試験の最中に喪失したという。

本機の外観形状などは、基本的にFA-78-2とほとんど変わらないが、専用シールドを装備しているのが特徴。これは前腕部に装着され、普段は折りたたんだ状態で使用時に展開するという、連邦軍でも珍しいタイプだ。その初出は「ガンダムエース」(KADOKAWA刊)誌上のデザイン企画「MSV-R」だが、カラーリングなどは過去に展開された「MS-X」のカラーを踏襲している。その後も漫画作品などで活躍が描かれている。





RX-78NT-1 ガンダムNT-1アレックス

GUNDAM NT-1



バルカン砲

ビーム・サーベル

ダクトリッジ・ガン

コンベイト

【 所 属 】

地球連邦軍

【 型式番号 】

RX-78NT-1

【 SPEC. 】

機体高

18.0m

全幅

40.0

全高

72.5

ベースレイヤー出力

1,420kW

スラスター出力

174,000

センサー有効半径

5,900m

装甲材質

ルナチタニウム合金

武 装

バルカン砲×2

ビーム・サーベル×2

ダクトリッジ・ガン×2

ビーム・ライフル

ハイパー・バズーカ

備 考

ビーム・ライフル、ハイ

パー・バズーカ、ダク

トリッジ・ガンは、機

体中に収納可能。

登場作品

機動戦士ガンダム

0080

ポケットの中の戦争

ニュータイプ専用機となった次世代試作機

ニュータイプ専用機にして
次世代技術の検証機

RX-78NT-1ガンダムNT-1アレックスは、RX-78-2ガンダムと、その最終機RGM-79ジムの次代を担う機体として開発が開始されたが、結果的に連邦軍のニュータイプパイロット、アムロ・レイ少尉の専用機として完成。連邦軍初のニュータイプ専用機といえる本機だが、ジオン公国軍の機体群のようにサイコミュ・システムなどは採用せず、技術的にできなかった。大容量の学習型コンベイトの搭載に、機体の追従性や反応速度向上のためマダネット・コーティングが施されている。また、後年に普及する全天周型ニュータイプの試作型が導入されるなど、すべてにわたって意欲的な仕様である。その結果、性能も当時としては破格なものとなり、連邦軍のニュータイプに対する期待値の高さが窺える。しかし、その反面、一般的な技量のパイロットでは、反応が敏感でとても扱い難い性格の機体となってしまう。

元々は、アムロ少尉の搭乗機RX-78-2に代わる機体として配備される予定だったが、サイド6のリオ・コロニーでの試験中にジオン公国特殊部隊の襲撃を受け、機体中破したため、後の手元に残ることはなかった。

RX-78NT-1の武装・装備

砲径90mm ガトリング・ガン



★★格闘の直接的な打撃力として期待できるガトリング・ガンだが、構造的に前後機軸の制限はありそうだ。



高い貫通力を持った内蔵火銃

本体両腕部に内蔵されている固定武装。3連装の相手で構成された機間砲で、口径は90mmと連邦軍のMSに多く装備されている頭部バルカン砲（口径60mmが標準的）よりも大口径である。

射撃時には前腕部のカバーが展開し、内蔵された榴弾発射部がせり上がって砲撃する仕組みだ。攻撃力は非常に高く、MSの装甲を貫く破壊できる高い貫通力を誇っている。ほかのRX-78系列のガンダムタイプなどには見られない、本機の独自機構といえる、特徴的である。

ビーム・サーベル



✧コロニー内では、機軸を補助、調整とされるのは好ましくない。そのため慎重に動きを止める必要がある。

近接戦闘における定番装備

MS戦での白兵戦における近接戦闘用の装備。連邦軍MSでは定番の格闘用装備といえる。本機の場合もほかのガンダムタイプに準拠して、肩部のランドセルに2本備えている。柄部分の形状には多少の差異が見られるものの、性能面での大きな変化はないようだ。ただ、本機の場合、ビーム・サーベルのマウント位置は、ランドセルの前面面に設けられたホルスターではなく、本体上面部へと変更されている。おそらく推進部の推力強化にともなうレイアウトの変更ではないだろうか。

デュラム・アーマー 装着時



【 型式番号 】

RX-78NT-1 FFA

【 SPEC 】

本体重量

95.0t

スラスター推力

216,000kg

フルアーマーとは異なる専用装備

RX-78NT-1の全身を覆うように装備された増加装甲ユニットで、装甲面は連射時に装甲内の炸薬が反応して弾の運動エネルギーを相殺して本体を守る。爆発反応装甲「デュラム・アーマー」を採用している（現実におけるデュラム・アーマーとは別物）。

その効果は高く、MS用の吸振機構（チェーン・マイン）の衝撃にも耐えることが可能だ。また、この専用装備の装備時には、型式番号も「RX-78NT-1FA」となっている。

パイロット クリスティーナ・マクケンジー



ガンダムANT-1 アレックスの テストパイロット

地球連邦軍に所属。階級は中尉。シューフィッターテストパイロットとしてRX-78NT-1の試験試験のため、故郷であるサイド6のりぼー・コロニーに赴任した。通称はクリス。



RX-79[G] 陸戦型ガンダム

GUNDAM GROUND TYPE

20

コクピット

【 所 属 】

地球連邦軍

【 型式番号 】

RX-79[G]

【 規格 】

GPEC

【 全高 】

18.0m

【 全幅 】

52.8t

【 全重量 】

73.0t

【 ジェネレーター出力 】

1,350kW

【 スラスター出力 】

52,000kg

【 装甲材 】

ルナ・チタニウム合金

【 武 装 】

胸部バルカン砲

腕部マルチ・ランチャー

ビーム・サーベルx2

100mmマシンガン

ビーム・ライフル

ロケット・ランチャー

180mmキャノン、他

【 備 考 】

シールド装備

【 登場作品 】

機動戦士ガンダム

第08MS小隊

RX-78-2ガンダムの余剰部品から製造された陸戦機

腕部
バルカン砲腕部マルチ・
ランチャー

15

10

5

0

東南アジアに配備された
ガンダムの陸戦用派生機

RX-79[G] 陸戦型ガンダム

は、初見早いモリス・M

に配備を要請していた、地球

連邦軍の陸軍の要求に込める形で

開発された。そう、経緯もあ

本機の開発においてはスコー

プ重視であった。

まずMSとしての運用環境を限

陸戦機として、宇宙戦用の装備

を、整備が複雑になりかねないコ

ア・フロク・システムなどは除

外され、機体設計のベースも同時

期に開発が進められていたRG

M79 陸戦型ガンダムのものを利

用する。機体使用する部品

は、RX-78-2ガンダ

ムに製造されたが、戦い常

食に通うなか、規格落ちの部品

などを利用している。規格落ちの

部品も、ルナ・チタニウム

合金に製造されたが、たこが

強度は備えていた。こうして完成

した機には試作機を表す型式番

号「RX」を付けられながらも、

目的には足る機体であった。それが

運用面では、常に部品供給が困

難という問題をは負きま

た。戦においては、東南アジアの戦線

などに配備され、ベトナム公国軍の

MS部隊に配備された。ベトナム公国軍の

MS部隊に配備された。ベトナム公国軍の

MS部隊に配備された。ベトナム公国軍の

MS部隊に配備された。ベトナム公国軍の

MS部隊に配備された。ベトナム公国軍の

RX-79[G]の武装・装備

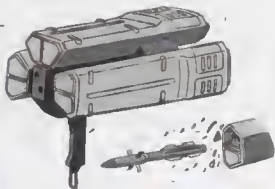
100mmマシンガン



※口径の大きさはあくまでマシンガンに類するが、貫通力・破壊力は高く、MS戦で威力を発揮する。標準装備の火器。

ミサイル・ランチャー

※機体の収納容器は2発1組の構成でランチャー基部に3発セットされている。連射車のMS用火器では定番といえる装備。



180mmキャノン



ロケット・ランチャー



※180mmキャノンは長距離主射撃が可能で、運用時はウェポン・コンテナに分割して収納する。ロケット・ランチャーはハイパー・バスターとは別系統の高弾道兵器。

ウェポン・コンテナ



※状況や作戦に応じて背部のコンテナに必要な装備を移動する。火器類だけでなく、作戦行動に必要な物資の運搬にも用いられる。

VARIATION



陸戦型ガンダム 砂漠戦仕様

砂漠という過酷な環境でも
対応可能なタイプ

東南アジア戦線の戦場は
広域に及び、熱帯雨林だけ
でなく砂漠地帯もある。そ
うした環境に適應できるよ
う、運用されるMSにはオ
プション装備が用意されて
いた。RX-79[G]の砂漠
戦仕様もそうした環境対応
用の追加装備を施したもの
で、関節部分に防護用のシ
ーリングカバー、吸排気口
に防塵フィルターを装着す
る。それでも駆動部分に砂
などが入り込むため、ある
程度の整備は必要である。
「カバーそのものか急造品
で性能が十分ではない可能
性も考えられる」

おもな
パイロット

個性的な面々が集う
08小隊のパイロットたち

カレン・ジョシュア隊長とテリー・
サンダースJr. 軍曹は、ともに地球連
邦軍コンマ大隊の新08MS小隊に所属
するMSパイロットだ。

カレン隊長は小隊の最古参で医学の
心得がある女隊長。テリー軍曹は前所
属部隊で全滅した中で唯一生き残った
ことで自分に負い目を感じていた。2
人ともMSパイロットとしてはベテラ
ンといえ、またまた新木の大隊長である
ノロー・アマタ少尉を支えている。





RX-79[G]Ez-8

ガンダムEz8

GUNDAM GROUND TYPE EZ8

35mm
バルカン砲

コクピット

12.7mm
バルカン砲

【所属】

地球連邦軍

【型式番号】

RX-79[G]Ez-8

【分類】

GPEC

機体高

18.0m(推定)

本体質量

51.5t(推定)

全備質量

71.7t(推定)

ジェネレーター出力

1,380kW

スラスター推力

52,000kg

機体材質

ルナ・チタニウム合金

武装

35mmバルカン砲×2

12.7mmバルカン砲

ビーム・サーベル×2

100mmマシンガン

ビーム・ライフル・他

備考

シールド装備

登場作品

機動戦士ガンダム

第08MS小隊

大破した陸戦型ガンダムを徹底改修した再生機

現地改修で生まれた
「間に合わせ」の機体

オン公国軍の秘密兵器「アレスII」の交戦で大破した、RX-79[G] 陸戦型ガンダムの「アレスII」が現地改修された機体である。型式番号の末尾に「E」がつけられた「Ez-8」は、Exterior Zero-8を略めたものだが、これは現地における機体整備番号といえ、統一的制式採用機を失ったわけではない。改修に際しては、本来用いられず、互換性のあるRG M-79「陸戦型ガンダム」の部品も利用されている。それでも十分ではなく、戦場で調達した敵機「MS-06J」の陸戦型ザクなどの部品など、使える資材は何でも投入して、まじり混ぜて作られた。その結果、その見た目も別機体といえず、妥協したか、性能面は原形機であるRX-79[G]に準じている。ネレター出力などは若干異なる。通常なら大破した機体は廃棄されるものだが、あるところの兵士が台所事情で見る機体でもある。去戦では、東南アジア戦線において、オン公国軍の秘密兵器「アレスII」が投入され、アフサス軍との戦いで大破。搭乗員の「アベタリ」は、行方不明となった。

[RX-79[G] Ex-8の武装・装備]



100mmマシンガン

連邦軍の陸戦用MSにおける標準武装の要撃弾兵器。当時の戦況における信頼性はヒーム兵器に比べても高い。腰部サイトアーマーに予備弾倉を収める方式は原型機のRX-79[G]と同じ仕様。



ビーム・ライフル

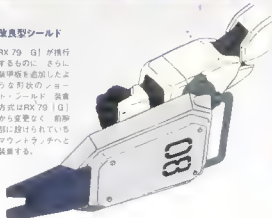
また特殊防衛といえるがビーム・ライフルの使用が可能である(RX-79[G]やMSM-79[G]も同様)。実体弾に比べて強力な破壊力といえるが、現時点では配備数も少なく、技術的な信頼性も高くない。



パラシュート・パック

破風型シールド

RX-79[G]が使用するものに、さらに装甲板を追加したような形状のシールド・ブレード。装備方式はRX-79[G]から変更なく、胸部に搭載されているマウント・リジナルへと装着する。



頭部ユニット

RX-79[G]から大きく変更された頭部V字アンテナは、可変式。両側面部に35mmバルカンを内蔵している(RX-79[G]の頭部には固定武装はない)。

↑MSの空挺降下用の装備。上部がハラシュートで下部はコンテナと推進器という構成。頭部のヘルムでMS本体と接続されている。

おもなパイロット
シロー・アマダ



MSを
サポートする
メカ

地球連邦軍ナバー・トラック
M353A4ブラッド・ハウンド

↑MS支援機車。オーバー走行により道路や地下鉄でも走行可能。後部両側で武器搭載。乗員は20名。チェンジャー。宙空戦用のアンダーグランド・センサーを備えている。



第08MS小隊を
率いる若き指揮官

地球連邦軍補給方面軍コマンド大佐に所属する少尉。サイト2の出身でプリティッシュ作戦時に家族や友人を失った過去を持つ。新米ながら第08MS小隊の指揮官として仲間たちを導く情にもろい熱血漢である。



RX-78-4 ガンダム4号機 (G04)

GUNDAM 004

ビーム・サーベル

バルカン砲

スラスター

【所属】

地球連邦軍

【型式番号】

RX-78-4

【SPEC】

機高

18.0m

本体重量

42.6t

全備重量

80.2t/86.5t

ジェネレーター出力

1,550kW

スラスター推力

70,500kg

センサー有効半径

6,190m

標準武装

バルカン砲×2

ハンド・ガン×2

ビーム・サーベル×2

ハイパー・バズーカ

ライフル

メガ・ビーム・ランチャー

実機存在

MSV

*メガ・ビーム・ランチャーは機体指定

長大なメガ・ビーム・ランチャーで敵を薙ぎ払う



大出力ビームを備えた
宇宙戦仕様

RX-78ガンダムは、8機あるいは8バリエーションが製造されたといわれ、RX-78-4ガンダム4号機（G04）は、いわゆる「セカンド・ロット」といわれるシリーズの1機。本機は4番目の仕様であり、ベースも生産4号機である。セカンド・ロットの機体は本来、RGM-79ジム開発用の機体となるはずだったが、ジオン公国への本土上陸作戦等を想定して、宇宙戦仕様へと改修された。基本仕様はRX-78-2、あるいはRX-78-3仕様をベースにマクネット・コーティングを標準装備、強化型ランドセルへ換装、スラスターを増設し機動力は40%向上。コア・ブロック・システムは排除され、余剰スペースにジェネレーター用の冷却システムを搭載し出力も強化。これはメガ・ビーム・ランチャーの装備を想定した措置で、兄弟機のRX-78-5ガンダム5号機（G05）とは胸部インテーク形状が異なる。一方、重量増加は僅かなので大幅な性能向上が考えられる。さらに両肩にプロペラント・タンクとスラスターが一体化したコンボジット・タンク・ユニット、ランドセルにはプロペラント・タンクが増設でき、近距離の作戦行動も視野に入れている。

RX-78-4 / RX-78-5の武装・装備

メガ・ビーム・ランチャー

RX-78-5専用に加えて、高出力・ビーム兵器。全長は12mにも及ぶ。あまりの威力のため名称のジェネレーターのみでは説明できない。本機にエネルギー・ユニット・バックも搭載して運用する。



エネルギー・ユニット・バック

サイズ対比



ハイパー・ビーム・ライフル



ガンダムタイプが装備する基本的なビーム兵器だが、出力はRX-78-2から40%以上も向上している。またセンサー部のアップデートも行われている。

RX-78-5のジャイアント・ガトリング



足単機のRX-78-5が装備する実体弾兵器。安定部に欠けるメガ・ビーム・ランチャーのサポートをするための副武器が用意された。

RX-78-4とRX-78-5の背面から見る違い

RX-78-5



RX-78-4



背面にも変化は表れるのか?

RX-78-4は主兵器にメガ・ビーム・ランチャーを使用するため、搭載するジェネレーターの強化などが行われている。そのため、RX-78-5の方がスタンダードな仕様の機体といえるだろう。正面からは、その違いがインテーク形状に表れているが、背面ではどうだろうか?

じつはRX-78-4、RX-78-5両機ともに背面部のレイアウトはまったく同じ構成となっているのだ。左図を見比べるとわかるが、違うのはカラーリングのみである。

ジェネレーターの強化は、あくまで機体の内部構造における変更のため、表面化はしにくいかもしれない。



RX-78-5 ガンダム5号機 (G05)

GUNDAM 005

ジャイアント・ガトリングを装備した重火力支援機

【 所 属 】

地球連邦軍

【 型式番号 】

RX-78-5

【 SPEC 】

全高

18.0m

本体重量

42.9t

全機重量

80.5t

（全機重量（ガンダム））

出力（出力）

1,480kW

出力（出力）

70,500kg

センサー有効半径

6,190m

装甲材質

ルチニウム合金

武 器

バルカン砲×2

ハンド・ロケット×2

ビーム・サーベル×2

ハイパー・バズーカ

ハイパー

ビーム・ライフル

ジャイアント・

ガトリング

製作作品

M-MSV



強力な実体弾兵器で
ガンダム4号機をフォロ

合計8機、あるいは8パイロット
ン作られたとされるRX-78ガン
ダム4号機（G04）と同時期に改修
が行われ、マクネット・コアテイ
ンダの採用やコア・プロック・シ
ステムの排除、ジェネレーター出
力の向上など、改修点は共通して
おり、兄弟機と呼べる存在だ。同
機とも基本性能はRX-78、2ガ
ンダムより向上しており、一年戦
争間の機体としてはトップレベル
といえる。本機の性格的には、大
火力のメガ・ビーム・ランチャー
の運用機。RX-78、4を護衛す
る直援機のため、RX-78、4と
は違った性格を与えられている。
主兵器は信頼性の高い実体弾兵器
のジャイアント・ガトリングを装
備。口径90ミリ、装弾数3000
発、ケースレス弾により、毎秒50
発を発射可能というスペックを持
っていた。左腰には大型のドラ
ムマガジンを備える。RX-78、
4と本機は、まさに2機で1ユニ
ットの機体と呼べるだろう。



RX-78-6 ガンダム6号機 (マドロック)

GUNDAM 006 "MUDROCK"



強力な火炮による砲撃で敵を制圧

[所属]

地球連邦軍

[機体番号]

RX-78-6

[SPEC.]

全高

18.0m

全幅

47.3

全幅

84.4

主エンジン出力

1,480kW

スラッシャー出力

70,500kg

センサー有効半径

5,900m

装甲材質

ルナ・チタニウム合金

武装

60mmバルカン砲×2

300mmキャノン砲×2

グレネードランチャー×2

ビーム・サーベル×2

ハイパー・バズーカ

ハイパー・ハンマー

常備武器

M-MSV

武装の強化で
戦闘力の持続を図る

8号機まで作られたというRX-78ガンダムの6番目の仕様とされる機体。これもセカンド・ロットに区分され、他機体と同機本率はRGM-79ジムの開発母体となるはずだった。だが、RX-78-2ガンダムの実験データを元に、連うコンセプトを与えられ、再設計が行われることになる。

RX-78系列機のアドバンテージとして、ビーム兵器の標準装備が挙げられるが、射撃可能数はそれほど多くなく、再チャージのタイムラグなどの諸問題を抱えていた。その間の攻撃力の低下を、従来火炮の増強によって補い、持続的に高い戦闘力を発揮させるのが本機のコンセプトである。主題は固定武装の強化で、両肩に300ミリ低反動キャノンを備え、その基部となるランドセルも大型化。また、両腕部に4連装のグレネード・ランチャーを装備。これらの火炮類による重量増に対応して、脚部には可変スタスタが設置され、機動面にも配慮されている。機体はベガス級強襲揚陸艦ブランリヴァルに配備されたが、ジオン公国軍の特殊部隊「闇夜のフェニックス」の攻撃に対し、未完成状態で出撃。後に完成状態となるが、再度の戦闘で撃破された。



RX-78-7 ガンダム7号機

GUNDAM 7TH

ビーム・サーベル

バルカン砲

コクピット

【 所 属 】

地球連邦軍

【 型式番号 】

RX-78-7

【 SPEC 】

総高さ

18.3m

本体重量

39.2t

全機重量

78.7t

推進力

1,670kW

スラスター推力

70,800kg

センサー有効半径

6,130m

装甲材質

ルチ・デタニウム合金

武 器

・バルカン砲×2

・ビーム・サーベル×2

・ビーム・ライフル

・グレネードランチャー

登場作品

・M・MSV

フルアーマー化を念頭に置いて開発されたガンダム



強化素を想定した
拡張性の高い機体

RX-78ガンダムの7番目の仕様で、生産ベースも7番目というRX-78-7「アガンダム7号機」。他のガンダムタイプと同様に、セカンド・ロケットに属する本機も再改修が行われ、実戦への投入が予定された。ただし、本機の場合、設計段階で一年戦争が終結。その時点でメインフレームだけが完成状態で、宇宙世紀0081年に完成したといわれる（『機動戦記』）。

本機のコンセプトは、フルアーマーを始めとする様々なオプションによる戦況への対応が主眼となっている。そのため、機体各部にはマウントラッチや各種インターフェイス用オプションポートが設けられ、拡張性も考慮されている。搭載ジェネレーター1の強化は数値的には僅かだが、本体の改修は細部にわたり、性能は底上げされている。例えばランドセル自体も、RX-78タイプものを移植したように配置した6基のスラスターにより、高出力化を実現。

その他、マタネット・ゴアティシンの標準装備など、一年戦争末期の改修アタチがフィードバックされ、RX-78NT-1ガンダムNT-1に匹敵する性能といわれる。また、全天候用モニター装備など、次世代技術も導入されている。

RX-78-7の武装・装備

ビーム・ライフル

RX-78-7はガンダムで採用されていたビーム・ライフルの発展版。威力や連射性能などは向上している。また高価なビーム・キャノン用のデバースも採用されており、RX-78-7専用装備となっている。



頭部バルカン砲

他のガンダムタイプや連射式高MSと異なり、口径60mmのバルカン砲。MSの装甲に対しての効果は優れないものの、防空攻撃や単独、対人攻撃などで威力を発揮する。



RX-78-7の背面



専用シールド

RX-78やRGM-79で使用された地球連邦軍のシールド形状を踏襲しつつも、増設装甲のコンセプトに合わせるように、重装甲化が行われている。

同年代に計画されたガンダム完全量産化計画とは!?



RX-81ST
ジーライン・スタンダード



RX-81LA
ジーライン・ライトアーマー

FSWS計画の思想を継承する 新たなRX-81

一年戦争末期にRGM-79シムとは異なる、「RX-78ガンダム」の量産化を目指したのがRX-81だ。だが一年戦争終結後に計画は白紙に戻され、後に、FSWS計画のコンセプトを継承する形で新たに計画が立案された。その内容は、基本フレームをベースに、様々な装甲・兵装の換装によりフレキシブルに状況に対応する機体とされ、名称も新たに「ジーライン」と名付けられた。

RX-81STジーライン・スタンダードはガトリングス・マシーナースタビライザー付きバックパックを装備する。RX-81LAジーライン・ライトアーマーは、RGM-79Lシム・ライトアーマーのコンセプトを継承、軽量化が重視され、頭部に長距離攻撃用のセンサーユニットを装備し、狙撃用ヘビーライフルを使用する。



[機体番号]

HFA-78-2

[SPEC]



機体番号	スラスター出力
18.3m	95,450kg
39.2t	標準配置 ルナ・チタニウム 合金
120.8kg	選装部品 M-MSV
3,110kw	ガンダム・パワー出力
キャノン砲×2 3連ミサイル・ポッド×2 肩部ビーム・キャノン メガ・ビーム・キャノン、他	

時代を先取りした 異形の重ガンダム

RX-78-7ガンダム7号機には、増加ウェポン・システムによる強化が図られていた。これは一年戦争時に地球連邦軍が立案した「FSWS計画」の思想を継承するもので、当初からフルアー・マーシステムの導入が想定されていた。本来のフルアー・マーシステムの特徴は、2段階のオプション装備にある。素体となるRX-78-7にファースト・アー・マーと呼ばれる増加装甲を装備した状態がF.A-78、3フルアー・マーガンダム7号機で、さらにセカンド・アー・マーを装備した状態がH.F.A-78、3重装甲フルアー・マーガンダム7号機となる。この状態は、もはやモビルスーツというよりは、モビル・アー・マーといった性能と、異形のシルエットを持つ。



FA-78-3

フルアーマーガンダム7号機

FULLARMOR GUNDAM 7TH

HFA-78-3

重装フルアーマーガンダム7号機

HEAVY FULLARMOR GUNDAM 7TH

巨大な武装ユニット
セカンド・アーマーを
装着可能な
重火力型ガンダム

セカンド・アーマー装着



【型式番号】

FA-78-3

【SPEC】

全高

18.3m

スラスター推力

78,450kg

本体質量

39.2t

センサー有効半径

7,210m

全機質量

88.7kg

装甲材質

ルナ・チタニウム合金

プロセレータ出力

1,850kW

武装作品

M-MSV

兵装

バベルガン砲×2

ビーム・サーベル×2

ビーム・ライフル

2連装対空ミサイルランチャー

ビーム・スプレーガン

ビーム・キャノン

マイクログ・ミサイル×4

3連装ミサイル・ポッド×2

4連装ミサイル・ポッド×2

ハイパー・バズーカ、他

素体のRX-78-7のスペック
自体は他のセカンド・ロット機に比
べ突出してはいないが、増加装備
類にサブジェネレーターを搭載す
ることで、大出力のビーム兵器の
運用を可能としている。こうした
機體は、RX-78GP03ガンダム
試作3号機にも通じるコンセプト
といえるだろう。ただ、一年戦争当
時の技術力では実現不可能といわ
れており、機體が完成したのは終
戦から2年後のことであった。

RX-78XX
ガンダムピクシー

GUNDAM FIXY

[附 錄]

地球連邦軍

[型式番号]

RX-7BXX

[SPEC]

4-1 4-2 4-3 4-4

マシンガン

登場作品

機動戦士ガンダム

SDIMEI
0079

開発経緯が謎に包まれている
ガンダムタイプ



読群ユニット



ビーム・ダガー



近接・陸戦用に特化した
運動性重視のガンダム

地球連邦軍が開発した陸戦用カ
・ダムの一機で、地上での近接戦
闘に特化している コア・プロ

排除、長甲の変更に加え、極限まで軽量化が図られている。さら

果的「RX 78」2カンダムを人

一回の運動得を獲得した
軽量化によるは倒的なスビッド

敵機に接近し、対モビルスーツ

あり、武装面でも簡略化が図られ

いる。兵装は、白兵戦用の短剣型のピストム・ダカーを二丁座で

使用 大器は比較的威力に劣るが

マシンガンを用意する

本機の出目については、話も多い。だが、一説によると3機が製造

これ、1号機はハルフノスト、3

「いう　つら懐は、ホワイトハ」

輸送任務を受けたアルハトロス輸

上中隊がシオン公園軍からの攻撃

・クライム別が2号機に搭乗

・MS-RTXイフリート

戦となり、結果的にホワイ
、家、出、こ、こ、な、か、た、



RX-79BD-1 ブルーディスティニー 1号機

BLUE DESTINY UNIT 1



機体性能を大幅に向上させるEXAMシステム搭載機

【 所 属 】

地球連邦軍

【 型式番号 】

RX-79BD-1

【 SPEC 】

全高

18.0m

本体重量

52.8t

全機重量

73.0t

装甲材質

ルナ・チタニウム合金

武 器

頭部バルカン砲×2

ビーム・サーベル×2

胸部バルカン砲×2

100mmマシンガン

ビーム・ライフル

腰部有線ミサイル×2

機 名

EXAMシステム搭載機

シールド装備

登場作品

地球勇士ガンダム外伝

THE BLUE DESTINY

対ニュータイプ用に
開発された、奮き死神。

EXAMシステムを搭載したRX-79 G 陸戦型ガンダムヘリスの試作機。EXAMとはシオンの国のフラオガン機関に所属のクルスト・モーズ博士が開発した、モズル・制御デハイスで、ニュータイプ専用機に対抗するため、考案された。モーズ博士の地球連邦への亡命に際して、その技術がもたらされた。

初はRX-79 G 陸戦型ヘリスに開発が進められて、一か、機体かシステムの要求する、バックを満たせず、ヘリス機体をRX-79 G に変更。頭部

ムタイプなのは、すでにシステムを組み込んでいた頭部をそのまま移植したためである。武器は100mmマシンガン

をはじめ、基本的にはRX-79 G 同様のものを装備する。機体性能は、シオネレーター出力の同トやバックネット・コーディネーティングの探る機動性を獲得している。

力、EXAMは非常に不安定、暴走を繰り返し、一度テスト機トを再起不能とし、友軍機受戦という最悪の事態を引き起こす。後に本機のテストパイロットとなるユウ・カシマ少尉の活躍により、事態は収束する。



RX-79BD-2 ブルーディスティニー 2号機

BLUE DESTINY UNIT 2

【所属】

地球連邦軍
ジオン公国軍

【型式番号】

RX-79BD-2

【SPEC】

機高

18.0m

全長

52.8m

全幅

73.0m

全高

ルナ・チタニウム合金

重量

標準バルガン連X2

ビームサーベル連X2

胸部マルカン連X3

100mmマシンガン

ビーム・ライフル

胸部高熱ミサイルX2

武装

EXAMシステム

シールド装置

機体性能

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

機体色

EXAMシステムの真価を発揮する機体



ジオン公国軍に継承され
敵として立ち上がる

特殊な機体制御デバイス、EXAMシステムの搭載したガンダムタイプの試作機の2号機。当初はRG M・79「G」陸戦型ガンダムをベースにしたために性能不足を招き、RX・79「G」陸戦型ガンダムベイスへの移行を余儀なくされた。この経緯を踏まえて、本機は当初よりRX・79「G」をベースに開発が進められている。

基本的な性能はRX・79BD・1ブルーディスティニー1号機と差はないとされるが、変更点は多岐にわたる。外見的にはEXAMを搭載したガンダムタイプのヘッドパーツの採用、武装面ではビーム・ライフルの使用が可能となり、大幅に火力が向上。またバックパックの換装により空防戦闘にも対応可能で、機体性能はそれなりに異なるものとなった。

RX・79BD・1と同様「モルモット部隊」こと第11機体化混成部隊のユウ・カジマ少尉によってテストが行われる予定だった。しかし、開港地のコロニーからの移送中、ジオン公国軍に奪取される。2ムバス・シュターゼン大尉の愛機となり、彼の乗機であることを示すための塗装が施され、カジマ少尉とモルモット部隊の前は立ち上がったことになった。



RX-79BD-3 ブルーディスティニー3号機

BLUE DESTINY UNIT 3

EXAM搭載機ながら白い塗装の予備機

[所 属]

地球連邦軍

[型式番号]

RX-79BD-3

[SPEC]

機体高

18.0m

本体重量

52.8t

全機重量

73.0t

機体材料

ルナ・デタニウム合金

主 機

頭部バルカン砲×2

ビーム・サーベル×2

腕部バルカン砲×2

100mmマシンガン

ビーム・ライフル

腕部有線ミサイル×2

機 器

EXAMシステム制御機

シールド制御機

整備作止

機体富士ガンダム外伝

THE BLUE DESTINY



2号機の追跡のために
生まれた3番目のブルー
RX-AMシステムを搭載したガ
ンダムタイプの試作機の3号機
本来、製造は予定されていなかったが、RX-79BD-2ブルーデ
ィスティニー2号機がジオ公国
軍に破壊されたため、その追撃に
急遽、予備機だった本機が使用さ
れることになる。RX-79BD-
2の予備部品を使用しているため、
空間戦闘への対応やビーム兵器の
使用といった機体仕様も準じてい
る。そのため、RX-79BD-2
との性能差はほとんどない。
一方で、ソフトウェア的にはR
X-79BD-1ブルーディスティ
ニー1号機と同機、EXAMシス
テムのリミッターが設定されてお
り、通常の50%しか機能を発揮で
きない。機体色以外の外見の違い
としては、RX-79BD-2がR
GM-79Gジム・コマンド系のシ
ールドを使用するのにに対し、本機
はRX-78-2ガンダムなどが装
備していたと同型の標準的なシ
ールドに改良を加えたタイプを用
いている。なお、本来は本機にも
ブルー系統のカラリングが施さ
れる予定だったが、急遽、戦場へ
の投入が決まったことで、ベース
機体であるRX-79「G」陸戦型
ガンダムと同じ白ベースのカラ
リングのままとなっている。



RAG-79-G1 水中型ガンダム

GUNDAM MARINE TYPE

【 所 属 】

地球連邦軍

【 型式番号 】

RAG-79-G1

【 SPEC 】

標準高

18.3m

本体重量

47.7t

全機重量

58.5t

ノズルレーザー出力

1,330kW

スラスタースペック

96,700kg

センサー有効半径

4,600m

装甲材質

デガン・セラミック複合材

武 装

ビーム・ピケットX2

ハンドアサルト

特装式

ハープーン・ガン

前向きビーム・ライフル

高機動モード

登場作品

M-MSV

エースパイロット専用の水中戦用ガンダム



アクア・ジムを元に
開発された水中型

一年戦争におけるジオン公国軍の水中戦用モビルスーツ(M.S.)は、これに対応できる兵器を持たない地球連邦軍にとって、大きな脅威となった。また地球連邦軍はM.S.開発にも遅れを取り、汎用M.S.であるR.G.M.・79ジムの開発に進んでいるのが実情だった。

そこで軍部では、R.G.M.・79をベースに水中戦用のM.S.を開発することを決定した。この成果として完成したのがR.A.G.・79アクア・ジムだ。ランドセルや肩部に、水中推進用のハイドロジェットを備え、武装も水中戦対応の魚雷や、サイルが用意された。だが、試験の浅い局地戦用M.S.の開発を短期間で行ったため、戦場では満足いく評価を得ることができなかった。こうした状況に対応するため、エースパイロット用に再設計されたのが本機だ。頭部はガンダムタイプだが、基本はR.A.G.・79で、厳密にはR.G.M.・79のバリエーションといえる。しかしジェネレーターの出力向上をはじめ、ハイドロジェットの増設や装甲形状の変更、水中用前向きビーム・ライフルなど、大規模な仕様変更が行われた。結果ベース機体の面影は残されないほどの改修となり、性能も大幅に改善されたという。

RAG-79G-1の武装・装備

両向ビーム・ライフル



●RAG-79G-1は中距離ガンダム専用兵器として開発された射撃型兵器。水中では両腕からビーム兵器の両端を突出すべく、ビームの収束率を変更できるように改造が施されている。



炸薬式ハーブーン・ガン

左腕部に搭載される射撃兵器。水中戦のように弾を射出するもので、弾体には炸薬が内蔵されている。弾に命中すると中の炸薬が爆発してダメージを与える。



ミサイル・ランチャー・ガン

ミサイル・ゴッドと大規模兵器射撃で開発される水中戦用の射撃兵器。本来はRAG-79アクア・ジムの装備だが、機況によっては使用されるケースも考えられる。



ライフルカバー

使用戦術を考慮して戦場に両腕から出す際、両腕部分を保護するカバーが装着される。



両腕ユニット



●両腕部には両腕ユニットを装着している。ユニットそのものは可動式なので潜水艦などに装備されているものとは低価格が異なる。本機はいわゆるジム並列の機体タイプだが、両腕の要因はガンダムを強く意識している。

地球連邦軍の水中戦用機事情



RAG-79
アクア・ジム

RAG-79ジムをベースにした、水中戦に対応した武装・装備が施された本格的な両腕戦用機。しかしながら、ジオン公国軍のそれと比べると、性能面では見劣りする。現場での評価は芳しくないが、長期運用されている。



RCM-79U
ジム・スloop

ジオン公国軍の水陸両用機に対抗するため、開発された。しかし、RAG-79ジムに専用オプションを追加搭載するという、ベース機体の汎用性に欠けた仕様である。武装面も明暗が多く、実証実験的な性格が強い機体と思われる。

じつは使い勝手が悪い!? 連邦軍の水中戦用機

地球圏をすでに統治下に置いている地球連邦政府と地球連邦軍にとって、そもそも水中戦を主軸とした局地戦用機はあまり重要な兵器とはいえない。それでも一年戦争時は攻められる側であり、地球修復作戦を展開してきたジオン公国軍が繰り出す、水陸両用機をはじめとした局地戦用モビルスーツを野放しにするわけにはいかなかった。ただし、軍部の開発における熱意の差というのは、開発された機体群を見ても、ジオン公国軍に比べて高いものではなく、あくまで「間に合わせるために必要な兵器」といった印象である。これは地球連邦軍の戦略が、当初から宇宙を主戦場に据えていたことと不可分ではないといえる。つまり、主戦場たりえない海洋に割くモビルスーツ開発リソースは最低限確保されていなければならないことである。一年戦争以後も水中戦用機への姿勢は変化することなく、一年戦争時に開発された機体やそこから採収した機体の運用が主軸であった。こうした傾向が宇宙世紀0100年代近くまで続いている。結果現場で運用される機体は長く現役を過ごすことが、戦艦そのものの頻度は宇宙と比べて低く、耐航のでもあったため当然といえる面もあった。

RX-78GPD1
GUNDAM GPD1



RX-78GPD2A
GUNDAM GPD2



RX-78GPD3
GUNDAM GPD3

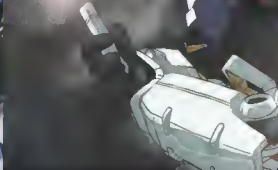
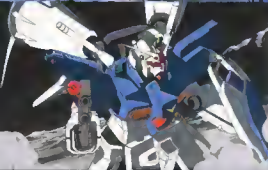
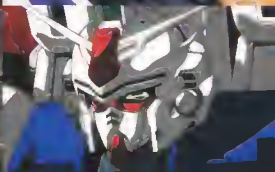
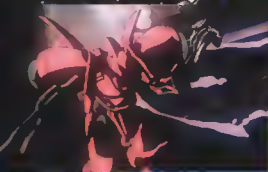


機動戦士ガンダム0083
STARDUST MEMORY

PART 2

一年戦争後の ガンダムたち

U.C.0083 -



ガンダムシリーズのOVA作品第2弾といえる 機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY (以下0083) 本作では多数(3機)のガンダムが登場し、さらにガンダム同士が戦いを繰り広げる OVAという作品の特性もあって、ハイオリティな作画で描かれている。本作のバトルシーンは現在見ても色褪せない。

映像で
振り返る

ガンダム激闘録

PART. 2

「デラース紛争編」

機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY

主役級のガンダム2機が
オーストラリアで激戦を展開!!

「デナハイム・エレクトロニクス社製のカンダムタイプの試作機2機が空へ送られた地球防衛軍のトリート基地から。この一機は、これを迎撃に派遣する前衛兵器システムを搭載する禁忌の機体だ！ これを狙って、ノーオ公国軍の残党、テラース・フリートは星の周回軌道上より強襲計画を実行、潜入したアナベル・カートを、機体を搭載したカンダム試作機2機を首尾よく盗み出すか、なり行きて搭乗したコウ・ウラキのカンダム試作1号機と戦いに突入。ここには『カンダム対カンダム』の、ある意味、事の決別の火蓋が切られ、落ちてきた！」

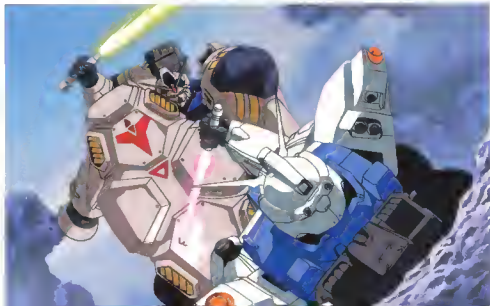
STUDENT TESTIMONY

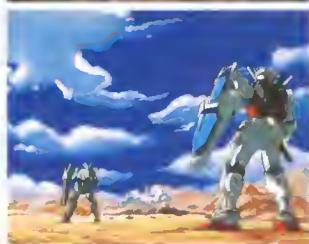
機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY
1991年 OVA作品
第1話「ガンダム帰郷」&第2話「終わりのなき追撃」より



と追撃する。つは武勢に迫られるものの、現場にメーナの勘當カンタム試作2号機のノールトを備へ、命懸けを課せさせ難を逃れて、ウ植ちカトは取り逃がしてまゝ。

カンダムメス 新兵であるコナリ モン
 考し、の賢名で聞かれる伝説の ス カートと乃力の者は歴史
 負い下がる づり力もナカナカ はあるが 2戦のカンダムラ
 戦いを繰り返している傍らでは カトを脱出させるためのテラ
 コットのMS部隊が襲撃作戦を展開している 基地周辺でも激し
 い戦闘が展開されており 多くの死者を出し 基地もかなりのダ
 ンを受けることとなる





ガンダムの能力を活用し 膠着した局面を開閉する

カトーを追いつアフリカにきたアルビオン隊は、アルビオン艦内のパイパイを逃がせることで目的地=シオン残党軍のいるキンハライト基地を突き止める。しかし、基地ではガンダム試作2号機を打ち上げるべくHLVの準備が進められていた。これを阻止せんとアルビオンは基地に迫る。だが、モンシアやコウたちは敵の機動で身動きが取れない。刻一刻と迫る打ち上げの瞬間、なんとカトー部隊の協力を要した。たのも東の間、無情にもカトーを乗せたHLVは自陣の尾を引きながら宇宙へと消えていく。



■事態を打開すべく、コウを利用するモンシア中尉。まさか、乗ったコウの活躍が功を奏するとは。



→ガンダムは強引に、アフリカ戦線に突進。地味な面々、カトーの活躍は、カトーの活躍。

機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY

機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY
1991年 OVA作品
第4話「熱砂の攻防戦」より



撃破寸前まで追い込まれるガンダム！ シリーズ屈指のレアシーン？

ガンダム試作2号機を追って、宇宙へと上がったアルビオン。暗黒宙域へ向かうもシーマ艦隊と戦い、ハニノク大尉の助言を無視して、コウは私情から未調整のガンダム試作1号機で出撃する。しかしそんな甘さを手練のシーマ様が見透してくるはずもなく、嵐多撃ちにかかるガンダム試作1号機。ハニノク大尉は足のキスを叩き割って出撃してくれなく、たまたまコウは戦死していたはず。シーマ様が舌を巻くほどと強敵なガンダム試作1号機にも感謝しないどね何事も天狗になてはいけない。ということですね。



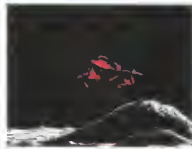
■文字通り、倒れる。ガンダム試作1号機、撃たれる。たまたま、コウの活躍が功を奏するとは。



→シーマ様は、機体のダメージは、わかっている。しかし、出撃し、撃たれる。たまたま、コウの活躍が功を奏するとは。

機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY

機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY
1991年 OVA作品
第5話「ガンダム、星の海へ」より



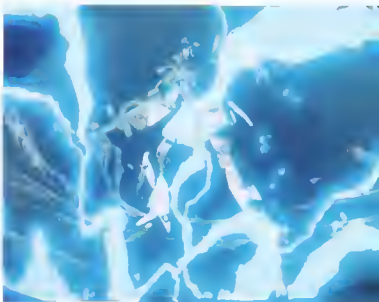
宇宙用フルハーニアンの実力は!? 最初の敵はレストアMA

SEVEN STORIES

機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY
1991年 OVA作品
第6話「ファンブラウンの戦い」-第7話「青く輝く夜」より

寛政の元パイロット ケリィ・レスナーが月面都市で1人コックピットと製作していたMAヴァル・ヴァロ そのレストア作業には シンとシカ、かけで知り合いになったコウも協力していた そんなケリィは星の屑作戦にこのヴァル・ヴァロで参加するつもりであったが、シナに裏切られ、半は死に場所を求める形でアルヒオンのガンダムタイプに決闘を申し込む 月面でケリィのヴァル・ヴァロと 改竄されて間もないガンダム試作1号機フルハーニアンの戦いの火蓋が切られて落ちる

フルハーロとガンダム試作1号機フルハーニアンの戦いは MAなフルハーロの圧倒的なパワーと火力でヴァル・ヴァロが優勢 コウも果敢に反撃するものの、歯が立たず吹飛ばされる始末 しかも不発弾と見誤ったプラズマ・リターの電撃で窮地に立たされる 戦いを止めに来たニナとキース シム・キャノンII で危機を脱したが、今度はニナが流弾に撃たれてしまう これかきかけでコウは覚悟を決め、怒りを込めてケリィさんと本気で戦うのである!



本気で戦うコウだが、巨大なヴァル・ヴァロは一筋縄ではいかない ヒーム・ライフルも有効打にはならず、接近戦を試みるべく距離を詰めて撃つが、それが仇となってヴァル・ヴァロのプレキシフルクロー・アームに捕まってしまう! たが コウはとっさの判断で下半身をバースして脱出 ヒーム・サーベルでヴァル・ヴァロの腹部を突き勝利した 本来は脱出装置として考えられているコア・ブロック・システムの機転を利かせた便方でピンチを脱したコウだった

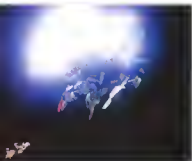




フルバーニアン速度をしても
核攻撃阻止には間に合わない!

機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY

機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY
1991年 OVA作品
第9話「ソロモンの悪夢」～第10話「激突戦域」より



コーヘイトウ ソロモン で戦艦武を行う連邦軍艦隊に対し テラース・フリードはMS部隊で強襲する。しつはこれはカトーのガンダム試作2号機が核を撃ち込むための陽動作戦。少数の連戦「リク・トム」のみで暗礁海域を進むガトーたち。しかし、連邦軍の無人迎撃システムにキャッチされ強行突破を図った。この際、ガンダム試作2号機は武器を使わず格闘戦。蹴りで破壊した。核兵器以外の基本武装がハルカン砲とヒーム・サーヘルくらいしかないから、ある意味、仕方ない。

「暗礁海域にガンダム試作2号機!」の報を受けるも、主戦力はカトーと、は遠い位置で戦闘中。コウは足の速い自分のガンダムなら間に合うかもしれないと迎撃に向か。しかしカトーはすでに艦隊の真上に到達。アトミ・ク・ハスカーが火を噴き連邦軍艦隊の2、3が壊滅してしま。皮肉にも自軍が犠牲になることにより、ガンダム試作2号機のコンセプトの有用性が証明されたことになる。核を向けられた連邦軍士官たちはどんな思いで宇宙に帰っていったのだろうか。一合掌。



アトミ・ク・ハスカーの一撃で連邦軍艦隊に大ダメージを与えたガンダム試作2号機だ。たか、左腕が動かない不具合が発生していた。そこへコウのガンダム試作1号機フルバーニアンが到着し、艦隊に突入。互いにヒーム・サーヘルで折り結びながらも、ハルカン砲で牽制するカトーの機量はさすが。たが、コウも負けず胸部スラスタを目眩ましに利用するなど、機軸が利く様子にはハイロトとしての成長が窺える。戦闘の結果は、両者相打ちの形で機体は大破してしま。た。



「ガンダム」の概念を覆す 複雑なシステムの巨大兵器登場!

テラース・フリートによるコロニー落下作戦を止める切り札となつたコウの新たな機体 カンダム試作3号機 コウは規格外の大きさの兵器を駆り コロニー・アイラント・イスに先行 途中「団体がテカいたけ」と戦力を見失つたテラース・フリートのMS隊を蹴散らし さらにカートの乗る巨大MA ノイエ・ゼールと交戦したフィールののおかげで ノイエ・ゼールにもあるけど コウは有利に戦闘を展開することができていた たが 補給のために合流したアルビオンのもとへ帰還することになった



→ コウは新「カンダム」を手に入れるため、逆襲士官に撃たれた。ニナが回復が死んだ。苦戦中。

→ コウは新「カンダム」を手に入れるため、逆襲士官に撃たれた。ニナが回復が死んだ。苦戦中。



STARDUST MEMORY

機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY.
1991年 OVA作品
第12話「強襲、阻止境界点」より



おちおちと補給もままならず!? 過酷な戦闘で披露する面々

一旦母艦のアルビオンに帰還し 整備と補給を受けることになった コウとカンダム試作3号機 何より目立つのはその巨大な宇宙空間で作業する整備員の様子からも非常に大掛かりで運用が難しい機体なのかわかる 本来なら補給はパイロットにとって休養の時間だが 敵はそれを許さない 補給中でも容赦なく戦闘が起きる その際 コウも疲労が抜けきらないまま コア・ユニットでもあるMS カンダム試作3号機ステイメンで出撃することになるのだから その戦闘シーンは非常に残念

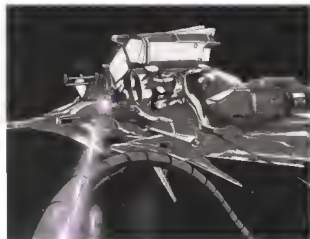


→ コウは新「カンダム」を手に入れるため、逆襲士官に撃たれた。ニナが回復が死んだ。苦戦中。

STARDUST MEMORY

機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY.
1991年 OVA作品
第12話「強襲、阻止境界点」より





「守りの要」を破壊され失った コウ対ガトーの戦いの行方は!?

捕虜を終えて再出撃するコウは、コロニーを守護する敵部隊と交戦。その巨体から素早い戦闘には不向きに見えるガンダム試作3号機だが、ムサイのフリンを大型ヒーム・サーヘルで両断! その戦闘力の高さをみせつける。だが、カトーのノイエ・シールとの再戦で一転ピンチに陥る。なんとノイエ・シールの有線コロニー・アームが頼みの1フィールド・ジェネレーターを破壊。ヒーム兵器に対して無防備となったガンダム試作3号機は次第に押されていく。そしてその激戦の最中、落下するコロニーは阻止限界点を超越する。



→両目の解いた鉄網を草薙活
りて、超のワークザイ、
トを収めるとは、さすがは
ロモンの夢、である。

→レロロール、なから敵軍
を回避するなど、サイズに比
し運動性や機動性の高いカ
トーに試作3号機。



機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY
1991年 OVA作品
第12話「強襲、阻止限界点」より

機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY
1991年 OVA作品
第12話「強襲、阻止限界点」より



すべて「存在しなかった」ことに!? 驚天動地、前代未聞のガンダム開発計画

落下するコロニーを食い止める秘策として連邦軍はソーラ・システムIIを繰り出した。だが、カトーの攻撃でコントロール塔を撃破したこと、威力が足りず、コロニーは眩い光を放ちながら北米大陸へと落ちてい、た。一方、コウはソーラのカーペラ・テトラとの交戦に勝利し、再びカトーに狙いを絞る。死力を尽くして戦う両者だったが、残存するソーラ・システムIIの光が包み込め、互いに生き延びたものの、カトーは焼けたノイエ・シールで連邦軍艦隊に呐喊して敵り。コウは戦いの虚しさを思い知、た。その後、ガンダム開発計画は記録抹消となり、歴史の闇に葬られた。でも、そのおかげで一時期収監されていたコウは釈放されるので、結果オーライじゃ済まないよね。



→ソーラ・システムIIで突撃
げになり、武器ユニットをハ
ンカ、ガンダム試作3号機
システムは、電圧にヒーム
レイフルを放つ、やいばの
コウの怒りと、みかだめ
れた、0083 後のラスト
・チェックだ。

機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY
1991年 OVA作品
第13話「駆け抜ける嵐」より

機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY
1991年 OVA作品
第13話「駆け抜ける嵐」より



RX-78GP01 ガンダム試作1号機

GUNDAM GP01 "ZEPHYRANTHES"

バルカン砲

ビーム・サーベル

コクピット

伝説のRX-78ガンダムをリポート

【所属】

地球連邦軍

【型式番号】

RX-78GP01

【SPEC】

機体高

18.0m

本体重量

39.7t

全重量

65.0t

ノミネーター出力

1,790kW

スラスタースペック

108,000

装甲材質

ガンダリウム合金

武器

60mmバルカン砲x2

ビーム・サーベルx2

90mmマシンガン

ビームライフル、他

機体色

ブルー、ホワイト

登場作品

機動戦士ガンダム

0083

STARDUST MEMORY



白き伝説を継承する
RX-78の純粋な後継機

地球連邦軍とアナハイム・エレクトロニクス（A.E.）社の共同による「ガンダム開発計画」によって誕生したガンダムタイプの試作1号機。開発コンセプトは、一年戦争で活躍したRX-78-2ガンダムの発展型、機能を含めたシルエットも踏襲している。その機体構成も教育型コンビューターの搭載をはじめ、脱出ボートとデータ保護を目的としたコア・プロテクシステムの採用など、RX-78の機能や構想を継承しつつより進化させている。

その他にF.D.・XIIコア・スライターの推進器を、機体用の推進器として利用するなど、新たなコンセプトも取り入れている。装備面では、Eバック式のビーム・ライフルの採用、アンチ・ビームローディング技術のシールドをはじめ、一年戦争時から発展した最新技術が投入されている。

また性能向上を遂げた結果、コア・ファイターIIと名義機として、地上・宇宙という各々のフィールドにより適したものに特化することにより大きな能力を獲得している。

コア・ファイターは、A.E.社内の開発部門だけで用いられた名称で、ヒガンバナ科の花「セフィランサス（玉簪）」を由来としている。

90mm
マシンガン

ジム系列機の主力装備と
なった実弾兵器



戦後の連邦軍艦に普及した装備の1つ。運用コストや攻撃力などを加味した結果から、デラース紛争時には連邦軍系MSの標準的装備となった。RX-78GP01も戦況に応じて、この実弾弾兵器を装備して実戦に参加している。

ビーム・
ライフル

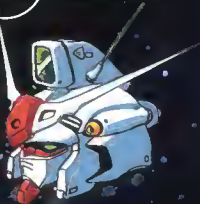
革新的に進化した
主力ビーム兵器



高出力ビーム兵器であり、特徴すべき点はEバック方式を採用している点にある。RX-782では、しばしばエネルギー不足に見舞われたが、この駆動方式の導入で運用性が向上。またビーム・ジュウチをパレル下に装備する。

60mm
バルカン砲

胴部に内蔵された
牽制用実弾弾兵器



口径60mmの実弾弾を発射する固定砲座。対峙するMSの機甲に対しての効果はあまり期待できないが、MSの各部のカメラ・アイやセンサーなどの破壊には有効。主に対空機や牽制用としての用途が一般的である。

ビーム・
サーベル

一年戦争を経て定着化した
格闘戦用のビーム兵器



近接戦闘用装備として、本体背面部に2基を装備する。コア・ファイターII時には、ビーム・ガンとしても使用可能。宇宙仕様への換装時には、推進ジェネレーターが強化されるため、より強力な装備へと進化する。

FF-XII
コア・
ファイターII

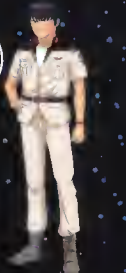


ガンダム試作1号機の要
コア・ユニットとなる戦闘機

パイロットの生存率向上と機体の保護というRX-782のコンセプトを継承する飛行ユニット。戦闘機からコクピット・ブロックに変形し、本体のメインジェネレーターも兼用する。RX-782とは異なり、メインスラスターは機体外へと露出する形で、MS形態でも利用される。また本機とMS本体との接合作業は、基地や周庫内で行われる。

パイロット
コウ・ウラキ

- ⇒ 地球連邦軍
- ⇒ 少尉
- ⇒ 19歳
- ⇒ タイムリーハン
- ⇒ 士官学校卒



偶然が重なり
正式パイロットに

地球連邦軍トリントン基地で訓練を積んでいた若きテストパイロット、デラース・フリードによるガンダム強奪事件に遭遇し、偶然的にRX-78GP01ガンダム試作1号機に搭乗。のちに正式にパイロットになり、乗ったRX-78GP02Aガンダム試作2号機を扱う。



RX-78 GP01-Fb ガンダム試作1号機フルバーニアン

GUNDAM GP01Fb

ビーム・サベール

ユニバーサル・ブラスター・ボット

コクピット

【 所 属 】

地球連邦軍

【 型式番号 】

RX-78 GP01-Fb

【 SPEC 】

機体高

18.5m

本体重量

43.2t

全機重量

74.0t

ジェネレーター出力

2,045kW

スラスター・推力

234,000kg

装甲材質

ガンダリウム合金

主 機

60mmバルカン砲×2

ビーム・サベール×2

ビーム・ライフル

機 名

シャ・アト・機體

登場作品

機動戦士ガンダム

0083

STANDOFF MEMORY

戦闘で中破し、宇宙戦用機に改修

宇宙戦用に換装された
ガンダム試作1号機

RX-78 GP01-Fbガンダム試作1号機フルバーニアンは、RX-78 GP01ガンダム試作1号機の空間戦闘仕様である。RX-78 GP01ガンダムは宇宙、地上を問わずシームレスな運用が可能だったが、モビルスーツ（MS）という兵器が成熟する過程において、機体を用進に特化させた方がより能力が高くなることわかってきた。UC0083は、MS発展の過渡期にあり、本機は換装により状態により適応できるという新たなコンセプトが採用されている。

大きな変更点は、機体システムの中核を担うコア・ファイターを宇宙戦仕様のFF・XII・Fbとして、これには、ユニバーサル・ブラスター・ボットが採用され、宇宙空間でも優れた機動性を発揮した。また搭載ジェネレーターの強化に、推進器も熱核ジェット/ロケット・エンジンへと変更されている。MS本体の胸部にもリバーシブル・スラスターが設けられ、機動性の向上に役買っている。そのほか胸部推進タンク、肩部アポジモーターの追加など、地上仕様と比べると、かなりの仕様の変更が行われている。

ビーム・ライフル

最新鋭技術を導入した次世代のビーム兵器



機体の改修前と同じく、本機の主兵器となるビーム兵器。Eバリア方式は、のちのグリアス戦役ではスタンダードとなっているが、当時は最新鋭の技術といえた。戦艦下部にビーム発生部がある点も同じで、ビーム・ジュウツを装備。

ビーム・サーベル

さらに強化された近接戦闘用ビーム兵器



RX-78 GPO1Fbへの改修によって、搭載するジェネレーターと、ユニット構造のレイアウトの変更が行われている。コア・ファイター時にビーム・ガンとして使用できる点は、RX-78 GPO1と同様の機構である。

FF-XII-Fb
コア・ファイターII-Fb



コア・ファイターIIとのちがいは

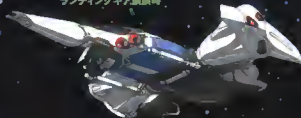


●機体とも機体より後半部分に異な点は多い。FF-XII-Fbでは、主翼はユニバーサル・ブースト・ポッドに置き換えられ、インテーク部は4バース・スラスターになっている。

空間戦闘用に一新されたコア・ユニット

本機における最大の変更点が、コア・ブロック・システムの要、コア・ファイターの変更といえる。MS本体の武装機構のような改修ではなく、別ユニットとしてFF-XII-Fbコア・ファイターII-Fbへと交換された。搭載ジェネレーターやエンジンユニットの強化が図られた別物の機体である。

ランディングギア展開時

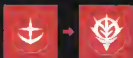


謎多き試作0号機ブロッサムとは？

より特 性 を
求 め た 作

ガンダム開発計画におけるトリアル機体の1つ。コンセプトは万能性（マルチロール）の追求で、それを実現するためにコア・ブロック・システムを模造させた。それぞれの用途に適したコア・ファイターを状況に応じて換装させる方式で、これにより特化した機体性能の追求を試みていた。さらに高機動化を求めた結果、ブースターユニット・コア・ブースターII）との合体という仕様にまで発展した。開発を手掛けたのはRX-78 GPO1ガンダム試作1号機などを生み出したクラフ・ワークスである。（初出：電撃ホビーマガジン）





RX-78GP02A ガンダム試作2号機

GUNDAM GP02A "PHYSALIS"

【所属】
地球連邦軍
デラーズ・フリー

【型式番号】
RX-78GP02A

【SPEC】

全高
18.5m

本体重量
54.5t

全機重量
83.0t

出力
1,860kW

出力
155,200kg

装甲材質
ガンダリウム合金

武器
60mmバズカン砲×2
ビーム・サーベル×2
アトミック・バズーカ

機体色
白・青・赤・黄

機体特徴
冷却用の
専用リールド装置

開発機
RX-78GP01A

開発機
RX-78GP01A

開発機
RX-78GP01A

開発機
RX-78GP01A

開発機
RX-78GP01A

開発機
RX-78GP01A

開発機
RX-78GP01A

開発機
RX-78GP01A

開発機
RX-78GP01A

開発機
RX-78GP01A

開発機
RX-78GP01A

開発機
RX-78GP01A

開発機
RX-78GP01A

開発機
RX-78GP01A

開発機
RX-78GP01A

核兵器運用を
想定したガンダム



戦術による攻撃を主眼
にした強襲・制圧用ガンダム

RX-78GP02Aガンダム試作
2号機は、「ガンダム開発計画」
によって開発された。開発を手掛
けたのはアナハイム・エレクトロ
ニクス社の、田ジオニクス社のキ
ビロストツ（MS）開発者で構成
される第2開発事業部で、ジオ
公国系重MSのコンセプトを継承
している。同じ計画機のRX-78
GP01ガンダム試作1号機とは異
なり、強固な装甲と機動性を両立
させるという、RX-78シリーズ
の中でも独自の強いものとなっ
た。最大の特徴は核兵器運用機とい
う点で、これは一年戦争時、地球
連邦軍がジオ公国軍による核攻
撃で、多大な損害を受けたことが
発端という。搭載される核弾頭は
戦略核に匹敵する威力のMk-82
が予定されていた。機体自体も耐
核仕様を考慮し、耐熱、耐衝撃性
を重視した設計がなされている。
専用シールドもMS用としては
オーバースイズだが、これも核爆
発から機体を守るため。物理的な
衝撃吸収以外に、シールド内の冷
却装置を併用して熱線から機体を
保護。シールド裏面にアトミック、
バズーカのバレルを収納するなど、
すべてが核運用に特化している。
ウーデネームは「サイサリス・ホ
オズギ」に由来する。

RX-78GPO1の武装・装備

60mm バルカン砲

牽制に用いられる実体弾兵器が
唯一の射撃兵器



機体が機兵器運用に特化していることもあってか、本機は通常兵器の類はほとんど装備していない。機体に備えたバルカン砲が唯一の射撃兵器というのも、本機の運用が特殊であることの表れだ。

ビーム・ サーベル

ガンダム試作2号機の
数少ない格闘戦用装備



近接戦専用のビーム兵器で、連邦軍系MSには背面部のランドセルなどに装備するのが標準的だ。本機の場合、機体の両サイドに1基ずつ装備する。形成するビーム刃は出力調整が可能であり、高い攻撃力を誇る。

専用シールド

機兵器を使用するため
欠かせない必須装備



別名タジェターシールドとも呼ばれるRX-78GPO2Aの専用装備。アトミック・バズーカ使用時に機体の重なる熱と、熱線の遠隔冷却を行う特殊装置。シールド本体内部には液体窒素などの冷却用触媒を内蔵している。

アトミック・ バズーカ

すべてを飲み込む
恐るべき兵器



Mk-82型核弾頭の使用を想定した核弾頭投下機。通常時は分割して収納され、使用時には右背面部の基座とシールド内にマウントした機身部を接続する。射出するMk-82核弾頭は背面の格納部から発射する。

Mk-82核弾頭

真鍮を大きく重く、威力を持つ。連邦軍の軽戦車で、連邦軍艦隊を襲った。

VARIATION



RX-78GPO2A ガンダム試作2号機 MLRS仕様

RX-78GPO2Aは、核攻撃をコンセプトとしているMSだが、機体の装甲や機動力を活かした、本来的な重MSとして運用するプランも検討されていた。多連発ロケットシステム=MLRSを搭載したタイプも、そうしたプランの1つで、火力支援型としての運用が想定されていた。ただ、このプランは、あくまで試案の域を出ないので、核攻撃機としての開発が進められたため、幻に終わった。

パイロット アナベル・ ガトー

★ ジオン公国軍宇宙空軍少将
★ デラウズ、フリード
★ ジン

「ソロモンの悪夢」の
兵器で知られる
ジオンのエース

一年戦争後、デラウズ・フリードに参加した元ジオン公国軍のエースパイロット。総数は少佐。ガンダム強奪事件の実行犯として、自らRX-78GPO2Aのパイロットとなり、再びソロモンに悪夢を呼び起こすことに。



RX-78GP03 ガンダム試作3号機

GUNDAM GP03 "DENDROBIUM"



【 型式番号 】

RX-78GP03

【 SPEC 】

全 高	全機重量
38.5m	453.1t
全 長	推進力
140.0m / 73.0m (ガンダム型機)	38,900kW
全 幅	スラスター能力
62.0m	2,265,000kg
全機重量	武装内容
226.4t	ガンダム試作3号機 0083 STARDUST MEMORY
主 機	武装内容
大型ビーム・サーベル×2 メガ・ビーム砲 武装コンテナ×16	

【フィールド・ジェネレーター搭載】

大規模クロー

【 内部攻撃ができる 】
コア・ユニットのガンダム試作3号機ステイメンは、オーキスに接続された拡張機体の使用が可能。機体内部は拡張機体のフォールディング・アームを展開し、オーキスコンテナ内から引き出して使用する。



RX-78GP03の武装・装備

武装
コンテナ

様々な武装を
搭載する格納庫



本体上面にあるウェポン・コンテナの内蔵は、16基のコンテナ・スロットに区画されており、それぞれのコンテナごとに大型集束ミサイルやマイクロ・ミサイル、標準機やMS用の火器などを収納している。

1フィールド・
ジェネレーター

ビームを防ぐ
防御装備



本体右側面に搭載される1フィールド発生装置。1フィールドはメガ粒子砲などのビーム兵器を無効化できるので、臨時的にかなりやすい大型機体には必須の装備。開発には、旧ジオン公団の技術が活用されているという。

コア・ユニット

破格の性能を誇る 超巨大機

メガ・ビーム砲

驚異の火力を持つ 最強の機動兵器

RX-78 G.P.01ガンダム試作1号機、RX-78 G.P.02 Aガンダム試作2号機とも異なるチームで開発された。コア・ユニットであるモビルスーツ（MS）のRX-78 G.P.03ガンダム試作3号機ステイマンと、アームドベース「オーキス」で構成される。規模的にも能力的にもモビルアーマーを彷彿とさせる超大型機動兵器だ。

本機は、いわば巨大な武器庫に機動力を付与したものである。大出力のメガ・ビーム砲、マイクロ・ミサイル、爆弾などといった多数の武装で突出した火力を実現。フォールディング・バズーカ、ビーム・

ライフルなどMS用の武装も搭載。オーキス部のウェポン・コンテナは、任務に応じて装備の換装が可能であり、拡張性も考慮されている。

大型機ゆえに対ビーム兵器用のバリアー発生装置、Iフィールド・ジェネレーターを搭載。大型クロウと大型ビーム・サーベルで近接戦闘にも対応可能で、あらゆる戦況を想定した動く要塞である。コンセプト的にはジオン公国軍のM.A.08ビグザム

の発展型といえるかもしれない。なお本機のコードネーム「デンドロビウム」はランの一種の学名で、オーキスはランの花の意「orchid」に由来する。



コンテナはバージが初編

上面ユニットは文字通りのコンテナではなく、収納されたすべての近接戦用を使い果たしたり、潰瘍して廃棄したりすると類なるラッドワットになるため、不意とまったコンテナ部分を継接して作戦展開が可能。

サイズ対比



RX-78 G.P.03
ガンダム
試作3号機

メガ・ビーム砲

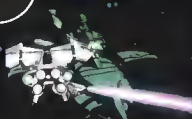
宇宙艦艇に匹敵する 威力を持つビーム兵器



機体の右側面に装備するメイン武器。MSでは換装不可能な全長60mにもなる大型のビーム兵器であり、シーマ艦艇の旗艦、ザンジバル級リリー・マルレーンを一撃で葬り去るほどの凄まじい威力を持つ。

大型ビーム・サーベル

艦船も真っ二つにする 大型格闘兵器



機体下面部にある大型クローの内部に装備する近接戦闘用のビーム兵器。高出力で最大なビーム刃を発生させ、宇宙艦艇すら両断することが可能。また大型クロー自体もMS級の格闘戦に用いることも可能だ。



RX-78GP03S ガンダム試作3号機ステイメン

GUNDAM GP03S "STAMEN"

【所属】

地球連邦軍

【型式番号】

RX-78-S

【SPEC】

機体全高

18.0m

本体重量

41.6t

全高重量

70.0t

バネレクター出力

2,000kW

スラスター推力

188,800kg

武装付与

ガンダリウム合金

機体色

白・ガンダムブルー
ビーム・ライフル
ゼーメルディ
バズーカ

機体名

ワールド等価

登場作品

機動戦士ガンダム
0083 STARDUST
MEMORY

巨大な武器庫を制御するガンダム



パイロット
コウ・ウラキ

コンペイトウ（ソロモン）におけるガトーとの対決で爆発機を失うが、開発が凍結されていたガンダム試作3号機を半ば奪取して爆発した。

MS単体としては、他の同計画機と比べると凡庸に映るが、実際は単機でも優れた性能を持つ。腰部に装備するアールバイندرは、AMBAC効果により高い機動性を発揮。また、コクピットには後世MSのスタンダードな装備となる全天周モニターや、リニアシート採用など、次世代技術が積極的に投入されている。コードネーム、ステイメンは花のおしべを意味する「Stamen」が元。

MS単体としては、他の同計画機と比べると凡庸に映るが、実際は単機でも優れた性能を持つ。腰部に装備するアールバイندرは、AMBAC効果により高い機動性を発揮。また、コクピットには後世MSのスタンダードな装備となる全天周モニターや、リニアシート採用など、次世代技術が積極的に投入されている。コードネーム、ステイメンは花のおしべを意味する「Stamen」が元。

ユニットの中核となる
高性能宇宙用MS

RX-78GP03ガンダム試作3号機のコア・ユニットとなるモビルスーツ（MS）。他のガンダム開発計画機とは異なり、重力下での運用は考慮されていない宇宙専用機だ。アームドバズーカ・オーキス」との連動が考慮されており、ウエポン・コンテナから装填弾を取り出す際に機能する収納式のフオールディング・アームを腕部に備えている。



RX-78GPD4 ガンダム試作4号機 (ガーベラ)

GUNDAM GP04 "GERBERA"



数奇な運命を辿った幻の機体

[所属]

地球連邦軍

[機体番号]

RX-78GPD4

[SPEC]

機体高

18.2m

本体重量

46.1t

全機重量

73.6t

主エンジン出力

1,730kW

スラスタ数

224,000基

装甲材質

ルナ・チタニウム合金

武装

ビーム・サーベル、光束

専用ビーム・ライフル

ロングレンジ・

ライフル

武装

シールド設備

登場作品

機動戦士ガンダム

0083 STARDUST

MEMORY

機體をコンセプトとした 4番目のガンダム

ガンダム開発計画において立案された4機種目のガンダムタイプコンセプトは、ジオン公國軍のMS-18Eケンパフアーのように、高速で敵艦深くに侵入し強襲作戦、あるいはモビルスーツ（MS）との格闘戦を展開する機体として計画された。そのため背面には、プロペラントタンクとブースター機能を備え、機動性向上を重視したシニズム・ブースターを装備する。だが、コンセプト自体は同計画機のRX-78GPD1ガンダム試作1号機と類似する点も多く、そのため最終的には計画から排除されてしまった。一方でロングレンジ・ライフルの装備など、本機ならではの特徴もいくつかはある。

結果的に地球連邦軍の開発計画からは除外されたが、もう一方の計画主眼であるアナハイム・エレクトロニクス社内では、技術検査機として開発が継続され、これが本機の転機となった。「デラリス紛争」の折、開発途中の本機には偽装が施され、AGX-04ガーベラ・テトラとして、デラリス・フリードのシーマ・ガラハウ中佐へと供与されたのだ。まさに戸籍のない機体であるからこそ可能な業だが、そのため本機が存在自体、闇に葬られることになってしまった。



AGX-04 ガーベラ・テトラ

GERBERA TETRA

【 原 装 】

デラース・フリード

【 型 式 番 号 】

AGX-04

【 S P E C 】

機 体 高

18.0m

全 機 重

46.7t

(ショウロム・ブースター
装着時45.0t)

全 機 重

73.2t

(ショウロム・ブースター
装着時70.0t)

シールド駆動能力

1,710kW

スラスタ・推力

216,000kg

(ショウロム・ブースター
装着時18,000kg)

最高速度

ルネ・アタニウム合金

機 体

ビーム・ガンダムⅡ

110mm機関砲×4

ビーム・マシンガン

機 体

シールド装置

機 体

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

Anaheim Electronics

密約によって旧ジオン軍残党に渡った元ガンダム



政治的な取引で大改修
されたガンダム試作4号機

「デラース紛争」の折にジオン残党軍が使用した実験用MS。その正体はアナハイム・エレクトロニクス（A.E.）社によるガンダム開発計画におけるRX-78GP04G「ガンダム試作4号機・ガーベラ」をベースにした機体だ。

A.E.社の重役、オサリバン常務は、地球連邦軍と「デラース・フリード」の間で結ばれたシーマ・ガラハウ中佐と交わされた密約によって、デラース・フリードへと供与された。外装には偽装が施され、若干の機体改修も行われている。

機体コンセプトは、機動性を主眼にした機体性能の追求であり、機体各部に設けられた姿勢制御バーニアを用いることで、180度の姿勢変換に要する時間はわずか0.9秒という高速機動を実現。また高機動ユニットとプロペラン「ブラスター」の装備が可能であるこの巨大なユニットは近接戦闘時の運動性低下を防ぐため、バースジすることもできる。

実戦ではガラハウ中佐の乗機として、RX-78GP03ガンダム試作3号機を急襲するも、遂にメガ・ビーム砲の砲身に貫かれて致命傷を負い、さらに口口距離からのビームを受けて機体は消滅した。

110mm
機関砲

連射性の高い
実弾兵器



それぞれの脚に2門ずつ、合計4門が備わっている内蔵式の機関砲。ガンダムやジムタイプで採用する60mmバルカンより大口径であり、凌駕する性能を持つ。高機動戦闘を重視する、本機には、追加された装備だ。

ビーム・
マシンガン

機体の特性に合った
ビーム兵器



パルス状のビームを連射するビーム兵器で、高機動の機体ゆえ一撃の威力よりも、連射性も重視している。エネルギーパックは連射用の規格品を使用。製作のため過剰演算には強制施されず、使用不能になる。

シュツルム・
ブースター

作戦移動時間を延ばす
オプション



プロベラントタンクとブースター一体化したオプションで、2基のプロベラントタンクを増設可能。基本的には作戦領域までの長距離機動用の動力付も標準。なお、本機映像では未登場となっている。

パイロット
シーマ・
ガラハウ

- ◆ ジオン公国軍
第100機
◆ デラーズ・フリード
◆ 中絶
◆ 35歳



デラーズ・フリードの女性搭乗。汚れ仕事ばかりを任せられる組織内での立場に不満を抱き、地球連邦軍がアデハイム[®] エレクトロニクス社とも密通している。その結果ガーベラ・テドラを入手した。

VARIATION



AGX-04
ガーベラ・テドラ
(ロールアウト時)



機体後もガンダムを思わせる顔だった?

元々ガンダムタイプをベースとした機体だけに、機体が行われたとはいえ、構造的にはその面影を随所に残している。特にロールアウト時にはツインアイと2本のロッドアンテナを装備するなど、まだまだガンダムの印象を残すものであった。これでは機体が不十分と判断されたのか、最終的にはジオン公国系MSを思わせるモノアイタイプのセンサー類などに換装されている。



武闘型を外した状態



パイロットファイル

『サンダーボルト』のガンダムパイロット！ イオ・フレミングとは!?



●コクピットでシヤスを演じてお
り、イオのガンダムが近づくと顔
パイロットスワップ
パイロットにはその面が映りこる。

一年戦争初期に壊滅したサイド4のコロニー「ムーア」酋長の子息で、同コロニー出身者で構成されたムーア同胞団のMSパイロット。規律違反の常習者で品行方正ではないが、技量は確か。音楽と、自身に自由をもたらしてくれる存在としてMS（とそれによる戦い）を好む。作中では一年戦争時はフルアーマー・ガンダムに搭乗し、リビン

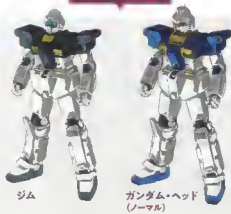
グデッド節団のダリル・ローレンツのサイコ・ザクと壮絶な戦いを繰り出した（戦後も宿敵として度々死闘を繰り広げている）。戦後は南洋同盟と連邦軍との戦いに身を投じ、立場を利用してその資金でアトラスガンダムを乗戦とする。クローティア・ペール、コーネリアス・カカという2人の幼馴染とは親しい間柄で、戦場でも一語だったが、

RGM-79/GH
ガンダム・ヘッド

機体と、一へかす、
伝説化、る機体、カンタム
を、な、機体、を、機体、
公国軍兵士に、威圧感を与える
機体、機体、の、カラ、リング
も、カンタムを、機体、したフル、系
、2連機、と、ム、ライフルを
装備、ア、ハオア、クー、機、お
て、投入されている。



ノーマルジムの比較



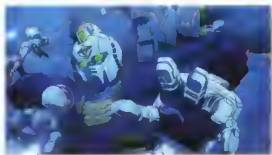
ースとなるジムと比べてみると、頭部以外はほぼ同じなのがわかるだろう。武装類は異なるものの、おそらく共有化が可能なはずだ、また「ガンダム」の名を冠してはいるが、V字アンテナなどは装備されず、顔部分には連邦軍のエシフレムが付いている。





RX-78(GS)
陸戦型ガンダムS型

一年戦争時期に投入された通称
車のMSの1つ。戦後も運用され
サンダーボルト作戦に投入され
た。旧版の「スバルタン」から陸戦
型ガンダムS型の名が付けられ
ている。武装も一掃され、ヒ
ム・ライフル、ヒム・ロー
ペリオンにもなるヒム・サ
ルなどを装備している。



オリジナル版ともが

RX-78(GS)
陸戦型ガンダム

設定では、ノオン公
国軍のMSに対抗す
べく、RX-78ガンダ
ムの規格落ちしたパ
ーツを使い製造され
た陸戦用の急造機で
ある。また「サンダ
ーボルト」版とは投
入時期が少々異なっ
ているのも特徴的だ。



漫画『機動戦士ガンダム サンダーボルト』とは？

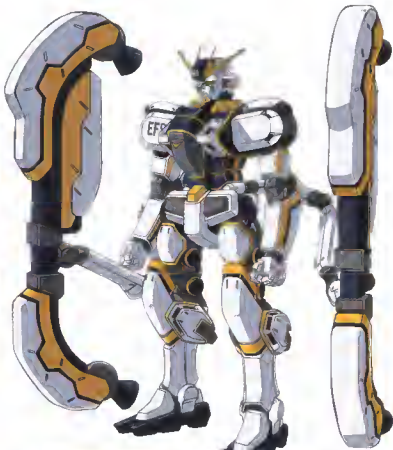
機動戦士ガンダム
サンダーボルト
原作 矢立肇・富野由悠季
脚本 太田垣雄男
「ビュンゴロ、フスベリ
オール」にて連載中！
単行本はビュンゴロより15巻ま
で発売中



太田垣雄男氏によるコミック作品で、『ガンダム』
の作品世界観に則った外伝的な物語だ。一年戦争末
期のア・バオア・クー戦から終戦直後の様子を描かれ、
現在はアジアを勢力圏とする南洋同盟との戦いとい
う。本作ならではのオリジナル展開で継続中、ライ
バル関係のイオやダリル、そこで生きる人々の葛藤
を描きつつ、登場メカ以外にも、ニュータイプに対
して太田垣氏独自の解釈がなされている意欲作だ。

→ 漫画に登場するMSの姿は、アニメ版
とは異なるデザインのものも多い。こ
ちらは漫画版の陸戦型ガンダムである。

RX-78GAL
アトラスガンダム



↑→ 旧戦艦の資金援助で開発されたガンダム。ジオン公団軍の水陸両用MSの技術が投入され、陸地関節構造を持ち水中戦も可能な革新的なアームを搭載したサブフレームと2割の大型スラフターユニットが特徴。機力下での飛行やウェポン・レイと「の能力も有する。サンダーバード。オリジナルのガンダムタイプである。

サブフレームなし状態



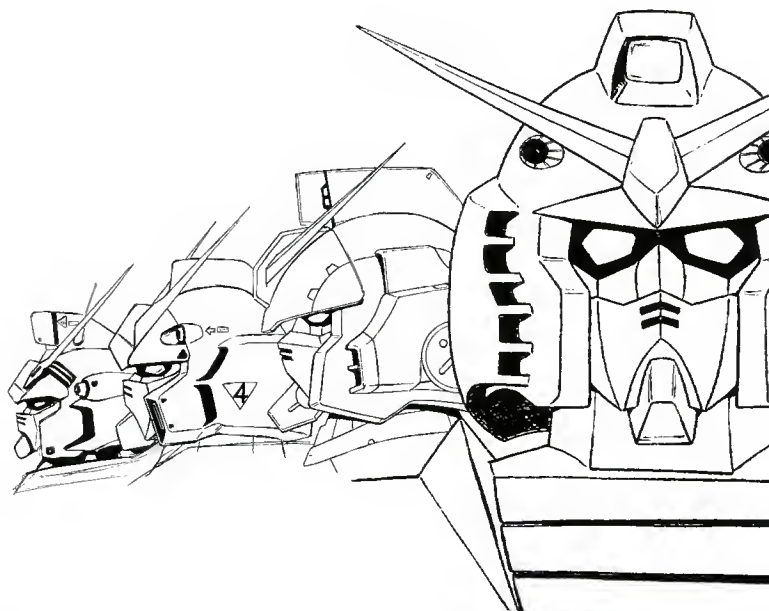
●主兵器は大型のニールガン。機体軍の水陸両用MSを「撃つ」撃破する。ヒール兵器より大気での飛翔と大気下での大火力と「」も有用。

●機体の機体構造で「ガンダム」としては珍しい水陸両用機としての能力を備える。また一年戦争直後の時代だが全宇宙でニールガンが採用されている。



RX-78 GUNDAM

読み物／インタビュー



【検証】

RX-78ガンダム 「試作機」の真実

「RX-78ガンダム」は地球連邦軍の試作モビルスーツなのは御存知の通り。しかし、厳密にはRGM-79ジムに對する「試作機」と考えると、おかしい部分もまだ多い存在だ。ここでは、その後、宇宙世紀で開発され続けたRX-78シリーズを俯瞰しつつ、地球連邦軍の考えていたRX-78像について考察してみたい。

文：小高正隆



はじめに

戦場投入によって 神話化したRX-78

「RX-78ガンダム」は論評の難しい機体である。一般的なイメージとしてのRX-78は一年戦争における地球連邦軍、ジオン公国軍の戦術的優位性を担保していたMS・06ザクIIの技術的優位性を覆した機体として、宇宙世紀史上の記念碑的な存在といえる。

そしてその後も地球連邦軍において長く活躍したRGM・79ジムをはじめとするRGM系列機の始



旧日本海軍の艦上戦闘機「烈風」



航空自衛隊の先進技術実験機「心神」

出典：航空自衛隊ホームページより

祖に位置付けられる偉大な試作機である。それと同時に、予期せぬ戦線への投入、その結果挙げた大戦果、また搭乗していたアムロ・レイ少尉がニュータイプとされたことも含め、地球連邦軍のフラッグシップマシンと言っても過言ではないモビルスーツ(MS)だろう。だがRX-78は本当に試作機だったのだろうか？

確かにRX-78は、その後のMS開発に決定的な影響を与えた機体である。だがそれは、本当に地球連邦軍の量産MSの系譜に直接繋がるものであったのだろうか。偉大なエースパイロットの愛機と

して地球連邦軍の反攻の先頭に立った、伝説の光輝に包まれた神話のMSと、凡庸な工業製品としてジオン公国軍を圧倒した量産機RGM・79。この両機の間の直接的な関係とはいえば、そもそもRX-78とRGM・79の外見を見ても、その共通点は多いものの、著しく違う部分もあり、その関係性はひどく曖昧ともいえる。

本稿ではRX-78という機体の基本的なコンセプトや技術的特徴、系列機との関係性を検討しつつ、地球連邦軍MSの始祖としての「ガンダム神話」についての解釈を試みたい。

コンセプト実証機としてのRX-78

RX-78ガンダムの機体コンセプト面での最大の特徴は、史上初めて対MS近接戦闘用の白兵戦用MSという点にある。RX-78の技術的特徴の過半は、このコンセプトを実現するために存在すると言ってもよく、その意味では量産を前提とした試作機というよりは、高性能な教育用コンビューターとコア・ブロック・システム、ルナ・チタニウム合金を採用した新機体、ビーム・ライフルとビーム・サーベルなどの携行ビーム兵器の実用化が指摘できるが、コストを度外視して導入されたと思われる教育用コンビューターとコア・ブロック・システムは、必ずしも量産に対応したものでないだろう。これは試験機にありながら、テストパイロットとデータ回収を確実にするための機能である可能性が高いからだ。

一方、新機体とビーム兵器の実装は、対MS戦闘用の近接戦闘

用MSという、RX-78の基本コンセプトを実現するためのものであり、特にビーム兵器は将来的に出現する量産機にも導入すること想定されていたはずの装備である。RX-78によるビーム兵器の運用は重要なテーマであり、試験における実績が、予定された量産機へフィードバックされるのは当然である。

こうしたコンセプトや新技術の実証機的なイメージに近い機体を現実の過去に探そうと、アメリカの試作機、実験機シリーズのXプレーンや、航空自衛隊がステルス技術などの先進航空技術の確立と習得のために製造した先進技術実証機（ATD-X）、通称「心神」などが、例として挙げられるだろう。「心神」は将来予定された次期戦闘機開発のデータ収集と共にステルス機の実証機として運用ノウハウの習得を目的として製造された機体である。そのため設計には戦闘機的なイメージを持つが、実用戦闘機への直接の発展は考慮されていないワンオフ機である。本来、RX-78に期待されたものも、そうした点にあったと考えるべきだろう。

連邦軍のもう1つの可能性だったRX-06ザニー

これを裏付けるように地球連邦軍にはRX-78に代えられるV作

戦機と異なるMSが存在しており、一説には天敵投入まで行われたとされる。それが地球連邦軍最初期のMS「RX-06ザニー」である。地球連邦軍は一年戦争の開始と前後して、ジオン公国軍が実戦運用していたMS-06ザク1や、MS-06ザクIIの実戦を怯えた状態で入手しており、その技術解析に基づいて完成させたのがザニーである。

ザニーは地球連邦軍にとってMS技術を習得する習作機であると同時に、戦時において応用的にMS戦力を得るための機体といえた。ザニーは性能的にはMS-06を大きく超えるものではなかったが、MS-06と大差ない性能の機体が配備されることは地球連邦軍にとって一定の価値があったはずであり、意図的な1つとしたらザニーの大規模な量産もあっただろう。しかし実際には、ザニーの生産はごく少数にとどまり、地球連邦軍ではRX計画をベスとして、新機体のMS開発計画「V作戦」が立案される。これは、新しいコンセプトに基づいたMS運用体系の構築を優先したためだろう。RX-78は地球連邦軍におけるMS開発計画「V作戦」の真打として、理想とされた機体であると同時に、地球連邦軍のイメージするMS運用体系の中核に位置する。V作戦のMS群としてはRX-78に先行して

「RX-75ガンタンク」「RX-77-2ガンキャノン」等が存在するが、これらの中へ長距離支援用機は、白兵戦用のRX-78との選定を前段に構想されており、この時点で汎用機としての「ザク」にすべての役割を担わせている。ジオン公国軍のMS運用とは一線を画している。

この3機種からなる近接戦闘用MSと火力支援MSの組み合わせは、やや複雑すぎる部分があり、後にRX-75系列は戦闘車両とMSの中間的な存在として独立運用に変更となる（RMV-1ガンタンクIIはそうした方向性で再設計された車両である）。など完全な成功を取ればよかったが、それもまた新しい兵器の連動コンセプトを確立するという点では意味があった。MSの戦闘ユニットとしては、近接戦闘用MSと中距離支援MSとの組み合わせが、ある種の正解で、現実には地球連邦軍はRG、79とRB、79ボールによる編成を一年戦争後期のスタンダードなMS運用とし、実戦において高いパフォーマンスを発揮したが、比較的に短期間で地球連邦軍が、MS編成の「正解」に辿り着いている背景には、第13独立艦隊でのV作戦機の実用実績も影響する。MS運用体系の模索というV作戦と、コンセプト実証機としてのRX-78の

関連目的は成功したということになるだろう。一年戦争に關して期待された使命を果たしており、アムロ・レイによる活躍は、余録といえべきものであろう。これは戦争は続くのであり、RX-78によって蓄積された戦訓への対応が、未来の戦場を見据えた新たなコンセプトが模索された。当然のことながら、その実証を妨げるのはRX-78シリーズの追加製造機である。

RX-78第二次ロット 試作機のコンセプトの変化

サイド7でホワイトベースに搭入が予定されたRX-78をはじめとするV作戦の最初の生産機群（これを仮に第一次ロットと呼称し、続く量産機群を第二次ロットと呼称する）は、ジオン公国軍偵察部隊の襲撃によって各1機を残して中大破した。混乱の中でアムロ・レイという伝説的パイロットを得たこともあって、RX-78まで、ジオン公国の名だたるエースパイロット、強力なモビルスーツ「M.A.」を含む多数の襲撃戦果を記録していくことになる。もっとも後年の活躍から、絶好的探偵技を持つていたかのように思われるアムロ・レイだが、この時点ではMSの操縦経験もない



RX-78-6
ガンダム60号機



RX-78-5
ガンダム50号機



RX-78-4
ガンダム40号機

民間人の少年でしかなく、その戦果の一部は、RX-78の性能に助けられていることは間違いない。強靱な装甲防衛と強力なジム兵器という対MS戦闘を重視したガンダムの機体コンセプトが一般人だったアムロ・レイを生き延びさせ、同時に成長させたのである。

一方、地球連邦軍では第二次口ノトにあたるRX-78、4ガンダム4号機から8号機（諸説あり）までの設計と製造が開始されていた。これらの機体のうち、一年戦争中に機体の竣工に着き着けて実戦投入されたのは、RX-78、6ガンダム6号機までである（諸説あり）。ちなみにこの、号機がRX-78の通算製造番号であるかは判断としない。広く知られるようにガンダムⅡRX-78には、サブナンバー（末尾の数字）によって区分される型式があり、この型式は竣工後のレトロフィットによって変更されるケースがあった。

アムロ・レイが愛機とした機体は、初めて実戦経験をした時点では「RX-78、2」であったが、その後、ソロモンの戦を経てマグネット・コーディングが施されると「RX-78、3」仕様になったとされる（こうした口ノトフィットによる仕様変更における型式番号の変更は、実在の戦車や軍用機でもよく見られ、機体番号が振り直されることもある。旧日本海軍の

軽空母「列風」の当初の型式番号はA7M1であり、海軍は試作機の受領順にA7M1とナンバリングしていた。しかしA7M1は性能不足のため、一旦は受領された機体エンジンを換装し、型式もA7M2に変更された。この際、機体のナンバリングは振り直されA7M1の1号機とA7M2の1号機は別の機体となった。海軍はエンジン換装した機体の受領順に番号を振り直しており、管理上は合理的だが、機体の来歴を機体で追っていくには混乱を招く事例である。これと同様にRX-78、4からRX-78、6までの竣工時には、ハッキリしない部分もあり混乱があるように思えるが、コンセプト実証機にあらざる仕様変更などにより、機体ナンバーと竣工順が前後することは起こりうることだろう。

それはともかく、RX-78の第二次口ノト製造機には、第一次口ノト製造機とは異なるテーマが設定されていたと考えられる。サイド7での戦闘とそれ以降の活躍は偶然のものであったが、第一次口ノト製造機の能力がジオン公国製MSを凌駕するものであることはすでに確認されていたから、同一仕様の機体を製造する意味は薄い。第一次口ノト製造機によって、実現の目途のたった近接戦闘用MSをいかにして発展させるかが、第

一次口ノト製造機のテーマであったと思われる。

似て非なる機体 RX-78、4とRX-78、5が 狙ったものとは？

こうした文脈で見ればRX-78、4ガンダム4号機と、RX-78、5ガンダム5号機は、原型機の持つ汎用性を追加装備によって拡張することを狙った機体と見ることができると。特にRX-78、4には対艦攻撃を視野に入れた大出力のビーム兵器の装備が構想されており、これはRX-75等で構想された長距離支援用MSへの回帰にも見える。

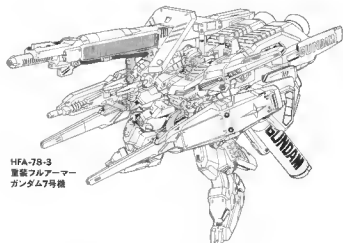
しかしRX-78、4が従来の長距離支援用MSと異なるのは、機体そのものに大きな改修を行うことなく、携行装備とランドセーラー機能を実現していることである。RX-78、4の戦術機といた近距離離脱機と、簡便な方法で射撃機能を実現していることである。

RX-78、4の改修機といた武装パッケージが用意されていたRX-78、5は、兵装の方向性だけを見ればRX-78、4とまったく異なるが、ベースとなる機体そのものの規格は同一である。この2機は外部装備の換装、ソフトウェア化が設計上のテーマなのだろう。戦時中にも関わらず、こうした研究が推進された背景には、将来

的に宇宙艦隊における指撈MS運用の合理化を進めたい、という要望が、地球連邦軍内にあったのだろう。機能別に分けた複数の機体を搭載できるよう、単一機体を任務ごとで装備換装によって運用した方が合理的だった。

これは搭載機数に制約をかける空母の場合、特に大きな影響をもつ。このため、空母艦載機のマルチロールをを目指す試行錯誤は歴史上、幾度も繰り返されてきた。1980年代のアメリカ海軍は空母艦載機として戦闘機「F-14トムキャット」と攻撃機「A-6イントルーダー」を搭載していたが、現在では戦闘機と攻撃機の機能を統合した「F/A-18E/Fスーパーホーネット」1機種で整理されている。RX-78、4とRX-78、5で検証された方向性もこれと同様のもので、大口徑の重火器やビーム兵器を搭載した中長距離戦対応機と近接戦闘用機を同一機体で実現することを目指している。

もっともこの時点での近接戦闘用機と中距離戦対応機の統合は必ずしも成功したとはいえない。RX-78、4による遠距離離脱機は一定の戦果を納めたが、ビーム兵器のチャージに時間を要し、機体への負担も少なくなかった。一説によるとRX-78、4は試験運用中に喪失したといわれており、結果的に右思に対して技術的



MAの影響も受けた
ガンダム7号機とその系譜

78、4の失敗も意味のないものではなかっただろう。

R X、78、7は、機体各部に追加装備用のマウストラノチを持つ構造まではR X、78、4などと同じではあるが、その本質はM SをM Aのコア・ユニットとして利用している点にある。ブレーンな状

現実が追いついていない例ともいえる。

製造のRX-78、77は第1、2試作機と大差ない追加補修によって戦用MSだが、このシナプスによって重装甲、大火力機へと脱皮しているが、この機体コンセプトは、計画だけに終わったことも試機がロールアウトしたともいわれるFA-78、1フルアルファの機体コンセプトに近く、一定の関係性を持つのだろう。最終的にMS本体のサイズに匹敵する兵装「ブースターユニット」(HFA-78 3重装)「ガンダム」(ガンダム号機)を管制ユニットとなっている。これによって、MSを外部オプションによってMA化させているので、地球連邦軍のジオン公団のMAへ

と同根のもので、地球連邦軍における技術トレンドなのだろう。

本機で検証された「MSをコアとするMA」というコンセプトはデラーズ紛争時にガンダム開発計画で開発されたRX-78GP03ガ

ンダム試作3号機に継承され、さらなる発展を見せている(計画記録そのものは抹消されている)その後のMS、MA開発技術に一定の影響を与えたという点でも技術実証機としてのRX-78-7の開発には相応の価値があったといえるだろう。

「異端児」にも見える
ガンダム6号機が狙ったもの

RX-78、4、RX-78、5と
同時期に試作されながら、RX-
78試作機群の中で、やや異質な印
象を受けるのが、通称マドロツク
で知られるRX-78、6ガンダム
6号機である。ランドセルに2門
のキャノン砲を持ち、ガンダムタ

低反動砲を装備することで対処を
図るものであった。

ムロレイの「カンダム」の車調によつて開発されただけの機体ではなく、近い将来登場するであろう重装甲、大火力の次世代シオンMSに現行機材の改良によつて対抗することの可否を検証する目的を持っていたのだらう。

に進めることができ、そしてそれぞれに一定の成果を出した地球連邦軍の底力を見る思いもする。

だが、こうした様々な可能性を内包したRX-78第二次ロット機的设计やコンセプトは、一年戦争



からがスト一年戦争時の連邦軍量産MSには、十分に受け継がれたとは言い難い。これらのコンセプトが量産機まで下りてくるのは、この数年から数十年後のことである。先進的なコンセプトの普及には、相応の時間が必要である。それでは、現実の量産MSの直接の始祖は、どこからやってきたのだろうか？

神話と現実を繋ぐもう一つの「ガンダム」

RX・78は実用MSの試作機というよりも、その前段階としての技術実証機という点はこれまでも触れてきた。そしてRX・78が技術実証機でありながら、製造機のひとつが実戦投入されているのは、戦時下という異常な状況ゆえのことで、本来なら、実用生産機の直接の始祖となることなく、比較的地味な機体として終わるはずだった。さらに量産機の開発には、すでに足ついた実用的な仕様

の試作機が必要だからである。技術実証機と実用化に向けた試作機は異なるものである。現在のアメリカ空軍が装備する最速の制空戦闘機であるF・22「ラプター」の技術的なルーツは「F・15イーグル」を改修したC・V研究機や、X・31といった従来の空戦機動を超えた、ポスト・ストール・マニューバ等の実験機に行き着く。

さらに実用戦闘機としてF・22を完成させるには試作機であるVF・22による台座テストと、競争試作機であったF・23とのトライアルが必要であった。

RX・78は、量産機のRG・M・79の技術的ルーツではあるが、本質的には技術実証機で、そのままでの設計からRG・M・79が生み出されたとは思えない。確かにRG・M・79はRX・78と酷似した外観だが、高コストとされるコア・プロダクトシステムの廃止、明らかに過剰な特殊装備、車体での大気圏突入能力などの廃止など、相違点も少なくない。むしろRX・78とRG・M・79との間に、量産機の試作機的位置付けの機体が存在することを想定すべきである。

そうした機体の一つとして考えられるのが、もう一つの「ガンダム」といえるRX・79「G」陸戦型ガンダムだろう。陸戦用機として知られるRX・79「G」は、RX・78製造時の余剰パーツを利用して限定的に生産された機体である。とせばは紹介されるが、これは正しくもあり正しくないだろう。

RX・79「G」がRX・78の部材、ラインを利用して製造された機体であることは疑いようがない。しかしRX・79「G」は単純にRX・78の増加試作機ではない。外装の変化は重力下仕様のための



うが、機体各部の形状や仕様には、相応の設計変更を要するものがあり（一例を挙げれば、RX・78の開発で重要なテーマであった飛行ビーム兵器の運用能力は維持されているものの、慣性性とコストを重視してか実体弾兵装主体に変更されている、それが機体の型式番号に反映されているのだろう。技術実証機として製造されたRX・78から不要な部分を取り除き（さらに運用環境の限定も忘れ

はならない）、目下の戦場に投入できる量産MSの試作機、あるいは先行生産機がRX・79「G」という機体なのである。事実上の改設計機あるいは新設計機にも関わらず、機体名称にあえて「ガンダム」が与えられているのはプロバガンダの類かもしれない。

そうであるならば、「ジム」の型式番号がRG・M・79であることも別の意味を持つ。Rは地球連邦軍における人型兵器の接頭記号で

あり、Xは試作機を示す記号である。それに倣うとRX・79「G」は、RX・78と異なる設計の試作機であり、RG・M・79（「Mass product Gundam 79」）と読むこともできるのだ。こうするとRG・M・79系統の最初期の機体である、RG・M・79「G」陸戦型ジムが、RX・79「G」の設計を色濃く受け継ぐのも、ふまゆえに当然だろう。

あくまで推測の域を出ないが、地球連邦軍の主力機であるRG・M・79シリーズの本当の意味での母体は、RX・79「G」である可能性も十分あり、この機体こそが、新しい兵器コンセプトの実証機のRX・78と量産機RG・M・79の間を繋ぐ存在なのかもしれない。

RX・78は、伝説のMSとしてこれからも宇宙世紀の歴史に特別な一ページを割いて記述され続けることだろう。そしてRG・M・79は、地球連邦軍の勝利の栄光を担った機体として記録され続けるに違いない。そしてその狭間で、RX・79「G」は、ひっそりと忘れられてゆくのかも知れない。だがそれは、試作機の運命というものである。

伝説のMSから勝利のMSにパトンを渡すことができた時点で、その使命は果たしたといえる。地球連邦軍MS群の母といえるかもしれない、RX・79「G」、もって隠すべしと言うべきであろう。

RX-78ガンダムの存在意義

(現実篇)

ロボットアニメの革命児として登場した、『機動戦士ガンダム』。その中で主人公メカであるRX-78は極めて特殊な存在と言っていいたろう。そして特殊であるがゆえ、40年にわたって愛される息の長いキャラクターにもなりえたといえるのかもしれない。ここでは、そんな現象面から見たRX-78ガンダムについて考えてみよう。

1979

1989

1991

1996



『機動戦士ガンダム』という革新の中のRX-78

RX-78、2ガンダム。言わずと知れた『機動戦士ガンダム』の主役メカである。

もちろん1979年の最初のTVシリーズ放送時には「RX-78」や「RX-78、2」といった型式番号は存在しなかった。しかし作品が「ロボットアニメ」としては革新的だったとは、いまさら言うまでもないだろう。

『機動戦士ガンダム』は、これまで「ロボットブレス」と謳われていた「子供だまし」と思われていたロボットアニメに「戦記モノ」のエッセンスを導入、作中のアニメロボットに「兵器」という存在意義を与えることによって、ある種の「リアリティ」のようなものを確立し、ロボットアニメの視聴対象年齢層を引き上げることに成功した。80年代初頭のブームを経て、その後「リアルロボットアニメ」というジャンルを作り上げただけでなく、今では一般にも広がった「ガンダム」という言葉を聞いたことがない人は、あまりいないほどの認知度を獲得している。

そして、『機動戦士ガンダム』内に登場するロボット兵器モデルスーツ（MS）も、その名称だけでなく、その多くの部分でそれまでにない斬新さに溢れた存在と

して描かれた。

「大規模生産されている兵器（量産型）」であり、搭乗するものも「普通の人間の兵士であること」、また塗彩を想起させるカラーリングや、リアリティのある武装など、それまでの旧来作品の「侵略者の手先である謎ロボット」とはまったく違う「ある程度の現実感がある兵器」であった。それは、作品の制作サイドが従来のロボットアニメの対象年齢層よりも上の世代も取り込もうと、新たなコンセプトを投入した結果であり、大袈裟に言えばアニメロボットが「子供だまし」から脱却したマイルストーンでもあった。

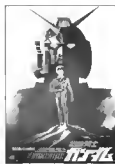
その特徴は昭和30〜40年代に人気であった「戦記モノ」のエッセンスと、当時はまだ最新のエンターテインメントのジャンルであった「SF」の融合にあった（これは74年に放送された『宇宙戦艦ヤマト』も同様だ。結果的にそれはある種の理想的なマリアージュとなり、従来のアニメロボットが荒唐無稽な存在であったのに対し、格段にリアリティのあるものに昇格することに成功した。それまでは素人院生から小学校低学年といった若年層が視聴するロボットアニメが一気に中高生、あるいは大学生という顧客層まで広がったのだ。実際には、当時はそうした若年層向けのロボットアニメの方が制



機動戦士ガンダムII 哀・戦士 宣伝ポスター



機動戦士ガンダムII 哀・戦士 宣伝ポスター



機動戦士ガンダムI 宣伝ポスター

作本数からみてもまだまだ主流で、「ガンダム」が切り開いた「リアルロボット」というジャンルは黎明期にあった。それでは中学生を中心にしながら、小学校高学年・大学生までの「若者」全般がターゲットという幅広いファン層の獲得に成功していた。

旧来のロボットアニメの要素も残すガンダム

もちろん、80年代初期を席巻したガンダムブームは、本作の数年前に起きた「宇宙戦艦ヤマト」ブームを踏まえてのものであるが、「ロボット」という商材になるキャラクターを荒唐無稽に見えないような作品内に存在させることができたのは一種の発明だろう。それが放送後に製品化されたプラモデルという「リアリティ」を感じさせる商品と融合することで、「ガンダムブーム」を作り上げたともいえる。そういった意味では、初期における「ガンダム」の斬新さのイメージリーダーは、ガンダム

ではなく、ザクであったと言っているだろう。しかし、それはあくまで最初に作品の魅力に飛びついた一部の大学生や高校生といった「感度の高い」作品の証でもある。一方、主役メカの「ガンダム」は、旧来のアニメロボットのフォーマットも内包していたといえる。ガンダムが作品内で唯一無二の存在で、かつその作品世界内において、抜き出た力を持っている点などである。要はそれまでの「強力でなければならぬ主人公ロボ」を、作品世界観に合うようにフィッ

「ガンダム」を製作した日本サンライズ（現・サンライズ）が手掛けたアニメロボットは「無敵超人ザンボット3」や「無敵鋼人ダイターン3」で「無敵者」をモチーフにデザインが起られていた。ガンダムもデザインモチーフの1つに「足軽」があるといわれるように、鎧武者のイメージは残っていた。そして別に「機動戦士」という言葉通り、肩などに「警察の機動隊」のイメージも投影された顔のデザインとカラーリングが施されている。それでは従来は、アクセントとして使われた白色が多用（当初は白一色の構想もあったと言われる）、必殺技や技の名前の連呼の廃止など、作品世界のコンセプトに則した調整がなされ

ていた。これらの要素や施装などは、従来の視聴者である若年層にも訴求するように配慮した結果でもあるといえる。実際、ガンダムブーム時に、製品の主要購買層の一角を占めていた小学校高学年・中学生までの子どもたちには「ガンダム」や「シヤア専用ザク」といった、「キャラクター性が強い」特別な機体が人気を博していた。まだまだ当時の子どもたちにはザクはシブすぎたのである。

アニメロボットの「スポ根」と大差ない存在!?

そもそもアニメロボットのほうに在るのか。それは時に人体の拡張と。つまり、その力を手に入れることで、人間以上の力を持つ存在となるのだ。そして、ロボットアニメは児童向けエンターテインメントであるがゆえに、人間に比べてとても強い力を持つロボットが目録は「地球を守る」「世界平和」という大仰なものになり、その敵も「世界征服を企む宇宙人や地底人」といった荒唐無稽なものになりやすい。

またロボットアニメが児童向けエンターテインメントである以上、実はスポ根モノやチャンバラ時代劇といった、他ジャンルの作品とそれほど変わらない要素。つまりそれはいずれも必要となる。そうで

なければ子どもたちの共感を得られないからだ。そういった意味でロボットの必殺技は、スポ根モノにおける「魔法」と本質的には変わらない。ロボットを操縦することは「巨人軍に人肉する」とあまり意味が通わない。そして描かれるストーリーは、大仰な設定とは対照的に舞台は子どもたちが想像できる範囲にとどまる。つまり「町内で敵の侵略ロボと戦う」に近いものなり、登場キャラクターも家族や近所の人、友人たちを中心に構成される例が多い。

そのため「父や祖父が作ったロボットに乗る」という血統的な裏付けは必要で（「すごいロボットになぜ乗れるのか」という説得力）、ロボットが格納されている研究所や基地（自宅や町内）を敵が攻めてくるという状況になりがちだ。つまり世界平和のために活躍するロボットも、活躍する世界は子どもたちの手の届く範囲で描かれるのである。そうでなければ子供に共感が得られなくなってしまうだろう。つまり「ロボットアニメ」は、「善悪がはっきりし」、「男」を見せる興行」という意味では、当時のプロレスと似たようなもので、むしろ積極的に「プロレス」的な構造を取り入れているともいえるだろう。

「ガンダム」が、対象視聴年齢層

なければならない要素。つまりそれはいずれも必要となる。そうで

なければならない要素。つまりそれはいずれも必要となる。そうで



機動戦士ガンダム0080 ポケットの中の戦争
第4号発売告知ポスター



機動戦士ガンダムⅡ めぐりあい宇宙 宣伝ポスター

ガンダムが試作機となった必然性とは？

こうして「機動戦士ガンダム」は、当時ロボットアニメ世代より上の層の青少年たちに人気だった「戦記モノ」の要素を取り入れることになる。そういった作品に登場するロボットが「兵器」というモチーフになるのは当然の流れなのだろう。しかしその反面、新しいコンセプトを立ち上げる場合、同時に従来のロボットアニメ見聞録である子どもたち若年層に配慮するべきなのは、テレビのプログラムであり、玩具の売上でも成り立つ作品である以上、当然だろう。むしろ「機動戦士ガンダム」は、従来のマーケティングを維持しながら、新

たなマーケティングの開拓を目指した作品であるともいえる。

つまり、当時出現し始めていた「アニメファン」を満足させつつ、それまでの購買層も満足させるロボットを登場させなければならぬのだ。これを両立させるアイデアがガンダムの「試作機」という設定だったといっているだろう。

これまで「ガンダム」を語る時に言われて続けていたことが、本来試作機とは、文字通り試しに製作した機体のことである。求められる仕様に沿って設計、製作され、試験を通じて様々な細かい改良を加え、最終的には完成形である生産機に至るまでの過程による存在である。ゆえに最終的な性能、信頼性などは生産機よりも劣る。

しかし、ガンダムはこの試作機



というエクスキューズで「特別なロボット」という存在を成立させ、特権化することで従来のアニメロボットの存在を担保するというアイデアを、発明した。

父の開発したロボットに乗り込む少年という構図、ロボットとキャラクターの距離を近づける。敵の攻撃を跳ね返す装甲、戦艦を一撃で撃沈可能なビーム、ライフルは、ある意味必殺技でもある。つまり、「ガンダム」の強さと主人公との関係性をひと目でわかりやすく描写しているのだ。

そして「ほほ本人」の主人公のアムロが、戦場で生き延びるのに、ガンダムの性能は実によく機能した。「特別な存在」「試作機」という従来のロボットアニメのフォーマットをある程度下敷きにしながら、同時に物語に説得力を出すものとして使用したのである。さらに物語が進んでいくと、主人公であるアムロの能力はガンダムを上回り、はじめ、「新たな人類」であるニュータイプの設定とともに、物語を「戦記モノ」以上のものに昇華していく。ガンダムは試作機という設定は、当初の設定立案の効果をもたらしただけであるだろう。

ガンダムのリアルを受け持ったザクが存在

これに対し、作品の描き手（「リアルティ」表現は、ジオン公国軍

の「ザク」に負け、作品的なバランスを保っていると言っている。最初「機動戦士ガンダム」に夢中になった高校生や大学生たちは、ガンダムではなくザクに新しさを感じた。第1話冒頭の、呼喚とともに登場する宇宙服からロボットかわからない姿や、やがてわかる絶対的兵器としての姿と、バックボーン（ミノフスカ粒子）というSF設定。何もかもが新しく、同時に第二次世界大戦の兵器群を彷彿とさせるその姿に、まず戦記まんがやミリタリー系のプラモデルに親しんだ世代の高校生や大学生といった「アニメファン」という野心的で、かつ斬新な作品の旗印こそがザクであったのだ。

最初のムーブメントはムック本である「宇宙翔ける戦士達 GUNDAM COUNTRY」（81年9月、みのり書房刊）だろう。河森正治氏や美樹本晴彦氏らが参加した伝説的同人誌「Gunsmith」の実質的な商業誌版で、作品本編にもブレインとして参加した「スタジオジブリ」が製作に加わっており、初期にガンダム世界を広げるのに大きな役割を果たした。同誌にはMSの解説ページが掲載されているが、ガンダムと地球連邦軍のMSよりジオン公国軍のMSの方が先に紹介され、ページ数も多い。それが当時の雰囲気



機動戦士ガンダム0083 ザ・ユニット
第1巻発売開始がスター



機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY
第2巻発売開始がスター



機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY
第1巻発売開始がスター

変容していく モビルスーツの立ち位置

「ガンダム」の総称である「機動戦士Zガンダム」85年、までの6年の歳月で、ガンダムもMSも

気物語っている。

その中でザクのバリエーションモデルの概要が記述されており、これに加えて講談社発行のムックに掲載された大河原邦男氏のイラストにインスパイアされ「MSV（モビルスーツバリエーション）」が誕生した。「MSV」は「存続の通り、高機動型ザクIIをはじめ、ザクの派生機が数多くラインナップされ、その後のザク史、MS史に与えた影響は大きい。キーパーソン」の1人、小田雅弘氏が「僕や同じストリーマーの川口（兄）君はザクしか作りたくなかった、ザクしか頭になかったんです」小社刊「MSV FIRM（ST）より」と述べているように、「ガンダムフリー」の最先端にいたファンたちは、「道具」的な配りがされているガンダムではなく、ザクこそが作品世界観を支えていたことをわかっていただろう。ザクとガンダム、同じ作品内に存在する好対照なこの両輪によって、「ガンダム」は豊かな作品世界観を手に入れたと言ってもいい。しかし、時代はそこにとどまることをよしとしなかった。

大きく変わっていった。放送終了後の1989年にプラモデル化されたガンダムには1/144などのスケール表記がされた。現実の大きさを想像させるこの縮尺は、ユーザーに「リアリティ」を感じさせた。また、すべてのMSに型式番号が付けられるようになるなど、よりリアリティのある文字設定が後付けながら雑誌媒体などのメディアを中心に発表され、後に公式化されていった。

そして「Zガンダム」は「ガンダム」の7年後の世界を舞台にすることで、世界をさらに広げていき、後に「歴史経典」的な様相を呈することになる。この「Zガンダム」では、MSの性能諸元が詳細に設定された。いわゆる「ジェネレーター出力」や「スラスター推力」など、現在ではMSの機体解説などには標準といえるスペックの類である。

一方「Zガンダム」の頃、兵器としてのアモロポットのブームは一段落しており、当時流行しつつあった「変形」にフィギュア、敵味方とも「可変機」やニュータイプ専用機といった「特別な存在」であるMSが主流となっていた。これは、オリジナルの「ガンダム」の持つ「特殊性」の拡張でもあり、敵味方とも主要登場人物は「特別な機体」に乗り、戦いを繰り広げるという形になっ

ていった。

これはある意味、人気という点で「ザクのなまの」の陳腐化を意味し、一方で従来型のロボットアニメに陥りながら、一方で「ガンダム」独自の方向へ向かうということでもあったといえるだろう。つまり、「アモロポット」ではなく、「MSとガンダム」というジャンルへと移行していく契機になったということだ。ガンダムと「ザクのなまの」ではなく、「ガンダムとシェア専用ザクのなまの」へのシフトといっているのかもしれない。

OVA作品における RX-78の存在意義

もう1つの「ガンダム」の流れとして、89年のOVA作品「機動戦士ガンダム0080 ポケットの中の戦争」から端を発したものがあるといえるだろう。本作はOVAというビデオパッケージ専用商品だったため、その購買層は「機動戦士ガンダム」のファン層、つまりTVシリーズよりマニアックな層向けに制作されているという側面を持っていた。

そこで描かれるMSも「オリジナルから10年後の視点でリファインする」というものだった。つまり、制作当時は、本作に登場するMSは「デザインは違うが基本的には「機動戦士ガンダム」に登場し

た機体と同じ」という想定で作られたものだった。現在こそ、これらの機体は「別の機体」ということになっているが、当時のRX-78NT-1ガンダムNT-1アレンクは、まさに「ガンダム」のRX-78（の発展型）そのものであったのだ。水陸両用機もザクIIもゲルググもジムも、シャープな最新の意匠を身に纏っていた。後の世に「ガンダム」がこれほどまでに広がることは想像にできない。当時において、その手法はまさに向けた。皆が待望したものであった。……はずだった。

しかし、ここで意外な事態が起きる。それはシリーズの中で「ガンダム」が登場する巻だが、ビデオグラムの売上が良かった、という事実だ。これは制作サイドには衝撃的だったという。リファインされた量産MSが活躍し続ける映像は、コアなファンに熱狂的に迎えられはるがと考えられていたからだ。これは「ザク至上主義」にもいえる当初のファンは少数派となっていたことの証明でもあった。それともうひとつ、「ザク」に熱中した世代は、オリジナルの「ガンダム」のファンのトップ世代であり、主要購買層は外れていたのだ。さらに「ガンブラム」当時を支えていた下の世代は必ずしも「ザク至上主義」とは



機動戦士ガンダム第0085号機 第10号発売告知ポスター



機動戦士ガンダム第0085号機 第1号発売告知ポスター

→1991年当時、「機動戦士ガンダムF91」の劇場公開キャンペーンの一環として、同時期に展開していた「0083」とコラボレーションする形で紙売り券が発売された。「0083」の第1話を収録したビデオソフトと「F91」劇場版の両面がセットになっているという、当時としては珍しい仕様だった。

変わり続ける存在 となったRX-78

一方、RX-78ガンダムは別の流れから新たなステージを歩み始める。それはハンダイのガンブラランドである「マスタートゲル」(MG)の登場が大きい。「大人向けのガンブラ」を標榜し、95年7月、「MG RX-78・2ガンダム」が最初で発売された。

これは「月刊ホビージャパン」誌上でその開発過程が記事として掲載され、読者(ファン)の意見

限らなかった。そして続くOVA作品「機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY」(91年)では、敵味方ともRX-78の型式番号を持つ「ガンダム同士」が戦うという事態に発展したが、これも、好意的に迎えられた。それは現在までのガンダムシリーズに受け継がれる構造であり、ターニングポイントといえる。続く96年の「機動戦士ガンダム 第08MS小隊」では、「RX-78ガンダム用の高規格の検査に合格しなかった全副部品」を使った特殊な量産型機体として「陸戦型ガンダム」が登場した。これは型式番号がRX-79「G」と付与されているように、別の機体として区別されるが、やはり映像作品で「ガンダム」の登場は必須であったことが窺える。

MSVとゲームで行われた ガンダムの多様化

また、もう一つのRX-78ガンダムの潮流としては「MSV」に連なるものがある。これは本家「MSV」に登場したフルアーマーガンダムに端を発するモノと言っている。映像作品に登場しないMSのパリエーションというコンセプトが企画の主旨である。「MSV」は、オリジナルのMSよりも表現範囲が広く、様々なパリエーションモデル(キャラ

もフィードバックされる形式で進んだもので、現在の解像度と技術力でRX-78・2ガンダムを再構築する」といったコンセプトがあった。その新しいスマートな造形と、プラモデルとしての完成度の高さは、「ガンダム」の放送から20周年に向かいつつある状況で(発売自体はガンブラ15周年時)、かつてのファンの多くを呼び戻し、現在に至る隆盛に繋がるターニングポイントの一つになったと言っている。



「MSV」からのこと。そこで各々別コンセプトの機体として描かれた。これは当時流行していた「SDガンダム」のキャラクターライオンナップ拡充のため、まずはリアルな頭身でデザインが起これたという経緯があった。

結果的にガンダム4号機以降は、RX-78系統のキャラクターライオンナップを広げ、さらに後年のゲームなどのメディアで展開され、RX-78・2ガンダム以外のガンダムが存在するという土壌のひとつを作り上げた。

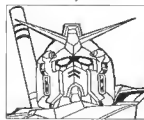
この「MSV」は、先に挙げた「GUNDAM CE N T U R Y」(8機のプロトタイプのうち2機を)という記述が、後に大きく花開いたことになる。8機というのと同じ機体がある、8機という意味か、別々のプロトタイプが8機存在するののか? という点は「GUNDAM CE N T U R Y」では記述されず、そうした余地が新たな解釈のファンタイアとなつた。G・3ガンダムと呼ばれる3号機は「MSV」でラインナップされた元は小説版に由来する。ガンダム4号機以降は「MSV」では、文字設定として軽く触れられた程度で、本格的な登場は90年に展開された「M

ディテール(細部)から探る RX-78の進化

仕様や世代によって様々に異なる「ガンダム」の姿。ガンダムはもちろん兵器であり機械だが、そうした機械の変化にはそれが必要とされた理由や隠れた意図があるはずだ。一年戦争で活躍したガンダム系モビルスーツを中心に、その形状の細部やスペックを見比べ、ガンダムがどのように進化していったのかを探ってみよう。

RX-78-4
ガンダム4号機

6,190mm



↑基本的にRX-78-2ガンダムとはほぼ同様のフェイス。バルカン砲口や側面部のダクトなどが異なる。

RX-78(GI)
精鋭型ガンダム

5,900mm



↑「髭」のセンサーが大きい。顔面にバルカン砲を持たないが、かわりに小型のペリスコープを内蔵する。

RX-78-3
ガンダム

5,700mm



↑顔のV字アンテナにソイナイド、顔面バルカン砲といった「ガンダムフェイス」の要素が揃った原型。

頭部& センサー有効半径

ガンダムタイプと呼ばれる所以であり、意匠の象徴ともなる頭部。しかし仔細に見ると形状や仕様は異なる。また、頭部にはセンサーやバルカン砲などが内蔵されるケースが多い。

RX-178
ガンダムMk-II

11,300mm



↑家父としてはRX-78-2にかなり近い。「髭」は小さめだが、センサーの能力はさすがに諸世の雄がある。

RX-78GP03A
ガンダム試作2号機

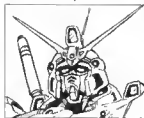
データ無し



↑「ガンダム」としてはかなり異色の頭部。大型の兜を被ったような形状である。頭部のダクトは冷却のためか。

RX-78GP01
ガンダム試作1号機

データ無し



↑全体的にRX-78-2の意匠を踏襲するものの印象は大きく異なる。「髭」部分にサブアンテナを装備する。

RX-78NT-1
ガンダムNT-1アレックス

5,900mm



↑顔面がやや低く全体動に小さめ。顔面や側面部のスリットひとつひとつが大きく、構造は異なる。

意外にもスペックはそれほど進化していない？

各ガンダムの細部を見てみると、最初の項目である頭部形状は「ガンダム」の象徴的部分だけあって大きな変化はない。素敵に必要なセンサー能力も一年戦争中では、それほど伸びていない。元々ミノフスキー粒子散布下の有視界戦というがモビルスーツ(MS)の開発コンセプトの一つなので、センサー類の能力はさほど必要ないという判断された可能性はある(視界が良好ならば肉眼でもかなりの距離を見られる)。ガンダム開発計画で製造された機体のセンサー能力は不明だが、戦後のグリプス戦役時に開発されたRX-178ガンダムMk-IIは、センサー能力も大きく向上している。これは直接的な技術のブレイクスルーがあったか、戦闘や戦術が変わり高いセンサー能力が要求されるようになったか、あるいはその両方だ。次に機体の重さを示す全備重量。数値的にはRX-78-2ガンダムの構成がシンプルなことと表れたらう。同時に開発されたRX-78-4ガンダム4号機は重武装機に分類されるが、RX-78-4の場合、本体重量が約40トンで、フル装備では倍となる計算だ。一般的に短期間で技術的ブレイクスル

RX-78-4
ガンダム4号機

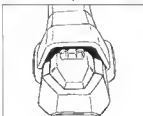
86.5t



↑ふくらはぎや足道などにスラスタを備え高い機動性を確保。陸基用や鉄骨が多く、全備重量はかなり重い。

RX-78(G)
機動型ガンダム

73.0t



↑つま先部にも可動軸があり、陸戦機らしく歩行しやすい構造。砂漠などでは関節部に防塵カバーを装着する。

RX-78-2
ガンダム

60.0t



↑シンプルな構成で関節各所にはスラスタ型などは見られない。あくまでAMBACのための装置という印象。

脚部&全備重量

脚部は基本的に姿勢制御に用いられるが、大型ゆえに地上では自重を支え歩行にも使う。適切にスラスタを配置すれば運動性（これには機体重量も関わってくる）を高めるにも有効。

RX-178
ガンダムMK-II

54.1t



↑見た目以上に構造に軍需化の形迹が。ムーバブル・フレーム化の影響が、関節と軽量化が図られている。

RX-786P02A
ガンダム試作2号機

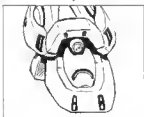
83.0t



↑「ガンダム」系では異例なシルエットの脚部。しかし本体重量はGP01の約2割増で見た目はほど重くない。

RX-786P01
ガンダム試作1号機

65.0t



↑足裏にもスラスタを内蔵。宇宙用のフルバーニアアンに換装時は、さらにソールを1枚重ねたような形状に。

RX-78NT-1
ガンダムNT-1アレックス

72.5t



↑両部に大型のスラスタが設けられ推力はかなり高い。チョバム・アーモ―は重量級機体（基準95.0t）。

RX-78-4
ガンダム4号機

1,550kw



↑機がRX-78-2とほぼ変わらないのに、部材が大きく異なる脚部と胴体。ジェネレーターは方向向上のため。

RX-78(G)
機動型ガンダム

1,350kw



↑コクピットは胸部中央に位置し、乗員ハッチは上方に開閉。また、胸部に武装を備えているのも特徴的。

RX-78-2
ガンダム

1,380kw



↑コア・ブロック・システムの採用もありコクピットは胸部の中央に位置する。胸部にはダクトを配している。

胴体&ジェネレーター出力

ジェネレーターやコクピットなど重要な機能が集約されている胴体。それらをもどのようにレイアウトするか、どう装甲を施して本体機能を守るか、といったところがポイントだろう。

RX-178
ガンダムMK-II

1,930kw



↑胸部コクピットハッチは上下に展開。試験機のためなのか後果口は狭く利用性はあまり高くない。

RX-786P02A
ガンダム試作2号機

1,860kw



↑球状のハッチ表面を3本のサルトで固定するという、戦術機運用機らしい機体構造。生存性が高そう。

RX-786P01
ガンダム試作1号機

1,790kw



↑コア・ブロック・システム採用機だけに、コクピット位置はRX-78-2と同様。胴体中央部。ハッチは斜め上げ式。

RX-78NT-1
ガンダムNT-1アレックス

1,420kw



↑RX-78-2に近いが、スラスタやインターンクなどを各所に増設。ニュータイプ用に必要な向上を図った？

RX-78-4
ガンダム4号機

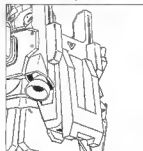
70,500kg



↑ランドセルにプロペラントタンクを備え、形状は異端。ビーム・サーベルのマウント方式はRX-78-2と異なっている。

RX-79(0)
陸戦型ガンダム

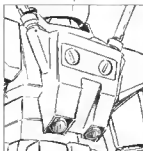
52,000kg



↑サイドにスラスターを備えるが、コンテナのマウントとしての役割が大きい。陸戦型ならではの機体構成だ。

RX-78-2
ガンダム

55,500kg



↑推力はやはり控えめな数値。ランドセルは機体上、推力の大部分を生み出している部分と想われる。

ランドセル&スラスター推力

機動兵器たるMSにとって、運動性能に直結するスラスターは非常に重要な。また、推力の数値以外にも、どうスラスターを配置するか、というのも機体の性質を決める大事な要素。

RX-178
ガンダムMk-II

81,200kg



↑構成としてはRX-78-2を拡張し、各部にスラスターを増設。ヒーム・サーベルはフレキシブルスラスターに装着

RX-78GP02A
ガンダム試作2号機

155,200kg



↑アトミック・バズーカの基部を備えている。推進力は高負荷のフレキシブルスラスター・バインダーが持つ。

RX-78GP01
ガンダム試作1号機

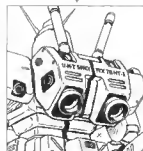
108,000kg



↑コア・ファイターの機体後部が変形してランドセルを形成するタイプ。宇宙用のフルバーニアンも同様の方式。

RX-78NT-1
ガンダムNT-1アレックス

174,000kg



↑構造そのものはシンプルな構成でRX-78-2と同様。しかし推力の数値はこの時代の機体としては圧倒的。

判断できない機体の違い

が起きない状況で高性能化を図ろうとすると機体は大型、重量増となる傾向がある。そういった意味で、RX-78-2に近い世代のガンダムの重量が重いのは当然といえる。その点、技術的に世代の異なるRX-178は、ムーバブル・フレームの採用や材質変化により本体重量も軽く(33.4トンを、技術の進化が見てとれる。

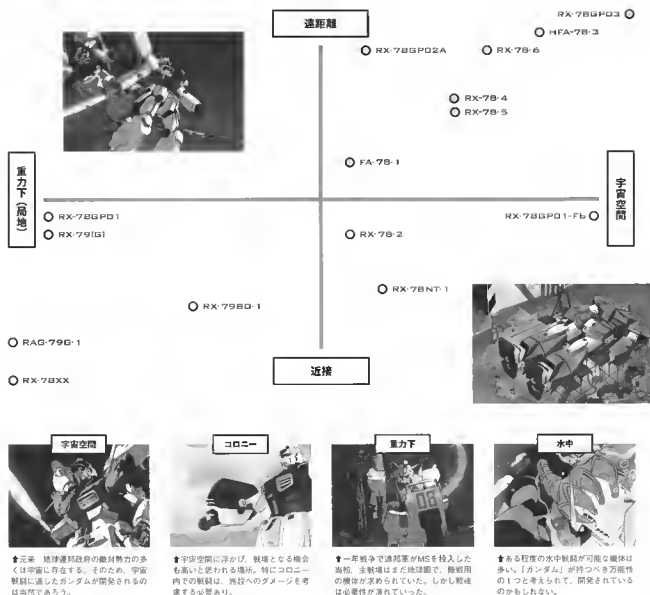
06ザクII系統は、出力不足からMS用ビーム兵器の装備ができなかつたとされる。となれば搭載シエネレーター出力を高くすれば、それだけ強力なビーム兵器が使えることになる。単純にシエネレーターそのものの強化が求められるはず。だが、実際にはシエネレーターは強化よりも、エネルギーAP技術の進化の力が重要だ。これにより、同じ出力でも強力な(あるいは効率的な)ビーム兵器の運用が可能になったと考えられる。RX-178の場合、搭載シエネレーターも強化されているが、それ以上に採用されているエネルギーバック式ビーム・ライフルの存

在が重要だ。これは交換用のエネルギーバックを用意さえすれば、RX-78-2のような弾切れの心配がなく、より効率的な運用が可能になる。ビーム兵器なのだ。こうした点からもエネルギーAP技術の進歩が見て取れるのである。そしてMSの機動力を司るスラスター推力は、各ガンダムでもっとも開きがある能力値だ。RX-78NT-1・ガンダムNT-1は、オリジナルのRX-78-2の実に3倍以上の数値。普通に考えれば、同時代の機体とは思えないほどだ。しかもRX-78NT-1は、性能面の数値から推進剤を多量に搭載しているとも考え難い。そのため稼働時間は極端に短い可能性もある。本来はニュータイプアムロ・レイ専用機として開発されたため非常に尖った性能であり、一般的なパイロットではとても扱えないような特性も問題視されなかつたのだろう。戦後に開発されたRX-78GP01ガンダム試作1号機やRX-178などは、スペック的にはいくらかマイルドになつてい

る。このようにしてみると、形や意匠の変化ほどには、ガンダムのスペック面は変化していないことがわかる。元々がガンダムは、特別な試作機ゆえに最初から高水準、高性能で、実戦を経て変異したのは運用した「形の部分」であつた、ということができるだろう。

タイプと特性で見るガンダム

下にある図表は、縦軸を想定される交戦距離、横軸を戦闘を行う場所として、このページで紹介している各ガンダムがどのようなコンセプトで開発されたのかをマトリクス表示したものの。各ガンダムにどのような能力が必要とされたのか、わかりやすく見えてくる。



「近距離担当」だったガンダムが逃った道

上の図では、上部に型式番号があるほど砲撃戦に特化した、下部ならば白兵戦や格闘戦に特化した機体となる。また右に位置するほど宇宙空間での適応能力が高く、左に位置すれば局地戦を重視した機体となる。各ガンダムタイプの主流は右上のエリアに集中し、その極北はRX-78GP03ガンダム試作3号機である。

そうしたガンダムの派生機が登場しはじめたのは、基本的に連邦軍がジオン公国軍に対し優位に立つて以降で、戦場が宇宙に移り宇宙空間を重視した機体が多いものもある意味当然だ。また、RX-78-2がそうであったように、場所を選ばず戦える汎用性の高い機体は後世でも少なくないようだ。逆に少数派は近接戦闘向けの機体で、特に重力下での近接戦闘に特化した（まるでグフのようだが）ガンダムは非常にレアだ。

RX-75ガンタンク、RX-77ガンキャノン、RX-78ガンダムというV作戦の交戦距離の異なる開発機体の中でガンダムは近接口兵戦用の機体であったが、実戦を経験するにつれ、後世に開発されるガンダム系の機体群の想定される交戦距離が伸びる傾向となったというの、興味深い点である。

武装の進化と系譜

ガンダムの特徴といえるビーム・ライフルをはじめとして、重火器から格闘戦用まで多くの装備を持つガンダムタイプのMSたち。RX-78-2ガンダム後のガンダムタイプは、そこからのように武器を選択し、進化させていったのか。カテゴリごとに見比べてみよう。

大口徑実体弾系

ハイパー・バズーカ
(RX-78-2)



180mmキノン砲
(RX-79[G])



ロケット・ランチャー
(RX-79[G])



アトミック・バズーカ
(RX-78GP02A)



フォールディング・バズーカ
(RX-78GP03)



ハイパー・バズーカ (RX-178)



ライフル・実体弾系

100mmマシンガン
(RX-79[G])



90mmマシンガン
(RX-78GP01)



ビーム系

ビーム・ライフル
(RX-78-2)



試作型ビーム・ライフル
(RX-79[G])



ハイパー・ビーム・ライフル
(RX-78-4)



メガ・ビーム・ランチャー
(RX-78-4)



ビーム・ライフル
(RX-78GP01)



ビーム・ライフル
(RX-178)



まずはビーム系の武装から見てみよう。RX-78-2ガンダムのビーム・ライフルは、MS史上でも非常にエポックな存在で、後のガンダムタイプにも多くの影響を与えた主武装だ。後発では、高威力化や大型化する傾向にある。RX-78-4ガンダム4号機のハイパー・ビーム・ライフルやメガ・ビーム・ランチャーなどはその端的な例だ。一方、ライフル実体弾系には、マシンガンなどもある。実体弾は補給の手間はあがるが、信頼性が高く用途によっては有効だ。なお、U.C.0087ではエネルギーバック式のビーム・ライフルは標準化されており、それまでは弾切れの心配もあったが、そうした問題は解消されている。

大口徑の実体弾系の重火砲については、RX-79[G]陸戦型ガンダムが豊富な装備を持つ。これはRX-79[G]が陸戦用の局地戦機という理由も大きいだろう。使用環境が多様で曲射が有効な場面も考えられ、従来兵器の延長線上にある火砲が重宝されたのだから。一方、宇宙空間での戦場で、実体弾よりもビーム兵器に置きが置かれ、実体弾兵器は必要最低限にとどまり、主流からは外れるようだ。なお、RX-78GP02Aガ

新コンセプトの武装はなかなか定着しない!?

近接格闘兵器



ビーム・サーベル
(RX-78-2)



ガンダム・ハンマー
(RX-78-2)

ビーム・サーベル
(RX-79[G])



ビーム・サーベル
(RX-78NT-1)



ビーム・サーベル
(RX-78GP01)



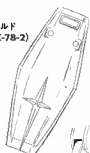
ビーム・サーベル
(RX-78GP02A)



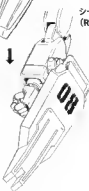
ビーム・サーベル
(RX-178)

シールド

シールド
(RX-78-2)



シールド
(RX-79[G])

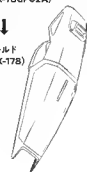


シールド
(RX-78GP01)



ラジエーター・シールド
(RX-78GP02A)

シールド
(RX-178)



内蔵火器

頭部バルカン
(RX-78-2)



胸部マルチ・ランチャー
(RX-79[G])



90mmガトリング・ガン
(RX-78NT-1)



頭部バルカン
(RX-78GP01)



頭部バルカン
(RX-78GP02A)



ガンダム試作2号機のアトミック・バズーカは、バズーカの名が付くインパクトの強い兵器だが、このような戦術級の武器を装備するMSはガンダムタイプでもほぼ例がなく、非常に特殊なケースである。バルカン砲はガンダムタイプ（および連邦系MS）の基本的な内蔵火器で、頭部に装備され連射と継承されている。だが、それ以外の部位での内蔵火器の搭載例は少ない。RX-78NT-1ガンダムNT-1の90ミリガトリング・ガンは、腕部内蔵式の珍しいタイプだ。普及しなかつた要因は、定かではない。一見では機体の重量バランスが悪くなるようにも見える。しかし、後世でMSZ-006Zガンダムのグレネード・ランチャーの例もあり、腕部の武装は様々な理由があるのかもしれない。一方、シールドの形状や機能はパラエティに富んでいる。取り回しのよさを考慮した小型タイプもあれば、核兵器の熱線から自機を守る冷却機構を備えたものもある。とはいえ、防衛装備の1つというのは変わらない。

最後の格闘戦用装備は、RX-78-2こそ豊富だが、それ以降のガンダムタイプの多くはビーム・サーベルを装備する程度。こうした点から、自衛戦用のビーム・サーベルはガンダムの最後の手段といえるのかもしれない。

初代「機動戦士ガンダム」は1979年に放送されたTVアニメだが、現在でも様々な「ガンダム」シリーズ作品が作られている。のみならず、いわゆる「ファーストガンダム」をモチーフとした映像や立体物も今日に至るまで常に何かしら新しいものがリリースされている。それでは、現在映像を作っている立場から見てRX-78ガンダムとはどのような存在なのだろうか。「翔べ!ガンダム2017」「G40」の制作に関わった3人のスタッフにお話を伺った。

G40 | 「翔べ!ガンダム2017」

2つの映像作品から探る RX-78ガンダムという存在

インタビュー

監督 松尾衛
CGディレクター 篠田周二 (武右エ門)
撮影監督 脇顯太朗 (旭プロダクション)

松尾衛

監督 機動戦士Zガンダム
でスタジオ演出を担当し、様々なジャンルのアニメで監督や絵コンテを担当。「機動戦士ガンダム サンダーボルト」や「機動戦士ガンダム サンダーボルト」などで監督を務めた。

篠田周二

スタジオ、武右エ門所属。サンライズ時代には「機動戦士ガンダム グレイヴ」などをCGIとして参加。[G40]には不参加であるが、「翔べガンダム2017」ではCG監督を担当した。

脇顯太朗

「機動戦士ガンダム グレイヴ」や「ガンダム Gのレコンギスタ」で撮影監督を務め、「機動戦士ガンダム サンダーボルト」や「機動戦士ガンダム AWT」をはじめとする近年のガンダム映画では撮影監督を担当。

ユニコーンガンダムの 出番が少ない理由とは？

「まず『翔べ！ ガンダム2017』の映像はどういった企画でスタートしたのでしょうか？」

松尾 2017年時にお台場のユニコーンガンダム立像で上映されていたのが、最初は少し違う使われ方の予定でした。当時、サ

ンライズの第1スタジオはすべて『機動戦士ガンダム サンダーボルト』を作っていました。その頃には作画スタッフにも高解像度の液が来ていました。いつもでも現在のような制作体制でやることはできないだろうから、早い段階でCGで「ガンダム」を作れるようにする必要があります、ということ

をサンライズの小形尚弘プロデューサーと話していました。そこで「いきなりTVアニメやOVAでCGで作るというのは企画として難しいですが、実験的なものならなんとかなるかもしれない」という話になったんですね。たま

さかその頃にお台場のガンダムの立像で映像を流すので、その映像としてなら制作できるだろうということではなかったんですね。

でも、最初はガンダムからユニコーンガンダムに変わる工事期間中に流すという話だったんですね。だから「さようならありがとうガンダム！ こんにちはユニコーン

ガンダム」的にRX-78がメインでユニコーンガンダムの出番は少ない作りになっていました。ところが急速に「ユニコーンガンダム」の出番を増やしてくれ」と言われて、話を聞いたらユニコーンガンダムが立つ日に映像を流すという話になっていました。でも、あれでも当初よりは頑張ったって増やしています。

「誰もが知る『ガンダム』RX-78をメインにすることで、比較すると認知度の高いユニコーンガンダムの立像に對するいいフックになっていると思いますか？」

松尾 そうだとは思いますが、個人としてはああやってしまったなあという思いもあります。2019年にガンダム40周年記念の一環で作られた『G40』もこの「ガンダムをCGで作る実験」の1つという側面があります。これは昔の作画で作られたガンダムの良さをどうやらCGに落としたいめ、ということに挑戦したものです。こういう実験をすれば、CGで作る際にモビルスーツのデザインをする時にも役立つでしょう。

そういう意味においては、初代78の一番ブレインなデザインというのはいくつかあるんですね。カトキハジメさんでもCGで作る上で、このパーツがネックになるのか話をしたんですが、まあ1回作っ

てみるのが一番だろうと。そこでCGのスタッフに注力してもらったのは、作画のシルエットを再現させる部分やネックになる部分が多

く見えてきて、そういうことを後々のCGアニメに活かしていくための途中経過のひとつ、という感じになっています。

「翔べ！ ガンダム2017」がCGで作られていると知った驚く人も多いと思います。手描き

のいいところはもちろん、ミスだったりといった部分も再現しようとしているようにも見えます。松尾 実はほとんど旧作のカット

割り、レイアウトと同じなんですけど、でも見比べると少しちがうんとしてるんですね。『ガンダム』の映像の「ミスのなめらかな」をジャッジしていくことも重要でした。最初、ファーストを再現するというコンセプトを話してスタッフが上げたものは、ミスまで再現したものでした。笑。

「このように話していく作業は面白い。3DCGの人ならなおさらそういうことを経験すると、気持ちいい画を作ったためにはこまめに調整していった、という風に今まで以上に磨かざるを得ないになります。」

「見栄えと整合性のバランスと意味での『おもしろさ』を学ぶというところでしょか？」

松尾 3DCGはやはりカチカチなので、多少はそういう遊びの部分があってもいいんじゃないかと思っています。そういう部分の方が見ている人にとっても記憶に残ったりします。ガンダムはリアルだとか戦争の云々という話がよくありますが、もともとはヒーロー物なんですけど、そういう少しいただけでも残しておきたいんです。正確さだけでなく、もつと固い画になっていってしまふ。作品のテイストによってもそれがいい作品もあると思いますし、作品によって分けばいいことですよ。

「翔べ！ ガンダム2017」はCG側としては作画が崩れているのか、味などの判断はかならずしもなかったんですね。とある元ではこうなっているからそれを再現しようとした、松尾監督にこれは中割で崩れてるんだけど」といわれたりしました（笑）。

松尾 ユニコーンガンダムのCGはビデオのモデルのままなんです

よ。そこにお台場の立像のマーキングを付けたものです。なので、ちよつと硬いんですね。それでいていふうです。ライフルを構えただけでも大変です。

作画でやるならいいんですが、CGでやるとなるとネックになる問題の構造があったり、邪魔になるものがあつたりしましたね。案外フレインなRX-78の方がウツ

「当時の『ガンダム』の面をCGで作るとすると、モデルはシーンに合わせてたくさん用意しないといけないのか、とか色々考えてしまいますね。」

篠田 カットごとにモデルを調整して作っています。手足の長さも普通の3DCGの感覚でいえばメチャクチャです（笑）。肩と胸のパーツをはずしちゃいけないとか、スカートで分断させちゃいけないといったオーダーが松尾監督から出ているんですが、それではCGだと難しいです、というふうなものばかりでした（笑）。

松尾 身体を曲げた時に脚が体に食い込んで、曲がった脚が構え込んでいて作ってしまいました。「G40」もそうなんです。ガンダムの腰のスカートは安彦良和さんの画の特徴が出ていて部分なんです。ガンダムには安彦良和さんの画と大河原邦男さんの画の

2つがあると思うんですが、私は映像を作っている人間なので安彦さんの画に影響を受けています。安彦さんはあの腰のポーズを徹底的にスカートを描かないで、人間人の体としてとらえた時に、ガンダムは胴体がすごく短いです。それが腰の関節の位置が上にあるせいで、脚を上げると胴体の短さがより顕著になる。でも安彦さんの画はそうじゃない。前かがみになった時も背中側を伸ばして描くんです。でもそれがガンダムの画としてのルックスの特徴なんです。だからガンダムのポーズを再現しようとした時に、分別して動くスカートをした瞬間に再現できなくなってしまう。だから短くしてもいいけど動かすな」と

「格好いいと思っていいガンダムの、どこがどう格好いいのか考える作業ですね。」

松尾 そうですね。どう解析して再現するか、ということだと思っていて、その時にガンダムを再現しているとき永遠に到達できない最近のガンダムは劇中のポーズが、再現できると言われていますが、私からみるとぜんぜん違う。シルエントも頭が小さかったり、胴体が短すぎたりで安彦さんのシルエントとは言いえないですよ。

セルアニメを再現するとき「コミ」や「ミス」は味か否か

——モデルだけではなく映像の雰囲気も「翹べ」ガンダム2017は80年代のセルアニメっぽい仕上がりですね。

松尾 それは撮影の仕事ですね。CGだともっときれいな線なんですけど、そのままやってしまうとあの空開けが出なくなる。あとは微妙にパン（※カメラワークの一種）視線の移動などもある。あと、タガタしているのも撮影でつけた効果です。最初の地球の影から太陽の光が漏れてくるシーンもかなり加工を入れています。

——でも最初はやりすぎてやり直しになりましたね。私は元々セルアニメがすごく好きで、それで最初はアニメーターになりました。最初は、画がかけないのでデジタルの分野でソフト屋としての知識を覚えて、アニメの仕事に携わっていました。ですの70、80年代のセルの空開けを出そうと思って、塗りムラやセルのフィルムについているゴミまで再現したんです。ところが松尾さんに「いやそれはミスでそうなるだけだから」って言われてしまいました（笑）

松尾 あの頃の「きれいな」セルアニメを作るといのがコシセルトですから。とはいえフィルムがグレイ（※フィルムに現る緑の感）も消しすぎるのは、よくないかなとは思っています。今のブルーレイリマスター映像にはグレイが

全然ないですが、当時映像を作っていた私たちがからすると「元々綺麗じゃない」と言っていた部分もありました。撮影してフィルムを通すとこういう色になる。こういう見た目になるはず、と考えて作っていましたからね。

だから言ってみれば今のリマスターは掘出し（※仕上げがついたカットと背景をそろえて撮影を行うこと）で私たちが見ていた背景とセリバンです。それではなくて、撮影してフィルムになったものが皆さん好きだったんですから。

——今より昔の方がアニメーターの線が直に出ていた印象はありますが、デジタルになってもそうだったものがほとんどなくなってしまいました。CGでも技はカバーできるならそれを採ってみたいというのではありませんか。

松尾 「翹べ」ガンダムは「ガンダム」の作画のいいところや印象の強いカットを結構選んでいて、その中で作画の悪かったカットも思いつくカットなので選んで、はしかしたという声がある。その中には「あのシーン」がCGでもう少し格好良くなったところが見たかな」という言い方をしていたかな。なので「G40」では少しそういうのも意識してしました。

——篠田さんは少佐のファースト世代から少し外れますよね？

篠田 作画をCGで再現するというのは昔からの課題ではあったの。で、「翹べ」ガンダム2017の話を聞いた時にいいお題が来たのと思いました。ただ、正直「ガンダム」は「昔のガンダム」というくらい印象で「ガンダム」に対しての熱さの時はそんなにありません。歴代のガンダム作品ははるばるよく見たことはありますけれど。

松尾 ガンダムを知らないの、私は逆に彼があのプロジェクトに向いていると思ったんです。ガンダムは知らないけど、キャラクターとしての見せ方のこだわりを強く持っている。だからどこを見るべきか、ガンダムが好きならより的確なんです。ガンダムが好きなら、人だと種の造形を気にしたりデータに気になったりというところが、彼はそのような疑問もなくアレンにモノが作れるんです。

篠田 でも、もう今は知っています（笑）。若い世代の脇さんにとって「ガンダム」は「古典」ですか？

松尾 自分の中ではそんなことはないかな。自分が現役でアニメを見ていた時はすでに90年代後半で、セルアニメといったらもうハンドレスできれいな線が引かれているような時代でしたが、それよりもフィルムっぽさのある古い映像

作品が好きでした。当時はレンタルビデオの時代で、昔の作品を借りて見ていました。「平成戦国エルガイム」とか「重戦機エルガイム」といった作品を見て、自分の知らない時にはこういう作品が作られていたんだな。なので今回、昔のセルアニメを再現するという企画はうれしかったですね。撮影監督として現代の映像に今風のきれいな撮影処理を入れてキャッチーな画を作ることでもできるのですが、それだけだと商品価値としての高さを求めた、言ってみればイラスト的な映像だとは感じます。なので「アニメってのはそうじゃないだろう」という映像を出せるタイミングに出会えて本当によかったです。

松尾 それはガンダム独自の事情もありますね。今、こういったイラストですりじナルの映像を作るというのはハードルが高い。PVで教員の映像を作るだけでも難しい。でも「ガンダム」ならそういう場所がいくつあっても試すことができます。というのはそれはファースト

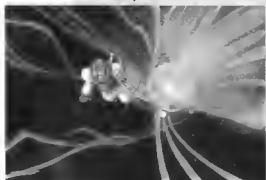
松尾 それはまさに世代です。トカガンダムはまさに世代です。松尾 そうですね。個人的には劇中のイメージが一番なので、ガンダムといえど安彦良和さんのガンダムの画です。現在のカクカしたガンダムのプラモデルが登場したときには、「えっ？」と思い

『翔べガンダム2017』撮影before&after

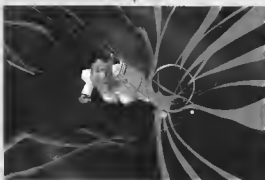
お台場の東京ダイバーシティの1/1ユニコーンガンダム立像広場で定時に放映される『翔べガンダム2017』。下の画はそのシーンで、右列が撮影が入

る前、左列が入った後の画となる。80年代風の色味や発光のさせ方、グレインの入った雲図気までもが撮影で処理されていることがわかる。

After



Before



監督・コンテ・演出 原画	松浦 健 工藤 友雄 伊藤 一樹
動画検査 色彩設計 色指定検査 動画 仕上げ	針生 将志 すきたまか 吉村 智恵 R I C R I C wish
美術監督 美術	中村 喜彦 スタジオ心 中村 喜彦
3DCG監督 3DCG モデラー アニメーター	中島 島山 英 棚田 幸也 橋本 日香 聖 松田 はるか 鎌田 周二 武石 ユウ門 山田 和洋 笠原 孝生 七五三 聖紀 吉田 大り子 若井 美保 紀 須藤 良太 若山 伸哉 佐々木 精太郎 平澤 美希
CG制作	CG制作
撮影監督 撮影	藤原 大樹 池田 プロダクション 藤原 大樹 田中 直子 林 賢太
音楽効果 ミキサー 録音制作担当 音響制作	西村 陸弘 山本 和利 大野 裕也 内下 智二 東北新社
オンライン編集スタジオ オンライン編集	キュー・テック 片田 悠介 棚田 幸也
制作デスク 制作事務 制作進行	中尾 慎一郎 竹之内 三恵 若下 成美 井上 大蔵
プロデューサー	小形 尚弘
制作	サンライズ

「『08MS小隊』だったらいのかもしれない、私の携わったサンダーボルト」もそうかもしれない。ただ「サンダーボルト」は作画でやると決断しましたが、あれをCGでやっていたら、もつと映像としては簡素に見えていた可能性はあります。

——漫画の太田垣康男さんは「サンダーボルトのMSは『MSVだ』のようなことをおっしゃっていま

ましたよ、「オレの知っているガンダムじゃない」って。で、もしばらく前にプラモデルでマスターグレードのRX-78ガンダムVer 2.0が出て、それは「昔風だな」と思ったのに、バンダイさんに聞いたら人気がないそうなんです。やはり皆カクカクの方が好きなんだな。でもそれは、自分の好きだったものがリアルだと思ふことがうれしいというのはあるのかもしれない。カクカクしたガンダムは安彦さんの画より機械っぽいリアルさがあります。『ガンダム』が受けた理由のひとつに子供向けじゃない、リアルだと補強してくれる部分があります。ですがリアル方向に向けば向くほど、ガンダムをCGで作ったときにカクカクしているガンダムでいいのか、と私個人としては考えてしまっています。リアルでカクカクしたガンダムの方がいい作品ももちろんあるでしょう。

「『08MS小隊』だったらいのかもしれない、私の携わったサンダーボルト」もそうかもしれない。ただ「サンダーボルト」は作画でやると決断しましたが、あれをCGでやっていたら、もつと映像としては簡素に見えていた可能性はあります。

——漫画の太田垣康男さんは「サンダーボルトのMSは『MSVだ』のようなことをおっしゃっていま

ファーストだけどファーストではない? 『G40』スペシャルムービー

ガンダム40周年記念プロジェクトの一環として制作されたスペシャルムービーは、『機動戦士ガンダム』をモチーフとした映像だ。しかし単純に奥山演氏デザインのMSに機体を置き換えただけではなく、世界観的にも新しい印象を与える。「舞台は宇宙世紀とはいっていないし、アムロの服装も変えました。アムロが着ていた服は当時の流行りだから、今見るとちょっとおかしいですよ。TVシリーズでは割と庶民っぽい人ばかりでしたが、サイド7はガンダムを運び込むようなところだし、本当はもっとインテリっぽい、金持ちの人がたくさんいるんじゃないかと。アムロもエリートの子のお坊ちゃんです。変えようと思った部分と昔のガンダムを意識しているところがミックスしてあの映像ができています（松尾）」



したから、「MSV」なら手書きでやった方が雰囲気が出ていたイメージはあります。

松尾 「サンダーボルト」のMSは太田垣さんの画でもありますから、作画で「サンダーボルト」をやるというのは折衷案でもあった気がする。『機動戦士ガンダム THE ORIGIN』ではCGでMSが描かれていますが、当時サンライズ第1スタジオではCGでガンダムを動かすというノウハウがまだなかった、また違うアプローチで「サンダーボルト」を

やりたかったという理由もありましたが、「THE ORIGIN」を見ていたとMSに関してはガンブラ的なアプローチだと思いうんですが、私は多分その方向ではなくて、ファーストの映像人間なんだと改めて思いました。それは劇場版『機動戦士Zガンダム』で富野さんと仕事をした影響があるかもしれないです。富野さんのダメ出しや、こういう見せ方をするんだという話の中で教科書として存在しています。そしてそれはリアル系のガンダムとはここに

とく真逆と言っていくくらいに違います。だから『翔べガンダム2017』のような映像を作ろうとするんですよ。

——『翔べガンダム』を見た人の多くは、そんな手間をかけて作られたアニメとは思っていないのではないのでしょうか？

松尾 作画の人は中割がまったく崩れてないし驚いてましたね（笑）。いい悪いは別として伝統は2種類あって「そんなこともできるんだ」と軽く考えている人と、「これはCGに取って代わられるかもしれない」と危機感を持っている人がいます。だから危機感を持っている人が多かった。やはり危機感のあるの方が上手い印象です。

篠田 アニメCG屋は基本的に作画に対してすごくリスペクトがあるって、作画に近づけて、見比べても逆のなんのもしようというものが大きな目標としてあります。作画アニメにCGを使っていると違和感があったり構えていると取られて見えている人に怒られるという時代がありまして、私はそれがすごく嫌で嫌で仕方がなかった。ならば作画と違いが出ないCGを

作れるように腕を磨こうとしてきましたが、ここまではなんとかできたという感覚はあります。

松尾 CGでは作画的な良さがあまり発揮されないというのは、結局はCGでは安彦さんが描いたガンダムのような、曲げたり伸ばしたりができず、直線は直線として描くしか、曲がるようにできているところと曲がるしかなかった。というところがあるかと思う。篠田さんが「翔べ！ガンダム2017」でモデルを変形させてやっているのと聞いて、だから格好良

いんだ、とすくく納得したし衝撃を受けた。『G40』では曲を曲げたり伸ばしたりではなく、関節なりに最初からそういう機能を持たせてデザインされたガンダムを、機能を使いながら、「いかに恰好良く描くか」という別の課題があった。

CGでMSを作る際の試験的な要素を盛り込む

「G40」はそのような経緯で参加することになったのですか？

松尾 私が参加した時は奥山清行さんのオリジナルガンダムが見られると思っていましたが、最終的には「ガンダム」のリファインをするという話になりました。だから映像も「翔べー」ガンダム2017の延長上で実験的な企画としてやらせていただきました。

松尾 私もG40のデザインに聞いているとお聞きしました。松尾 外観に関してはあまり口を出さず、奥山さんがいいと思うものをもらっています。ただ、「親んだような目にしてほしい」ということや「顔のひししを小さくしてほしい」という話はしました。ひししが大きいとちよつとした角度で目が見えなくなってしまう。作画ではウソがつけますが、CGでは意外とネットになる部分なんです。RX-78はそもそもひししがかなり小さいですしね。

「一番注文を出したのは関節です。ガンダムの関節というところは、今はプラモデル準拠といった部分がありますが、それとアニメを作る上では幾いところがある。「翔べー」ガンダム2017のルックスなものが、普通でCGで作るとなるんだが、普通にCGで作るとなるのと腕の四角い面がいつもきれいに並ぶようにしておかしくなりつてしまう。だから「ひねつたりしても腕のカーブがきれいに振れるように何か新しい構造を工業デザイナーとして考えてほしい」とお願いしました。完成させるものが映像なのだから、映像から逆算したものをメカデザイナーの段階で少し盛り込んで、映像を作りやすくする。もちろんそういうことをやりすぎるとつまらなくなるので、そのバランスは整えていくことをしないといけないです」

「G40」の前腕のひねり関節や、腰アーマーを動かさない股関節回り、既存のガンダムには見えない構造で面白いです。松尾 「G40」の最初の打ち合わせの時に、プラモデルを映像にするのか、映像化してプラモデルにするのかという話をしたんです。まず映像があったらそれからプラモデルを作るなら、映像のデザインを優先させてくれなかつた相談しました。現場によつては「ランナーの都合があるからこの色を変えられないか」と言われたりするところもあって、映像を作る側としてはやはり思うところはあります。でも「G40」はビジュアル面、SPRITSのビジュアル面、BANDAIの方も毎週打ち合わせに参加して話が出て、そういう部分については話がたくさん出てきてたつたので、クライアントとしてだけでなく技術者として色々なアイデアを出してくれたんです。彼もアイデアはたくさん持っています。でもすでに評価のできているフオームマップがあるものを変える必要があるのか」とか、「こんな要素を入れるでガンダムとしてユーザーに受け入れてもらえるか」という葛藤があつて製品に必ずしも盛り込めない。そういう意味では「G40」はプラモデルも冒険していますね。

「翔べー」ガンダム2017は制作がものすごく大変で、TVシリーズのようにな大産出には向かない作り方です。画が描ける、わかる人がCG業界では多いけれど、きんどうのお話もさうではないこともわかつたから、モデルの段階でポーズを簡単にしてくれるよう、セッティングである程度つづいておける外装のラインと関節構造はほしいというお話も。腰のアーマーを分割構造にしないでくれというのもしつてます。実はホビー事業部さんが既存のガンダムを使って関節だけ新しい

G40の構造を取り入れたものを試作で作ってくれたんです。それはびっくりするくらい安彦さんのガンダムのシルエットが再現されていた。あれは発売してはいいくらいです。カクカクなガンダムでも関節の構造を変えるだけこんな変わるのか、ということがよくわかりました。これは何かMSのデザインを考えた上でヒントになることが多かつたですね。

「フリスト」世代が引退した後にも「ガンダム」というブランドが残るかどうかが重要なことだと思っています。「G40」も「翔べー」ガンダム2017もそういう方法論なりの探る。費のように見えるが、2つの作品を作る上で何か感じたことはありますか？

松尾 ガンダムブランドの存続という意味では、一番大事なのは子供向けアニメからガンダムに移行する間だと思っています。子供がアニメを見ていう時期があるけれど、そこから先もアニメを見続けられるかどうかのハードルがあつて、ここをうまくやらないとガンダムを通過してしまう。大人も子供も見て面白かつたというところがガンダムのすべてのきつかけだったと思うから、その重要なところを外したらいけないと思います。だから時々思い出しように子供にも受けそうなカラーリングにしてみたいね。「G40」も最初はグレー

一色に近いとても渋い色だったけれど、それではダメだと。ガンダムのトリコロールにはインパクトがあつて、動いた時に目で見えかけやしないか、メリツトがトリコロールのそこから先、もう少し大人になった時にリアルタイプのものがあるのはいけれど、やはり子供のためのものが必要なんです。篠田 私は「G40」の制作には都合が合わなくて参加していないのですが、でも、CGが目指していたアニメをきちんとやらせてくれる、というのはありがたいです。作画アニメの文化を蔑ろにして画を作るとすると、とてもCG臭いものが出来上がつてしまいます。そうではない、ちゃんとしたアニメを今後も作って行きたいですね。

松尾 映像として世に出る機会が多いシリーズだとは思っています。だからアニメを見ていう時期があるけれど、そこから先もアニメを見続けられるかどうかのハードルがあつて、ここをうまくやらないとガンダムを通過してしまう。大人も子供も見て面白かつたというところがガンダムのすべてのきつかけだったと思うから、その重要なところを外したらいけないと思います。だから時々思い出しように子供にも受けそうなカラーリングにしてみたいね。「G40」も最初はグレー

一色に近いとても渋い色だったけれど、それではダメだと。ガンダムのトリコロールにはインパクトがあつて、動いた時に目で見えかけやしないか、メリツトがトリコロールのそこから先、もう少し大人になった時にリアルタイプのものがあるのはいけれど、やはり子供のためのものが必要なんです。篠田 私は「G40」の制作には都合が合わなくて参加していないのですが、でも、CGが目指していたアニメをきちんとやらせてくれる、というのはありがたいです。作画アニメの文化を蔑ろにして画を作るとすると、とてもCG臭いものが出来上がつてしまいます。そうではない、ちゃんとしたアニメを今後も作って行きたいですね。

松尾 映像として世に出る機会が多いシリーズだとは思っています。だからアニメを見ていう時期があるけれど、そこから先もアニメを見続けられるかどうかのハードルがあつて、ここをうまくやらないとガンダムを通過してしまう。大人も子供も見て面白かつたというところがガンダムのすべてのきつかけだったと思うから、その重要なところを外したらいけないと思います。だから時々思い出しように子供にも受けそうなカラーリングにしてみたいね。「G40」も最初はグレー

松尾 映像として世に出る機会が多いシリーズだとは思っています。だからアニメを見ていう時期があるけれど、そこから先もアニメを見続けられるかどうかのハードルがあつて、ここをうまくやらないとガンダムを通過してしまう。大人も子供も見て面白かつたというところがガンダムのすべてのきつかけだったと思うから、その重要なところを外したらいけないと思います。だから時々思い出しように子供にも受けそうなカラーリングにしてみたいね。「G40」も最初はグレー

松尾 映像として世に出る機会が多いシリーズだとは思っています。だからアニメを見ていう時期があるけれど、そこから先もアニメを見続けられるかどうかのハードルがあつて、ここをうまくやらないとガンダムを通過してしまう。大人も子供も見て面白かつたというところがガンダムのすべてのきつかけだったと思うから、その重要なところを外したらいけないと思います。だから時々思い出しように子供にも受けそうなカラーリングにしてみたいね。「G40」も最初はグレー

松尾 映像として世に出る機会が多いシリーズだとは思っています。だからアニメを見ていう時期があるけれど、そこから先もアニメを見続けられるかどうかのハードルがあつて、ここをうまくやらないとガンダムを通過してしまう。大人も子供も見て面白かつたというところがガンダムのすべてのきつかけだったと思うから、その重要なところを外したらいけないと思います。だから時々思い出しように子供にも受けそうなカラーリングにしてみたいね。「G40」も最初はグレー



RX-78 モビルスーツ ガンダム
1/60スケール
1980年12月発売 2,000円(＋税)



モビルスーツ ガンダム
1/100スケール
1980年7月発売 700円(＋税)



ベストメカコレクションNo.04
1/144 機動戦士ガンダム
1980年7月発売 300円(＋税)



Interview 02

【証言録】

RX-78

BANDAI SPIRITSホビ事業部

川口克己
インタビュー

我々が生きている限りガンダムは
エポックな存在であり続ける

想像を投影するのが
ガンダムは難しかった？

最初にRX-78ガンダムを見た時、機型でアブローチしたという気持ちになりましたか？

川口 正直「作りたい」という気持ちはなかったですね。当時、僕に限らず、同世代で造形として78ガンダムにアブローチしたいという人は皆無でした。これは単純に僕の感覚なのですが、結局、ガンダムのデザインは、それまでの70年代スーパーロボット的な流れを基本的には踏まえていじりやないですか？一方で話替わりの敵メカではない量産型のザクが存在する。1つの作品で、それまでのロボットアニメと、これまでにないロボットアニメの要素が混在していたという印象なんです。

川口さんの世代は「機動戦士ガンダム」放送時、高校生でした

がザクは新しかった？

川口 ザクやジオン公国軍は色々なイメージを投影できる素材として面白かったですね。タイムミグ的には「スター・ウォーズ」帝国内の「逆襲」の公開とも同時期で、帝国軍のイメージをジオン公国軍に重ねる人もいました。小田「雅也」さんは飛行機を作っていましたから、「ゲルググはメッサー・シュミット262だよ」と仰っていました。戦車を作っていた人は「ゲルググはキングタイガー」と言う人も多かった。たつたザクは、IV号戦車か、シャーマンと言う人もいて、それぞれ勝手に自分のイメージを固めて、ザクに乗っていたというのにはあります。

川口 僕はスケールモデルを作っていたこともあって、ドイツ軍のA.F.V的なイメージをザクに持たせようとしたんです。

TVアニメにおけるRX-78ガンダムのデザインは、1979年の時点で確立している。だが他メディアではアップデートが続けられ、特にガンブラでは時代とともに大きな進化を遂げてきた。いろは(システムインジェクション)を採用したHG、ターニクホイントのMG、そして昨今ではG40やBEYOND GLOBALと様々な試みが続く。BANDAI SPIRITSホビ事業部でその進化を見続けてきた川口克己氏に、RX-78とガンブラの裏話を語っていただいた。

せていました。当時、僕らが模型を作る時のモチベーションをどうやって維持していたかといえ、自分が好きなもののイメージを固めて作るわけです。それは、作る人がどんなものを好きかによって変わってきますからね。

川口 そうですね。勝手にやる余地はないんですよ。でも作る必要はあるんです。要はTVのシーンに再現する時、シオラやビネットにするのであれば、相対する存在がないと画が成立しません。ザクが作りたいけど、相手として思入れとは別にガンダムも作るという感じ。

川口 象徴的なのはシャア専用ズゴックがジムの服をアチ抜くあの場面(第29話「ジャブロー」に散る)です。ブームの時は、どこに行っても見ましたから(笑)。結局、最終的にビネットやジオラマを作る時だけに限らず、連邦軍という相手は常に意識して、どうにもなりませんでした。僕もランバルのグフを作りましたけど、やっぱり向かいにガンダムがいる、というイメージがありました。まあ、あそこなんです。『シーンを作る上で、必ず必要とされている存在』というのが、当時の自分

MG RX-78-2ガンダムVer. Ka
1/100スケール
2002年12月発売 3,200円(+税)



HGUC No.021 RX-78-2ガンダム
1/144スケール
2001年3月発売 1,000円(+税)



MG RX-78-2ガンダム Ver.1.5
1/100スケール
2000年6月発売 3,000円(+税)

デルが欲しかった。ガンダムも整備ハッチを開けて中に何も入っていないのでは、ちよつと世界が広がりませんか。

——作って中が見えなくたって、「こうなっているんだ」と構造がわかるのは大事ですね。

川口 そうですね。それが多分、プラモデルで本来大切な部分なんです。そこは「サイドバータイ」に任せれば」という意見もあるかもしれないですね、キャラクター物は権利がありますからね。それはホビー事業部でやらないといけないという意識でした。

最初のHG（ハイグレード）が出た頃は「いろいろプラ」で、「ここまで商品ができるんだぞ」という技術力アピールの側面が強く、リバイバルへの意識はあまりなかったと思います。お客様からの期待感はもちろんありますが、やっぱり当時は「TVシリーズで今度どんなのやるの？」という方向性に大きく気持ちは動いていたよう。

一方MGに関しては、TVはTV、リバイバルはリバイバルという感じで、各ターゲットで完全に分けて考えるようにしました。

——具体的に、どのようなプロセスで進められたのでしょうか？

川口 要は1/100スケールでガンダムを新しく作る、ということなんですが、企画を進める前に、

具体的には僕らの中である程度落としどころを決めておかなければいけないでした。ですから1ヵ月ぐらいかな、僕も静岡の工場にずっと行きっぱなしでしたね。開発、設計の人たちにも入ってもらって、ずっとミディエイングもしていました。ある意味、合図もしていいえ。なぜ静岡なのかといえは、成形品がいっぱいあるから、というの理由の1つでした。そこで色々なパーツを組み合わせたというイメージで、「こんなイメージだ」というイメージを作って、具体的な形として進めました。

——「ホビージャパン」誌上で開発経緯が追われたことも、ユーザ的には大きな話題になりました。

川口 「機動武闘伝Gガンダム」の時から、ホビージャパンさんに通う頻度は高かったです。特に初めの宇宙世紀じゃないガンダム作品ということで、「どうやって展開しようか」という話を当時の佐藤（忠博）編集長と何度か打ち合わせを重ねました。その流れでMGの展開にも繋がっていったのです。自分自身「TVシリーズ」と同じ流れではやりたくない」という気持ちと、当時の直虎の上司から「連載を取れるぐらいの内容じゃない」と、この商品の魅力は伝わらない」という言葉で、誌上での開発連載という形になりました。

——非常に冒険的な企画でした。

川口 佐藤さんと面識もありましたし、純粋に模型が好きでな方だったので、話がしやすいかったです。から、「どうせ、渡辺君や井上さん」という感じで、渡辺君や井上さんといった外部スタッフ陣との打ち合わせもホビージャパンさんでやりました。それが記事として掲載され、それを見た読者の方も同じような感覚を抱くことができる。「一緒に作っている」という気持ちを持ってもらえたのではないかと思います。

——特にMGのムーブメントは、ガンダムファン、ガンプラファンが活躍のきっかけになりました。

川口 ユーザーさんには「あるある」と一緒に、「ああ、ガンダムってさだよ」という点を感じて、付き合ってもらえた部分はあると思います。そういう意味では本当に商品が店頭で並ぶ半年前から、ホビージャパンさんと連載をやらせてもらったのはありがたいです。半年の間にファンの方の間で口コミで情報伝が広がっていったわけですが、「なんかガンダムに15年付き合っている途中に向けたガンダムが出るらしいぜ」という話題が浸透していったのは良かったですね。

ガンダムという存在はエポックであるべき

MG自体は、ガンダム15周年

川口 佐藤さんと面識もありましたし、純粋に模型が好きでな方だったので、話がしやすいかったです。から、「どうせ、渡辺君や井上さん」という感じで、渡辺君や井上さんといった外部スタッフ陣との打ち合わせもホビージャパンさんでやりました。それが記事として掲載され、それを見た読者の方も同じような感覚を抱くことができる。「一緒に作っている」という気持ちを持ってもらえたのではないかと思います。

——非常に冒険的な企画でした。

川口 佐藤さんと面識もありましたし、純粋に模型が好きでな方だったので、話がしやすいかったです。から、「どうせ、渡辺君や井上さん」という感じで、渡辺君や井上さんといった外部スタッフ陣との打ち合わせもホビージャパンさんでやりました。それが記事として掲載され、それを見た読者の方も同じような感覚を抱くことができる。「一緒に作っている」という気持ちを持ってもらえたのではないかと思います。

——非常に冒険的な企画でした。

川口 佐藤さんと面識もありましたし、純粋に模型が好きでな方だったので、話がしやすいかったです。から、「どうせ、渡辺君や井上さん」という感じで、渡辺君や井上さんといった外部スタッフ陣との打ち合わせもホビージャパンさんでやりました。それが記事として掲載され、それを見た読者の方も同じような感覚を抱くことができる。「一緒に作っている」という気持ちを持ってもらえたのではないかと思います。

RX-78-2 GUNDAM Ver.G30th



■お台場の潮風公園のイベント会場などでは、実物大立像の台座が付属する限定ガンダムも発売された。



HC RX-78-2ガンダムVer.G30th
1/144スケール
2009年7月発売 1,200円(+税)



MC RX-78-2ガンダムVer.2.0
1/100スケール
2008年7月発売 4,200円(+税)

というプロジェクトの一環でしたが、その中でガンダムのイメージは変わりましたか？

川口 うーん、変わるんですけどね、やっぱりガンダムを作るといふのは、エポックでなければいけない、という点は意識としてあります。たとえば製造技術や資源素材もそうですが、ガンダムはそういった革新的なものを真っ先に取り込んでいく対案です。

今はMGだけではなく、PG（パーフェクトグレード）やHG（リアルグレード）などのブランドとして製品が確立され、それぞれコンセプトで技術や素材が盛り込まれてカテゴリー分けされていますけど、やっぱり一番最初に作るのはガンダムですからね。ある意味シンボル的な存在であり、それは40年変わったことはありません。

——素材も技術も進歩しますし、時代ごとに新たにガンダムが作られる意味があるわけですね。

川口 そうですね。やろうと思っただけで、素材が高くない技術もあります。それが商品リリースしていく中で、技術も進歩して、素材も安くなってきて（「じゃあもう1回ガンダムをやりたいよ」）という機運になります。それがVer.2.0だったり、HGだったり、RGだったり、という形になります。そこで最初に作るのは、

先ほど申し上げた通りガンダムなんです。新ブランドの旗揚げや技術の更新をする時、ガンダムがキーキャラクターであることは間違いないですね。今使える技術を経験して何かを作る時、「ここまでできます」という形でガンダムを出すという意識はあります。

——同じ題材だけに、技術の進化をダイレクトに感じられますね。

川口 僕らも商品を作り出す過程で、「ここはできなかった」、「やりたかったけど無理だった」、「本当はもうちょっとこまでやりたかった」という残りがあるわけです。それができるようなうたたら、当然やりたんですよ。結局、現時点での技術の集大成としてガンダムに反映していく、この流れは変わらないですね。

——やっぱりガンダムなんです。

川口 まあ当時、メインディフェンスはザク、という気持ちだったんです（笑）。MGが15周年お祭りです。最初ガンダムじゃないと不自然ですからね。ザクがガンダムを先に取り上げて、ザクは後からじつに立ち上げて、という気持ちでした。

——MGのガンダムVer.1.5は、5という数字、どのような経緯で生じたのですか？

川口 Ver.1.0はスリムで細身な体系だったじゃないですか。対してVer.1.5は非常にマ

ツシブになっていましたよね。僕自身はVer.1.5には関わっていません、他の担当者が企画していましたが、僕らとは違う世代が思うガンダムへのアプローチだったと思います。言ってみると、横型銃の旬のモデルさんが改造のポイントで、製品でやるようなイメージでしょうか。

——こういうアプローチが可能なのも、MGが革新的だと思われた要因の1つでした。

川口 そうですね。何より製品としてVer.1.5のようなものを出せた、というのは大きかったと思います。人によって感じ方が違う、というのは大切です。特にキョウキローボットのような本物が存在しない世界では、どれも正解なんです。それが受け入れられたことによって、今この方法論が続いているんだと思います。

——そう考えると初期MGから数年間の流れが、現在に繋がっているのを感じます。

川口 MGからの5年開けというの、足腰を鍛えた期間なんです。いわばコンセプトモデルなんです。ある程度「これぐらいのフォーマットで行ける」というのを提示できれば、その延長線上で展開していく、というのがホビージャパン社内でも感じていた部分なんです。そう考えるとMG以降、コンセプトモデル的なものはG30thから



MG RX-78-2ガンダムVer. 3.0
1/100スケール
2013年8月発売 4,500円(+税)



メガサイズモデル RX-78-2ガンダム
1/48スケール
2010年3月発売 7,800円(+税)



RG RX-78-2ガンダム
1/144スケール
2009年7月発売 2,500円(+税)

**変化していくことが
理想の姿かもしれない**

新しい世代にとっては、RX
・78ガンダムって、もう古くなっ
ている印象でしょいか？

RGあたりまで存在だったかも知
れませんが、それはある意味、MGが
スタンダード化して、その光を目
指した形といえるかもしれません。
どこまで変えるか、という点
でも指標になるモデルでした。

川口 変化を受け入れる上ではあ
りだと思います。その塩梅が難し
いだけで、半歩先から一歩先まで
の新しいものはOK。でも五十歩
や百歩先は拒絶反応を起こされる
これが「ガンダムの塩梅」ですね。
だからメガサイズは難しかった。
あれはメガサイズだから再評価さ
れたのであって、G2011とでも
いような記念商品だったから厭し
かったかもしれません。

そういう意味ではG40もかな
り冒険したデザインと感じます。
川口 G40に限らず、アブローチ
の仕方だと思っんです。G40
をそのまま受け入れてOKなら構
いせんが、これは模型です。カラ
ね。「100%満足していません
か？」と思っんです。「俺の10
0%を作りますよ」というのが
僕の思うG40のおいしい召し上が
り方ですね。

川口 選択が40年の間に山ほど
生まれ、モビルスーツも何機い
るから、わからないくらい増産され
続けていますからね。原点のRX
・78ガンダムも、その中の1つと
いう認識であつても仕方がないと
は思います。あまり適切な表現で
はないかもしれませんが、たとえ
ばデイズニータイルですが、たと
え作品があり、ミニキーマウ
スって別格じゃないですか？僕
らの感覚として、RX・78もそ
ういう意識なんですよ。

はじめて見たガンダムが「ビル
ド」シリーズでも、なんとなくRX
・78はガンダムの象徴的なイメ
ージとして知っているとします
か。ガンダム世界にちよつとも
足を踏み入れたら、RX・78とい
う存在に行きつく。それだけの力
を持った原点のキャラクターで
すよね。僕らもやっぱりある意味
リスベクトしつつ、存在感は間違
いないものとして感じています。

それこそ僕たち最初のガンダ
ム世代が死んだあとの話ではある
のですが「次世代はどうなるん
だろう？」という疑問はあります
ね。川口 どうなるでしょうね。(笑)
RX・78は忘れられたとしても、
「ガンダム」というタイトルが存
在し、ガンダムが発売されてい
ればいいんじゃないかとは思
います。……、それこそ映像が作
れない時間が長くなった、プラ

モデルの新製品が出なかったりと
いう状況になると、RX・78が築
いてきたイメージすら失われて
しまうかもしれない。

結局40年間、ガンダムのイメ
ージを受け継がれてきたのも、定
期的に何かしらアップデートが行
われているからなんです。ガンダ
ムはクラシックキャラクターであ
りながら、ライブキャラクターで
ある。これもミニキーマウスの
ようなイメージなんですよ。

——ここまで続けると、本当に50年、
100年と続くような予感すらし
ます。

川口 ここ14、15年くらいはグル
ープの中でも、ガンダムという商
品は存在感を示していますが、僕
が人社した時は超合金が本流で、
ガンダムは傍流だったんです。そ
れが今は本流になっています。

グループで収益を上げているキ
ャクターといえは、「ガンダム」
シリーズが必ず1位かつ位をキ
ープして、その中核にはガンダ
ムがいます。それだけ社会的にも
重要なキャラクターになっている
ので、続けるための施策は当然、
継続していくでしょうね。すか
らどんな形でも、「ガンダムは続
いていく」というのが実情です。

もしMGの企画が通らなかつ
たら、RX・78のデザインだけで
はなく、ガンダムやガンダムも
とは違った展開だったでしょうね。



HG ガンダムCG40
1/144スケール
2019年12月発売 3,000円(税別)



HGUC No.391 RX-78-2ガンダム
1/144スケール
2015年7月発売 1,000円(税別)

世代の変化とともに ガンダム像も変化する

——今やガンダムも世界的コンテンツになりつつありますが、海外ではあまりRX・78への思い入れは強くないでしょうか。

川口 そうですね。人気のある作品は「機動戦士ガンダムSEED」や「機動戦士ガンダム00」などが訴求力のあるシリーズでした。昨今の配信で見始めた層は「エルド」シリーズなども彼らの「ファーストガンダム」になっているでしょう。宇宙世紀シリーズは「機動戦士ガンダムUC」で認知度が上がりましたが、「機動戦士ガンダムTHE ORIGIN」などは海外では苦戦しそうです。

それは自然な傾向かもしれません。むしろ時代や世代、場所によって「ガンダムとはなんだ」ということに対する答えが違ってくるのかなと。RX・78に集約されるよりも、広がっていく方が可能性も増えますからね。

——将来を考えると、RX・78を凌駕する存在の登場が理想かもしれません。

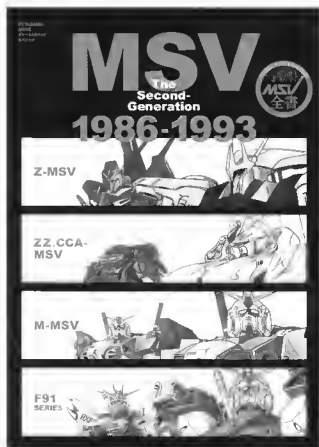
川口 時代の嗜好がありますから、10年、20年ではなく、もっと先の時代でも続いているのであれば、変わっていくのが当然です。「機動戦士ガンダム」は戦記物として始まって、僕らはミラタリーを投影したわけですが、今やミラタリーに興味がある人なんて、絶滅危惧種ですからね(笑)。もしミラタリー路線のガンダムだけに集約されていたら、おそらくガンダムはそこまで続かなかつたでしょうね。新しい世代にとってはイメーjが全然違うものになって当然でしょうし、変わらなくてもいい。困るといえるのが正直なところですが、今、静岡でガンブラの企画をやっている若いスタッフの好きなのは、僕らの感覚とはまたまったく違いますが、今は昔からあるリアルな記号を押さえて、新しいアプローzで作っていく、そしてそのうち世代が進めば変わっていくでしょう。僕がMGをやらせてもらったように、「新世代が

作りたいガンブラってこうなんだ」というものが出てくるかもしれない。それは興味深いですね。

——どんな進化を遂げるのか、果たしてそのままだか。どこまで見届けられるのも楽しみです。

川口 ガンダムという言葉は、ずっと残っているいかもしれないですが、具体的に「どのガンダム？」というのを挙げるのは難しいでしょうね。「機動武闘伝Gガンダム」のようにシリーズのイメージをガラッと変えてしまうタイトルが出る可能性もあるでしょう。「エルド」シリーズのように戦争とは無縁の作品がスタンダードになるかもしれない。もちろん可能性はこれだけではないので、まったく新しいコンセプトの作品が出て、デザインもそれに倣ったものになるかもしれません。将来的には、ガンダムのおぼろげなもののミトリコロールで兜をかぶっているというくらいのも、なんとなくのイメージが広がっている状況になるかもしれない。これは現在の状況もそうなりつつありますから、あながち間違っていないでしょう。僕が生きている間は、RX・78ガンダムは確実に残ると思います。あのデザインは保険という、安心感があがるんです。現状では誰もが納得するもので、当然ですがガンダムという意匠をもっとも示している存在ですから。

クレートメカニクススペシャル
MSV The Second-Generation 1986-1993
 A4サイズ 定価1,800円+税



クレートメカニクススペシャル
MSV THE FIRST
 A4サイズ 定価1,800円+税



森下直観画集2 鋼鬼
 HAGANE ONI
 A4サイズ 定価2,775円+税



MS図鑑 ジム
 A4サイズ 定価1,800円+税



モビルスーツ全集 13
ジオン陸戦モビルスーツBOOK
 B5サイズ 定価1,400円+税



グレートメカニック & 関連書籍シリーズ

グレートメカニックG 2020 SPRING

A4サイズ 定価1,200円+税



重戦機エルガイム
ベビーメタル 今、再び考えるHMの“新しさ”

ここがスゴいぞ! 『OBSOLETE』

- ・ガンダムビルドバイパーズRe:RISE
- ・GのレコンギスタII ヘルリ 最速
- ・アルジェントゾーマ
- ・INTERVIEWS
大島英敏 片山一良 山田尚城 他

バックナンバーをご希望の方は、
お近くの書店にご注文ください。

双葉社

〒162-8540 東京都新宿区東五軒町3-28
☎03-5261-4818(営業) http://www.futabasha.co.jp/
(双葉社の書籍・コミック・ブックが買えます)

※書店・HP以外に、電話・FAX、はがきでもご購入いただけます。
ブックサービス(営業時間 9~18時)
☎0120-29-9625(携帯電話も可)
☎0120-29-9635
いずれの場合も「社名(双葉社)、タイトル、購入冊数、
定価および住所、氏名、電話番号」をお知らせください。

グレートメカニックG 2019 WINTER

A4サイズ 定価1,200円+税

大特集
ザ・コンバットアーマー

ディフォルメロボット黎明期
『SDガンダム』誕生

- ・OBSOLETE
- ・ガンダムビルドバイパーズRe:RISE
- ・機動戦士ガンダム
鉄血のオルフェンズ ウルズハント
- ・GのレコンギスタI 行け! コア・ファイター
- ・ガルス&バンツァー最終章
- ・新幹線変形ロボ シンカリオン
未来からきた神速のALFA-X
- ・ゾイドワイルド ZERO



グレートメカニックG 2019 AUTUMN

A4サイズ 定価1,200円+税

大特集
モビルスーツ40
ガンダムシリーズにおける
モビルスーツの意義と現在

30周年! 『魔動王グランゾート』

- ・ガンダムビルドバイパーズRe:RISE
- ・機動戦士ガンダム
鉄血のオルフェンズ ウルズハント
- ・GのレコンギスタI 行け! コア・ファイター
- ・ガルス&バンツァー最終章 第2話
- ・新幹線変形ロボ シンカリオン
- ・INTERVIEWS
大河原邦男 河森正治 他



グレートメカニックG 2019 SUMMER

A4サイズ 定価1,200円+税

大特集
富野由悠季とその作品

『エルドランシリーズ』の軌跡

- ・機動戦士ガンダムNT
- ・富野のロボット飛行機
- ・新幹線変形ロボ シンカリオン
- ・INTERVIEWS
河森正治 やまだたかひろ
高木健一 他





モビルスーツ

MS図鑑

RX-78

ガンダム

2020年4月14日発行

編集

飯田幸夫 (オフィスB)
豊村保行 (オフィスB)
橋本あゆみ (オフィスB)
旭和則 (双葉社)

編集人

二之宮隆

発行人

島野浩二

執筆

河合宏之
星★慧介
市ヶ谷ハジメ
南達健一郎
やすゆきゆたか
小高正稔

発行所

株式会社双葉社
〒162-8540
東京都新宿区東五軒町3-28
営業 ☎03-5261-4818
編集 ☎03-5261-4869
<http://www.futabasha.co.jp/>
(双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます)

表紙・本文イラスト

森下直観

印刷所

三晃印刷株式会社

本文MSイラスト

船越裕

製本所

株式会社若林製本工場

カバー・本文デザイン

岡本浩樹 (water, planet)

監修・協力

株式会社サンライズ

※準丁・乱丁の場合は送料双葉社負担でお取り替えいたします。【製作部】あてにお送りください。ただし、在庫店で購入したもののについてはお取り替えできません。
☎03-5261-4822 (製作部) ※本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製・転載は著作権法上の例外を除き禁じられています。本書を代行書店等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。※定価はカバーに表示してあります。

印刷・サンライズ

©FUTABASHA 2020 Printed in Japan